川柳塔

平成八年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻八二六号

日川協加盟

No. 826

三月号

第11回国民文化祭とやま'96

川柳 作品募集要項

—山と海と 存在のロマン—

一 応募受付期間
平成八年三月一日（金）～五月三十一日（金）（当日消印有効）

二 応募規定
(1) 作品
一人各題二句詠（未発表作品に限る）
宿題（事前投句） いきいき 鑒気楼 くすり 野仏
宿題（当日句） 立つ ロマン
(2) 応募料
一人につき一、〇〇〇円
(3) 応募方法
富山県実行委員会作成の「募集要項」を御覧のうえ、所定の応募用紙を使用して御応募ください。
(4) 応募先
〒九三九—二二 富山県上新川郡大沢野町高内三六五
第11回国民文化祭大沢野町実行委員会
事務局「文芸祭」川柳係

三 選者（五〇音順）
(1) 第一次選者
（事前投句） 石川 三昌 大木 俊秀 大野 風柳 加藤 翠谷
橘高 薫風 斎藤 大雄 佐藤 良子 田口 麦彦
竹本甍太郎 藤本静港子 細川 聖夜 森中恵美子
（当日句） 第二次選者 犠野いさむ 片山 光王 小嶋 句月 仲川たけし
松岡 緑朗 山田 良行 脇坂 正夢

四 賞（予定）
文部大臣奨励賞 国民文化祭実行委員会会長賞
富山県知事賞 他

五 発表会場
川柳大会（入選発表・選評）
平成八年九月二十九日（日）十時—十五時
大沢野町民文化会館
入選作品は、作品集として刊行し、応募者全員に無料配付します。

六 問い合わせ及び募集要項請求先
〒九三〇 富山県富山市舟橋北町四—一九（森林水産会館内）
第11回国民文化祭富山県実行委員会事務局
「文芸祭」川柳係（Tel〇七六四—四四—二一八五）
〒九三九—二二 富山県上新川郡大沢野町高内三六五
第11回国民文化祭大沢野町実行委員会事務局
「文芸祭」川柳係
（Tel〇七六四—一一—一一（内六七四））

七 主催者
文化庁 富山県 富山県教育委員会 大沢野町 大沢野町教育委員会 他全日本川柳協会 富山県川柳協会 第11回国民文化祭富山県実行委員会 第11回国民文化祭大沢野町実行委員会

第20回 全日本川柳熊本大会

とき 6月9日（日）午前10時開場

ところ 熊本市民会館（熊本市桜町1—3）

宿題 第一部（事前投句・5月10日締切）

「要領」 浜野奇童 選
「たんぽぽ」 西来みわ 選
「論」 矢須岡信 選

◎各題2句・無記名、封筒に住所・氏名を明記し、投句料1000円（定額小為替・現金書留）を同封して左記へ

投句先 〒530 大阪市北区天神橋2丁目北1—11
ステップイン南森町702号
全日本川柳協会大会係

宿題 第二部（当日出句・午前11時半締切）

「枝」 外山あきら 選
「今昔」 西谷東山 選
「霧」 川路泰山 選
「方角」 橋本比呂 選

会費 3000円（昼食・記念品代とも）

観光 6月8日（土）3000円

前夜祭 同 午後6時半 7000円

宿泊 ニュースカイホテル・ホテルリンクス

申込先 〒860 熊本市八王寺町3—16 吉岡方
全日本川柳熊本大会事務局

句集二冊

橘高　薫風

ふあうすと川柳社の同人に小池鯉生という人がいた。柳歴は中学（神戸商業）で三条東洋樹・鈴木九葉氏らと作句をはじめてからのもの。

請求書鼻をかまれるかも知れず
仏にもある取巻きの烈しさよ
九ツは仲居に呉れる太鼓焼

これらは初心時代の私に感銘を与えた句である。鯉生さんは戦後自営の商品倉庫が類焼、結核の療養も重なったことから神戸の生活を棄てる羽目となり、東京での再起を計られる。浦和駅前で卵商を営み瞬く間に立派な家を建てられた。私が海士天樹・河相す丶むさんらとバラの美しい庭の新居を訪ねたのはその頃のことで、典姫という名の子牛ほどに大きな犬が子の無い夫婦に甘えていた。

薔薇芽吹く今暫くの命乞い
智恵のない子を呼ぶ声で犬を呼ぶ

その後また心筋梗塞の大病をされたり、健康を取り戻してからは、武田泰雲師に就いて七十の手習いの書を始め、一日百枚のハードな研鑽を自らに課し、日展入選までの実力を養われた。このように生い立ち以来、波乱の人生を体験される。

さてここまでが前置きで、私の言いたいことはこれからなのである。

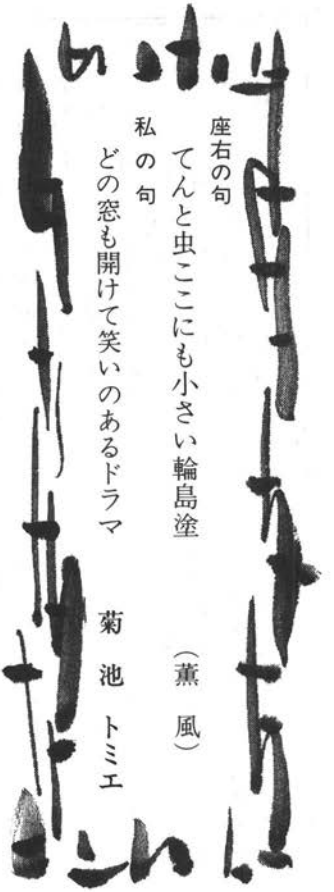
新居を訪ねた時のこと、麻生路郎先生の句集『旅人』の話が出た。鯉生さんの「出逢い」と題する次の文章がその話の様子を物語る。

私の書架に路郎師の〝旅人〟がある。亡母の故里を出た翌早朝東京駅に着いた。三十数年前の土地勘を頼りに中野区の川上三太郎先生の門を叩いた。川柳だけが頼りの一人旅であった。句は見て戴いてはいたものの初対面、上京の訳を簡単に告げた。朝食を出すようにと八千代夫人に言われ「わたしは急ぎの原稿があるから」と二階へ上られた。味噌汁が温く嬉しかった。一休みしなさい、と言われて炬燵にあたっている中に車中の疲れから寝入ってしまった。昼近く眼を覚ました。「都内に門下の多い周魚に逢え」と言われた。辞去しようとして玄関脇の書棚に〝旅人〟が二冊あるのが目にとまった。路郎先生には鳴尾に住んでいられた頃教えを受けたことが思い出されて、「二冊ありますね」と言うと「一冊持って行け、今は手に入り難いそうだから」代金は受け取って下さらなかった。

私は近頃句集の発刊を知る度、心ひかれる人のものは二冊以上需めることにしている。この時、三太郎先生から受けた御厚志が忘れられず、又その時、これは一生見ならうべきことだと感じた故もある。人の心はこうして人に伝えるものだと今も思う。

一月の本社句会で『古稀薫風』を二冊買って下さった方にそのわけを尋ねたら、いい句集なので一冊は街の図書館に寄贈するとの言葉が返ってきた。私は咄嗟に鯉生さんのお話が脳裏に甦った。

いい先輩いい後輩を持ったものだと胸を熱くしながら帰途に着いた。



座右の句
てんと虫ここにも小さい輪島塗　（薫風）
私の句
どの窓も開けて笑いのあるドラマ　菊池トミエ

川柳塔三月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　句集二冊……橘高薫風…（1）
お静かに……安藤寿美子…（2）
川柳塔（同人吟）……橘高薫風選…（4）
自選集……（42）
川柳の群像　廣江天痴人……東野大八…（46）
古川柳　柳籠裏二篇研究（二十八丁・三十丁）……（48）
水煙抄……西田柳宏子選…（52）
秀句鑑賞「同人吟……西出楓楽…（50）
　　「水煙抄……山本義子…（75）
渺湖抄……小出智子選…（76）
大空のこころ（62）……橘高薫風…（79）

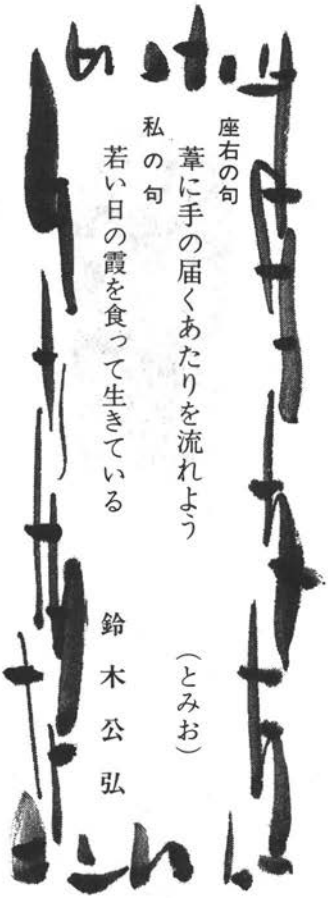
お静かに

安藤寿美子

「お静かに」と言っても「騒ぐな」と言うのではない。それではまるで強盗である。

興福寺貫首多川俊映師の同名のエッセイを読んだ。師が他家を訪問され用件を済ませて辞去される時、その家の夫人から「どうぞ、お静かに」と言う挨拶をいただかれ、師の父君が来客を送り出される時に必ず言われた、この近頃は聞かれなくなった、言葉を懐かしく思い出されたと言うのである。これは仏教語の「静慮（じょうりょ）」から来たもので、心をひとつのものに専注して乱れないこと、から導きだされた言葉だそうである。実は仏家でなくても私の父も生前、客を送りだす時には「お静かに」と、会釈していた。小さい頃の私は何となくこの言葉が好きであったから、多川師のエッセイに心ひかれたのである。私も一度この挨拶を頂いたことがある。それは川柳をはじめたばかりの頃、何の用であったか、故戸田古方先生をお訪ねした帰り、門口で先生から「どうぞ、お静かに」と、お見送り頂いた。私はうれしくて「ありがとうございます」と

茴香の花……八木千代選…(80)
「艶」……園山多賀子選…(82)
一路集「乗る」……川崎ひかり選…(82)
「ワープロ」……政岡日枝子選…(83)
初歩教室「開く」……吉岡美房…(84)
各地柳壇（佳句地十選／新家完司）……(86)
二月本社句会……(100)
■各地句会だより　川柳塔おおとり……上田俊路…(104)
■句集紹介『花の館』鑑賞……木本朱夏…(105)
柳界展望……(106)
三月各地句会案内……(107)
■編集後記……(108)



座右の句

葦に手の届くあたりを流れよう　（とみお）

私の句

若い日の霞を食って生きている　鈴木公弘

お答えしたと思う。この言葉は、ドアの外に去った人の上をご無事であれと思う、祈りがこめられているのである。ダンプに轢かれて死んじまえとは決して思わないのだ。船乗りの「ボン・ボヤージュ」、航海の安全を祈るのとおなじ他人に対する優しい祈りのこころを昔の人はこの言葉に託したのだろう。

今だって、家族のだれかが外出する時、ことに子どもが出かける時、「気をつけてね」と言わない母親はいない。外出する家族の無事を祈らぬ人はない。言葉が現代社会に適合するように変わっているのだ。今時の若い人なんかに、もし「お静かに」などといったら「なんやとォ、途中で大あばれするとでも思うとんかい！」とすごまれるかもわからない。

いつだったかの本社句会の帰り、地下鉄で本間満津子さんとご一緒になった。東梅田で降りてからエスカレーターなどと言う物騒でずぼらなものには乗らず、階段を一段一段リズミカルに白杖で触れながらお手引きのお嫁さんとご一緒に昇っていかれた。そのすぐ後に従いながら私は何となく感動していた。出口を出てお別れする時、私は思わず満津子さんのお手をとって「どうぞ、お静かに」と申し上げた。満津子さんのお手は、やさしくもすがすがしいお手であった。

橘高薫風選

鳥取市　武田帆雀

注連飾り我九代の浮き沈み
胸を借る胸を出してはいけません
頷いてばかり頼りになりません
六十路坂　苦渋の選択まだ続く
飛驒傘をかむり二尺の雪に立つ
早出した妻の足跡雪が舞う

岡山県　小林妻子

隣から流れる倦怠期の匂
目の毒と言う裸体画も薬にし
火宅から静かに汽車が出ていった
カタツムリも雨戸をしめている吹雪
女課長の机を拭いている男
煽ち貧乏　現世はまだ銭がいる

唐津市　田口虹汀

丙子へ如渡得船の棹をさす
養老の滝を飲み干す龍の夢
すぐ翔べと言うても無理よ籠の鳥
求愛の鶴のポーズは美しい
大股も小股も忙し歳暮の音
少し日が永くなったとお茶をいれ

富田林市　池森子

朱い実がひとつ残っている祈り
風花の向こうは忘れ去ることに
落書きが熱くてふる里に集う
きっちりと蓋をしたがる大人たち
鮮血がにじむ無心になれなくて
美しいお客が一人あれば初春

鳥取県　江原とみお

元日や八十歳の鉄亜鈴
居酒屋に痼納めてお元日
双六の上がりにござるお釈迦さま
世渡りのバランスとっている尻尾
みみずく啼いた農を継ぐ気になった
陽の沈むころ美しくなる港

富山市　舟渡杏花

きさらぎの猫　丹念に顔磨く
一つしかない命賭けると言われても
拷問のよう風雪に耐えています
ながらえて眼福一つ冬牡丹
凡愚の子は凡愚でつつがなし
そばを打つ婆さまと石臼びったんこ

和歌山市　池永正雄

濃淡の墨で色気を滲み出す
露天風呂　至福の二字がふと浮ぶ
腹の虫へ酒屋が新酒提げて来る
記念写真　最前列の脚線美
スーパーのレジで互いに照れ笑い
ひる時の箸割る音の楽しさよ

尼崎市　春城武庫坊

暮れにまだみたらしだんご食べた母
まだ話すそぶりの母の口湿す
母はもう聞こえぬ耳に鳩時計
子孫曽孫の祈りに乗って母の旅
いつもさすった母の掌の骨選り拾う
母いまどこに京は粉雪が舞ってます

米子市　青戸田鶴

土壇場の勇気を少しずつためる
声かけてはげまし合おう友たちよ
私も枯れないように水を呑む
潮どきをいつもみている父の背
父の背を老残などと思うまい
この国の先の事など考えぬ

竹原市　小島蘭幸

わたくしに一番似てるのは妻だ
凭れたら凭れかかってくるいのち
サーカスが去って粉雪舞う街に
街は凩　誰も焚火をしていない
少し怒らせると面白い男
石段の一番上に立つ　祈り

西条市　片上明水

餅送る宛名皇居のすぐ近く
酒やめてからの話が水臭い
日の丸へ涙流した時もある

居酒屋の愉しき友の名を知らず
状差しの督促状は奥の奥
貧しさを包んで村の続く雪

唐津市　久保正剣

拍手して迎えられてる辞任劇
情報を隠す知恵ならあるもんじゅ
死刑廃止オウムを知ってから揺れる
弁護士の出る幕がない上意討ち
宝石店から来たことがない賀状
愛欲に溺れて貢ぐオンライン

海南市　三宅保州

別れたと言えば安心する他人
役所には届けなくてもよい別れ
驚異的なスピード持っている噂
登記簿に一字一句の無駄もない
パーカーに拘っている戦中派
廃校の教室でするクラス会

香川県　池内かおり

パチンコ屋通り抜けして焼肉へ
冬ごもり今コーヒーに凝っている
ガン予防　大いに笑い給え君
羊羹の薄さを言っちゃいけません
ロスの娘とごまめ黒豆談義など
嫌な日もあろうに回る洗濯機

砂川市　大橋政良

雑踏という保護色を身にまとう
ひと呼吸置いたが何も出てこない
日めくりをめくり忘れた有頂天
以下余白　風は柩に向いて吹く
なんとなく壊れたネジを巻いている

五所川原市　斉藤劦

校長の顔で弔詞を述べている
そして神戸　歌って除夜の鐘が鳴る
新雪を掻く合掌の姿して
凧が舞う青いお空を大切に
御先祖はダムの底とや村おこし

弘前市　相馬銀波

春よ来い娘等の内定引きさげて
勝利者の酒を知らないカタツムリ
擦れ違うだけで終らぬ白昼夢
人を待つ負け犬の夢捨て切れず
二転三転　紙飛行機も僕に似る

弘前市　高瀬霜石

のど飴を下さい敵が多すぎる
雨垂れが性善説をぽつり説く
生きていることが親孝行だろう
札束の匂　背骨がきしみだす
どの道を行こうがいのちひとつきり

松原市　小池しげお

他人から見ればなんでもない泪
亡父がした通りついたち十五日
へそくりを出し合い夫婦恙無し
幸運に恵まれている歯の白さ
ソロバンの玉の一つで纏まらず

吹田市　古川喜美子

私を一瞥　白鳥去ってゆく
ピカソの顔ちょっと組み直してみたい
雪のせて　ひょろりと老いたさるすべり
しゃぼん玉やさしい順に消えてゆく
肩組んで端の山から眠って行く

豊中市　田中正坊

初春や七福神が屠蘇祝う
文楽を見て旧友と新春を酌む
読み始め「孟嘗君」と親しまん
大辞典　四冊持ってもの知らず
小気味よき女の啖呵　SHOW GIRL

尼崎市　田中薫

噴水のポカンと冬の空に向く
冬の水すくうてのひらより老いて
落ち合って夕陽はげしき横断歩道
地下街の音に紛れて訣れたり
本棚のコトリ傾く深夜の聖書

尼崎市　春城年代

本葬の仕度に重い衣紋かけ
寒菊の白さ姑の死化粧
枯れに枯れて姑の胸奥閉じたまま
雑踏に親という名の人おらず
胸中に秘めし来し方あふれるよ

西宮市　奥田みつ子

陽がさして急に枯野がざわめいた
白バラに華やぎもらう備前焼
月青く地の揺れ重くよみがえる
時々は同じ意見になる夫婦
梅が咲く　無念の友よ蘇れ

西宮市　林はつ絵

気付かずに誰かにおんぶされている
ありがとうが上手に言えて狡くなる
高価いのにおどろきうまいのに驚き
お宅でもお風呂掃除はご主人ネ
感謝して被災一年水を飲む

和歌山市　木本朱夏

梳る髪に重たき去年今年
耳鳴りが冬の鏡のうしろから
幻聴が始まる母の忌の近く
私刑かもしれぬ枕がふたつある
ジェラシーがキラリ光った仲間割れ

倉吉市　松本よしえ

小心な虎だ風にも身構える
百歳にゆっくりしなと労られ
好きな人が隣とばかり話する
抜け道を先に通ったのはおんな
あしたこそ真っ赤な靴で踊ります

米子市　林荒介

去年から余震を曳いたままでいる
賀状にはせめてせめての願いごと
忘年会新年会も同じ顔
釣り上げた魚を海に放している余生
満天の星をさまよう櫂の音

米子市　野坂なみ

決断へ父の額が動かない
迷うたびいつも灯明つけている
歳時記に背いて見たい蕾たち
学び舎が消えた跡地に碑が一つ
万葉がな武子の歌は哀しかり

鳥取県　新家完司

銀河鉄道に連結される終電車
麻雀に負けてそのまま初詣
元日の始発電車を粛と待つ
プラットホームの端から拝む初日の出
島田祐子のアルバム聴いてお元日

鳥取県　土橋螢

いのちの果てはひとひらの雪となる
五感みな無にしてお神酒受けている
太陽の光に右往左往して
悲鳴にはあらず猫には猫の恋
時間を止めて仏壇の扉を開く

唐津市　仁部四郎

湯豆腐が好きです父の乾児です
証言の合わぬ部分に神が居る
ためらいのすきま無念が詰めてある
髪型を変える昨日は昨日まで
正面に三日月　俺は鹿之助

唐津市　山口高明

民族の誇りは捨てぬチョゴリ着る
バスロープだけでふたりの小宇宙
味方から撃たれる恐怖自衛隊
竹箆でママゴトしてる考古学
止まり木で暮らしの垢は見せぬ女

弘前市　蒔苗果林

孫の文　読む順番は譲れない
ひとのことおかしと思う春可笑し
思い出の花生け一人春過す
雨風を知らぬ温室菜を好く子
背肉子に胸孫にあら妻と喰わん

弘前市　佐治千加子

挑戦状のように聡身打つ吹雪
筋書きが切れて尾灯は遠ざかる
ヒマラヤ越え鶴はばたかず風となる
迎えうつもの何なりや包丁買う
旅に遊ぶ異国やさしい男たち

横浜市　菱田満秋

ジャンケンの強い女に惹かれてる
寸法は背筋伸ばしたものをとり
自発的断酒の裏を探られる
かかってきた電話　切られぬよう話す
病人は月月火水木金金

大阪市　西出楓楽

それからの妻が放さぬ首ねっこ
下り坂やたら夕陽が目に染みる
哲学者にも詩人にもなるトイレ
黒ビールちょっと気取ってみたつもり
つつがなくすべて外れたジャンボくじ

大阪市　河井庸佑

定年が再びやって来て元気
さて辞めて明日のわが身の置き所
職退けば退いたで待っていた仕事
小細工がほどける糸も縺れさせ
得を取るための損だと悔いはない

堺市　桑原道夫

元旦や直情というなさけあり
電車まだ来ない遮断機の垂れ加減
上がり框じかに鞄を置かれたり
喧騒に遠く道頓堀に消ゆる雪
ヒヤシンス胸むらさきに冷えにけり

豊中市　吉田あずき

孫誕生この世のニュース恥多し
みどり児の重みいのちの重みだけ
寒の月ぽろり一皮むけて出る
異常気象されど暦もまた確か
太郎逝く爆発もせず塔孤独

吹田市　山本希久子

去る人は振り向きもせぬ雪になる
米寿の母の後ろ姿が寒そうだ
木枯しやじゃんけんをして酒買いに
かさかさのてのひら父の三回忌
骨拾う箸には詫びることばかり

吹田市　栗谷春子

本日休業と書いておきたいこの寒さ
大雪に空も鬱憤晴れたろう
ひとごとのように正月過ぎてゆく
日が昇り何をきらめく陽のしずく
予定表それは丸めて捨てました

高槻市　川島　諷云児

世間体繕う糸が通らない
礼智信いつも心の隅に置く
てにをはが未だこなせず辞書を繰る
まっとうに生きるとこの世住みにくい
割り切れば脇役もよし軽い視野

寝屋川市　柴田　英壬子

固いこころほぐそう桃の花も咲く
真実をすこしもらえば足りる幸
お白酒　亡母とわたしの盃に
スパッツを穿きたいけれど膝の腫れ
愛用の辞書で枯れてるクローバー

東大阪市　指宿　千枝子

元日の空ふるさとへ続くなり
初空やカラスの声も明るくて
快晴の一月七日主婦日和
孫娘アンネの日記手放さず
窓際の席で見ている過去未来

和泉市　岡井　やすお

初夢は楽しパステルカラー調
沖縄で日本憲法試される
国債をどんどん遺す少子国
わがとしを孫に聞いてる楽隠居
思い切りぼやいておこう世紀末

藤井寺市　吉岡　美房

雪の朝　犬の元気に引きずられ
正月のみかんと昔語り合う
ふるさとの鐘が聞こえる冬茜
日々出合う裸木日々に新たなり
福笹は幸せそうな人ばかり

松原市　玉置　重人

じわじわと嫌な話が胃に溜まり
数の子とみかんが息子から届き
一年の計は満々たるやる気
遮莫十人十色也
パチンコも本屋も素通りがむつかしい

羽曳野市　榎本　吐来

元旦の鏡に六十路照れている
信仰の列へ退屈紛れ込み
吝嗇の合意が出来た熨斗袋
四十年添うて女がまだ見えず
見栄っ張りの顔のうのうと組閣劇

羽曳野市　吉川　寿美

筈のない声が聞こえる風の音
未練かな昨日がどうにも捨てられぬ
可愛らしいウソ精一杯にミニトマト
無欲にはなれぬ椿の落下音
仮の世のボタン一つのかけ違え

人として反対せねば破防法
木々の芽が吹けば私も芽吹かねば
漫才のコンビのような君と僕
女神にも夜叉にもなれる妻といる
約束を果たせぬままに春が来る

岸和田市　高須賀　金太

ゴールしたあの一瞬が喜びだ
祖国踏む孤児に私も詫びている
デイゴ咲く島をいつまで踏みつけに
ちっぽけな本に人生変えてみる
雰囲気はいいがコーヒーしか出ない

岸和田市　岩佐　ダン吉

饒舌の急に流れの変る咳
孫の熱　府で二番目のソ連風邪
まだ地球　冷戦以後も歪なり
雑魚の群れ将に苛烈な渦にいる
一徹な磁石に腹を立てている

富田林市　片岡　智恵子

てっぺんの柿はとってもうまそうだ
蟹たべに行く話　蟹たべながら
十二月　物干し竿屋やき芋屋
一つ二つ指が足りない数えうた
それからを聞いてないから幸せに

富田林市　松本　今日子

思い出は亡き師と雪の柚子の里
老松を倒して過去を振向かず
夫婦それぞれ違う時計で冬を越す
いつか自然に忘れられてる古帽子
身の鱗いくつ落せば春になる

西宮市　門谷　たず子

十年日記　前途洋々たる心地
未だ取れぬ逃腰恥じる一・一七
雪の日も優雅にせめて傘の色
受診の日　自分に気合いかけて出る
戦跡の吸い込まれそう空の青（フィリッピンで）

西宮市　秋元　てる

あの人もこの人も無事年賀状
人形が笑うわたしの泣き顔へ
濃むらさき歴史の中の佳人たち
大臣の椅子　回転ずしに似てるなり
歳月や更地の彼方日が沈む

西宮市　西口　いわる

平成七年の呪縛がとける初日の出
男五十未来のパイプ太くする
新年の無言電話を叱りつけ
サンパツヤで手垢の付いた漫画読む
満腹になると芝居にあきてくる

川西市　氏林　洋敏

加古川市　吐田公一

左遷地の方が気に入る飲み仲間
働いた日の一ぱいのうまいこと
少し離れて妻の温さがよくわかり
梅林の香りが届く復興地
流氷でつながる島が渡れない

京都市　松川芳子

太陽の塔　涙する太郎の忌
申し訳なさそに母の車椅子
エアメール雑煮くわいと里心
行きずりの犬にも笑顔市場籠
衣食住足りて心にあるひずみ

京都府　稲葉冬葉

初詣　子が居て孫が居る常夜灯
血の絆わかちあう日の伯父を看る
冬景色　逢いたい人を偲ばせる
くっきりと雪の足跡　始発駅
空白の年月埋める笑い声

奈良市　宮口笛生

狂い咲く桜の如き恋したし
七十と無職と書いて佗しけり
古稀と言う大きな歳をもらいけり
贅沢の時間を持ってのむ珈琲
二行詩のように終った日の日記

和歌山市　福本英子

望みまだ昇り足りない凧の糸
ロッカーで一夜泊ってきたリンゴ
吉宗ブーム去って残ったゴミの山
鐘撞いて平成七年追っ払う
クリニックばかり目に付く街が病む

和歌山市　福井桂香

唱題の声で始めるお元日
元旦や箏曲ながしうどん売る
湯上りの妻に三十路の香が戻り
真夜中の足音ふゆの通り雨
パチーノと言うから何処と聞き直し

和歌山市　山田高夫

露払いだけの一生だった父
子育ても終えてぐらつく糸切り歯
相性が合うB型の妻と居る
判をつくだけの机が場所をとり
負けて勝つ自信その場は折れておく

和歌山市　細川稚代

訥弁な師へ餞の弔辞読む（故若宮武雄さんへ）
道草が教えてくれた人間味
丁寧に顔を洗った三ヶ日
約束をくれる人あり紅の蓮
鍋囲み小半日ではまだ足りず

和歌山市　堀畑靖子

渡りきる思い直しの無い橋を
立ち直らなければ先ずは胃を満たす
弁解に笑えるような嘘があり
本腰を入れよう松もとれました
悪女だと言われてとくと鏡見る

岡山市　花田たけ志

柄に無い列に入れば番が来ぬ
告白をしてから目線低くなる
迷わずに飛べば明るい視野がある
掛け声を己にかけている余生
打つ人の心で響く大太鼓

岡山市　時末一灯

明日あると疑いもせず酔い痴れる
病む身にもかっちり爪は伸びてくる
高齢の夢にも色があっていい
さあ今年　怒らぬ日本どこへ行く
孫四人きた日は仮設幼稚園

岡山県　矢内寿恵子

隠やかな年であれかし初ごよみ
何よりの年玉この掌に初曽孫
産声が既に摑んだ新世紀
被災地に少し和んだクレヨン画
勿忘草　時折咲かす胸の奥

下関市　石川侃流洞

ヨチヨチとおてて繋いで春の唄
ファイトファイト五輪へ若い血を燃やし
面白い人ねと女蝶の策に落ち
自分史を秘めてた亡母の古箪笥
竹踏んで老いがファイトを盛り上げる

米子市　川上より子

クライマックスで猿になってる猿まわし
里帰りの子にいそいそと生姜酒
雪しまき民話も鍋の中で煮え
TV切れば音なき雪の小正月
旅帰りの女に日脚のびてくれて

米子市　田中亜弥

わたしの袋　毒も薬も入れてある
姿見もベッドもあって並のくらし
この頃の脳はわたしに従わぬ
夢いっぱいで小箱変形してしまう
はるか沖に指定の場所が一つある

鳥取県　田村きみ子

七十の峠　蛸つぼから出よう
あばら骨撫でて娘を嫁がせる
手品師のように紅梅咲いてきた
両肩を窄め終列車から降りる
天下ごめん隣の松がこんにちは

忘れ物ぼくの気持ちを弄ぶ
ほころびた地球に効くか塗り薬
正直な人によく効く塗り薬
縫い物のような大臣また揃え
国という厄介ものに泣かされる

鳥取県　谷口次男

五十歳になる元朝の深呼吸
知らんふりするのに丁度よい雪だ
賀状返礼　闘いは始まった
年始回りのダイヤ乱れて酔い潰れ
本年もよろしく頼む縄のれん

鳥取県　鈴木公弘

懸命に歩いて余生暮れなずむ
決意せぬ男にすわる席がない
カットした意見の中にある本音
タクシーに尽きぬ名残りを急かされる
白昼の夢を見ていた敗戦記

鳥取県　上田俊路

ふくいくと花びら餅の香をふくむ
空気とは不思議　心を左右する
思い出は解けず心に降り積もる
優しさを全部あげたい母に逢う
迷路から抜ける今年へ賭けてみる

鳥取県　西原艶子

竹馬に正月さんが乗って来た
実行はどうあれ決意だけはした
要注意　地震　雷　火事　女
姑さんがいつも覗き見する障子
境界を貧乏神につつかれる

鳥取県　土橋はるお

年男ねずみとり器に近寄らぬ
年金に親離れせぬ子が一人
手ぶらで来て食って飲んで愚痴を言う
いいお人だった葬儀の雪をかく
まだ若い仏で旅が案じられ

松江市　舟木与根一

エレベーター出てもう一度ご挨拶
月曜の雪から怠けもう土曜
透析の人思いつつ用に立ち
二度目から見合に知恵は借りません
筵打つ母と遊んでいたねずみ

出雲市　板垣草丘

脇役に徹し喝采夢に聞く
目礼はするが笑顔はつくられぬ
焦るから電話のベルがやけに鳴る
それらしい顔で歩いた人の道
もう少し素直に聞こう風の音

出雲市　久谷まこと

出雲市　竹治　ちかし

最後には妻と笑って事が済み
夫婦とは良きかな零親等の仲
菩薩にも悪魔にもなり母の日々
裁縫箱に僕の知らない妻が棲む
寝る楽が解って亡父の齢となり

島根県　小砂　白汀

水道もぽたりぽたりと生きている
あほう面ならべ賽銭たてまつり
とはいえど掬うすべなし流れ星
小手先の芸で一生もちこたえ
音もなく地球を愛すささめ雪

島根県　堀江　正朗

雪しんしん春のかおして桜餅
瞑想の中に人生八十五
身を守る歩幅しっかり踏む老後
半世紀　戦盲くじけず生きてきた
雪晴れ間　耳かすめたは春風か

島根県　堀江　芳子

師の電話　仲ようしいや身にしみて
いいばあちゃんになるへそくりが笑ってる
雪のずる音にも春を待ちこがれ
辛辣な批評の方が受けやすい
ずんずんと積り雪だるまは居ない

島根県　松本　文子

蓬の匂だったか病母の去った後
雪の白さに哀しきものを思い出す
死んでやる　そんな元気もあったっけ
ぼろぼろの尾羽根をたたむように傘
足枷手枷　溶けてゆきたい雪女

島根県　佐々木　鳳笙

洩瓶手によくぞ男に生まれける
初春や観音の笑み亡母の笑み
一人ぼっちの部屋を愛してハーモニカ
木枯しに押されてくぐる縄のれん
鬼になり蛇になる業を持ち合わせ

松山市　白石　春嶺

中心になる青年が村を出る
スーパーで会う女教師は主婦の顔
飛び出せと春一番が芽に合図
握りめしのおしゃれは海苔の帯を締め
いささかも芯を曲げない父の眉

今治市　矢野　佳雲

何という不思議　娘が母になる
体制に逆らうと鳴る肋骨
ぼけてないしるしタンカを切りにゆく
大家族の雑魚寝にちゃんとある秩序
ネックレス回らぬ首にある師走

熊本市　永田俊子

相剋の果てを永は蓮華なす
神さまの言葉が欲しい雪が降る
失ったもの多く遠くの海光る
おんおんと泣く浄瑠璃の深なさけ
人生はひとり旅　満員車での孤独

十和田市　阿部進

仁王様　時には座って見たかろう
社交ダンス見るとやるとで大違い
上段に構えた父に隙がない
母の味　忘れられない古希の舌
平成のねずみが猫をおそれない

弘前市　岡本花匠

勤行の香煙ゆらすちちとはは
寂しさに愚痴も供えて南無阿弥陀
うさぎ小屋　雪に埋れて温い愛
雪像の回想尽きぬ早春譜
鬼祀る部落の粛と節分会

弘前市　中山雅城

人生の西と東は紙一重
障子穴　大きくなった孫の指
如意棒に自慢足りぬと悟される
夢で食う美味いものには味がある
嘘も方便　円く収めてくれる

黒石市　相馬一花

化粧品切らし外出とり止める
下戸ですと言って飲む手を休めない
干し餅が文化遺産のように揺れ
あれほどの怒りが鎮火する月日
雪解けの小川　大蛇のようになり

青森県　西谷鐵郎

縄文の埴輪に燦と初光
平凡に生きて今年も屠蘇祝う
吹雪く夜は亡夫を恋しと雪女郎
ふる里はひっそり生きた亡父である
峠路で雲の行く方をじっと見る

仙台市　川村映輝

震の字に怯えた亥年遂に去る
お目出度い元日風邪で寝てしまい
辞書のお蔭　今日もスムーズに暮れる
年金があるから血圧上がらない
この年で世界文学繙いて

東京都　山口新子

臨終の母が寝ていた藁ぶとん（母三十七回忌）
打ち寄せる離婚の余波は娘を砕く
組む腕の大胆たるや知らぬ街
手紙着く約束白い息弾む
風雪の橋の袂にさしかかる

町田市　竹内紫錆

喪の知らせ慰めのふみ礼のふみ
断筆宣言　賀状もこれが最後です
爺は山へ婆は新車を買う望み
きちょうめん片手捕りせぬ野球から
ワープロにやや慣れ祖父をえがく父

富士宮市　渥美弧秀

一日のスタート富士を先ず仰ぐ
八十歳　時の流れが沁々と
晩年の暮しに友の訃がつづく
八十の祖父へ孫から甘い文
誕生日　妻は遠慮のネックレス

静岡市　薗田獏沓

ねずみ年マウスとラット比べられ
七彩を着て成人の夢を追う
約束を果さず落ちる寒椿
どか雪に早くも計が狂いだす
職人の手元眺めて今日が暮れ

富山市　酒井輝

窓際で一矢報いる的のへり
真打ちの話芸は客を叱り付け
何れ背を向けるむすめの独り立ち
遺すもの何も持たない幸もある
躓いた道だが慣れた往き帰り

大阪市　松尾柳右子

最高のおしゃれに酔ってる披露宴
しわ隠すおしゃれに金がたんと要る
申告の税の行き先案じつつ
陽春だハワイ沖縄待っている
嫁貰う父の格ある挨拶よ

大阪市　上田柳影

ナースにも今年も宜しくとは言えず
へそくりを数えなおして大晦日
診察券五枚そのうえ風邪を引き
芯のあるまなこで睨みつけている
心底は誰にも言わず母思い

大阪市　井上白峰

末席の意見本音に突き刺さる
盃に潜在意識が浮かびでる
生い茂る大樹の下に雑魚の群
吃水を越えて浮世の義理を積む
肩の荷を下ろせば夢が消えていく

大阪市　稲本凡子

積んでは崩し七十にしてまだ未熟
風呂上がり番号順の化粧瓶
誘惑に負けそう早く歯をみがく
いづもやの匂カルテを忘れさす
煮こごりに一合ふやす妻の留守

大阪市　渡部さと美

人災のむごさの極み大地の子
林広びろ心ひろびろ冬晴れよ
スキーみやげ白い炎の地酒酌む
図書館にすわり一人になりたい日
ギンナンの翡翠を守るのも頑固

堺市　黒田真砂

追伸の一語にこもる友の愛
亡母に似た仕草になって紬着る
還暦で未だ早すぎる終の旅（従姉妹の死　2句）
終の旅　子供二人と夫残し
うそにゆれる心菊の香りに沈み込む

堺市　近藤豊子

葉牡丹も仲間入りしてクリスマス
クリスマス　ケーキも父もおそいなあ
九歳の姉はサンタを知ってます
来年は結婚しようクリスマス
はるかなる星がやさしいクリスマス

堺市　中野欅子

疲れとぶ即効薬は有難う
小さなファイト時どき疼く掌の中で
あやとりへ手が覚えてた置ごたつ
街を往く和服一人に振り返る
ご無沙汰が重なりすぎて落ち着かず

豊中市　井上直次

チャンネルの取合い負ける　また楽し
窓に鼻押しつけバイバイ孫の去ぬ
地震サリン　ピリオド打とう除夜の鐘
価格破壊　男の値打ち下げに来る
仮設小屋　鍋のぬくみへ除夜の鐘

摂津市　井上源一

東西南北　無限の風に立ち向かう
風船も弾けた　生命いたわらん
言い訳を決めていつものがんもどき
一日を無事に過せば良いノルマ
あみだくじ辿ると母の顔に逢う

吹田市　茂見よ志子

駅伝を見る楽しみの冬行事
ケアハウス遊愉なんてそそのかす
走らずに余力は小出しすることに
姿ではないと心を若く持つ
たくましい冬芽となって春待つ樹

茨木市　藤井正雄

ゼッケンの走る広告風光る
妻の留守干物一枚昼の酒
超ミニと臍丸出しの民主主義
窓からの回覧板と立ち話
いつもの屋台いつもの顔のコップ酒

茨木市　井上森生

新しいプランにでかい初日の出
行き先が自由の汽車に乗り替える
皇帝の夢が故宮がさんざめく（台湾の旅　2句）
五千年 珠宝 無限の陰に民
創と革かざして竜が発射台

守口市　結城君子

柚子風呂にみんな長湯となりにけり
初便りペンションからの雪景色
きょうだいの多いメリットだけ目立ち
悪女には悪女の友がたんといる
遊ぶ電話に足萎えのこと忘れてた

守口市　森川まさお

旅に出て一匹狼　枯野行く
冬の木は途方にくれたように立ち
身の程は弁えながら初旅へ
テレビないペンション主人と夜咄を
正月の車窓も枯れた色ばかり

寝屋川市　岸野あやめ

新鮮な嘘かも知れぬ冬苺
寄り道も抜け道もせず老いたるよ
自叙伝は　ら抜き言葉で書けませぬ
すぐ本音出すからあとが続かない
風邪ぐらい会社へ行けば癒るひと

交野市　福崎しげお

声援の孫に応える老いの杵
ダイエットお休みします松の内
世間並み目安に生きて古稀間近
貧乏性　週休二日にだれてくる
妻時短　形態安定シャツを着る

東大阪市　森下愛論

ひとり酌む屠蘇に慰められる身の
正月も働く父へ子は不満
椿散る庭に住み着くつがい鳩
傷心に見つめられてる春の虫
人情に敢えておぼれる老いひとり

藤井寺市　中島志洋

初耳と乗り出してくる聞き上手
熱弁のわりに手応え今一つ
仲直りすれば頼りになる味方
いい人と言われ続けて平のまま
残業の嘘を笑って聞いてやり

八尾市　高橋夕花

鈴なりの万年青吉だと信じよう
一の橋二の橋　虹に近くなり
夫婦とも飲めないお酒買ってある
冬の水　耐えねばならぬ許さねば
ネクタイを結んであげた若かった

岸和田市　芳地狸村

縁日と違う身なりの初詣
一願を護摩木にこめる初詣
主役より劣る顔して人気者
戦友の大阪弁がなつかしい
立読みの本屋で学ぶ最新語

岸和田市　島崎冨志子

風邪三日　初めて孫のお手料理
自己嫌悪　心身ゆるんでやる気なし
積雪に犬も茶の間を許される
夫よりは先に逝けぬと思う時
長いものに巻かれて個性見失う

岸和田市　原さよ子

竹踏んで今年の抱負えがいてる
美しく老いたく今日の本を選る
くじ運の弱いとこまで母に似る
口下手で涙の方が先に出る
駅弁が二つ車窓は雪景色

岸和田市　長谷川呂万

アルバムに兄が着ている僕の服
買手市場　部長好みの女子社員
顧みて男冥利の女運
我が人生　努力半分運八分
新世紀見届けたいと屠蘇を干す

岸和田市　寺田甚一

テレビには出ない郷社を初詣
お雑煮は餅少々で恙なく
新年の幸　子や孫がやって来る
手間かけたおせちもすぐに飽いてくる
苦渋から解放された翁顔

岸和田市　田中文時

謝罪する言葉の中に未だうそが
覆水を盆に返して共白髪
子と同居　味噌の香絶えた朝の膳
年齢を重ね友の訃　身内の訃
竜巻のように荒らして孫帰る

岸和田市　井齋一齋

実力の世界で定年気にしない
親の夢継ぐ子が増える就職難
風邪薬よりもよく効く酒を呑む
てれている顔で図太いことをする
披露宴　大海知らぬ鯛並ぶ

和泉市　西岡洛酔

木漏れ日の中で老いらく夢かこつ
北からのリンゴはじけた味で来る
妻の留守手持無沙汰のでくのぼう
鱈鍋に夫婦の溝を埋める湯気
国語辞典まだ勉学の年残り

河内長野市　井上喜酔

母の鍋囲む嬉しい孫の箸
追憶のひととき悔いはさりげなく
若いのに世界をかじるパスポート
欠点がまる見え我慢の足りぬ顔
肩書が無いから歩くと靴が鳴る

河内長野市　植村喜代

富士山のガラバも遠目は美しい
近寄ればなお美しい十七 八
明日の夢みんな消されていた余生
今年ほど何もする気のない師走
楽しみが何もないから座ってる

大阪府　籾山隆

降誕祭に天へ召されし友がいる
ソ連型しつこい風邪に名をのこす
富士山が眠ると水位下げる五湖
活発に歩いてこその万歩計
本物の人気つかんだ実力者

神戸市　山口美穂

雲間からの初日に希望の明りみる
中ぐらい頑張りますと初詣
体重計　正月ぶとりしっかりと
日なたぼこ老母と仔犬はどんな夢
夏も嫌　寒さにも負ける母の老い

西宮市　山本義子

寒月はやいばとなって仮設切る
裸木はいま懸命に春を待ち
深呼吸　拾うた命ほろ苦く
弱者にも明日はあると餅を焼く
嘘まみれにならぬ政治を祈るのみ

伊丹市　山崎君子

除夜の鐘　暴走族に消されそう
初夢の小さな茄子に幸願う
老母の部屋　乙女にかえるかるたとり
一張羅着てきましたと如才なし
七日粥せりの一いろあればよし

宝塚市　吉田笑女

初夢の亡母は一度もふり向かぬ
お供えの分だけ買った雑煮餅
遠まわりしたのにハガキ入れ忘れ
おしゃべりの話半分聞いておく
いい話なら貸しましょう両の耳

宝塚市　嵯峨根保子

イブの夜を若い家族の中にいる
夜の長さ闇の深さに慣れて寡婦
真夜中の授乳か声が甘えてる
ドドドンとお七が狂う雪の音
はやばやと豆腐うり切れ雪もよい

京都市　都倉求芽

皇居より先に都庁の朝が明け
磨かれた窓を選ってる福の神
春がくるまでは孤独な水鏡
若づくりはもうやめなさい首の筋
原発村の犠牲で大都会は動く

奈良市　天正千梢

こまねずみ夢をさがしに春の地図
24時間ねむらぬ街を恋う日なり
二足の草鞋　定年前から用意して
伊勢詣り松坂牛の話など
赤い蜘蛛　神の到来かも知れん

生駒市　北山悟郎

天を突く力給えと初参り
新年の一歩が大事前に向く
金婚によくぞ此処まで僕と妻
幾山河越え有難き妻の杖
力有る限り一日大事にし

奈良県　長谷川春蘭

人生をあっけらかんと笑う皺
菊枯れて一歩一愁つのりけり
少年と少女のように別れよう
焚火の子　煙より出でて走り去る
道標は昔の里程初詣

和歌山市　堀端三男

新春バーゲンついでに寄った顔でゆく
アリバイどころか今日のことさえ忘れてる
他人ごとのよう女の過去を聞かされる
圏外に居る気安さが生むヒット
そう言えば亡妻と並んだ写真ない

和歌山市　垂井千寿子

紆余曲折　今年は寒い除夜の鐘（入院　3句）
元旦の風景せめて窓辺にて
相部屋で退院日和　乾杯す
いつも真実　気休めでない母の声
人の非ばかり目につく日の寂し

和歌山市　山口三千子

一豊の妻を演じて徒になり
大切な話テレビをつけながら
うたたねで少し治まる腹の虫
人生にリタイヤしたい水鏡
ねむれない夜には亡母の気配する

和歌山市　北山好笑

人生の余白に拾ういい話
ひっかかる笑顔に答え書いてある
熟れすぎたみかん私と通じ合う
理想的な胸もあるなと聴診器
目が覚めて亀に越されたのに気付く

和歌山市　田中輝子

否定肯定　神籤は梅の木に結ぶ
わたくしを少しほどいて淡い恋
目を覚ます崖に一本あった道
谷底におちた気のする長電話
とっさの事で抱かれてしまう急ブレーキ

和歌山市　青枝鉄治

初笑い税の不満を吹き飛ばす
交番にお巡りさんの居る安堵
受験子へトーン押さえた笑い声
核のない国ならうさぎ小屋でよい
好きな酒だがフランスは止めておく

和歌山県　小倉アサ

決着をつけたつもりの冬木立
風ごころ視野に捕えた花でいる
相聞歌　下弦の月にならこぼれ
飛び跳ねたことは伏せてるサロンパス
いつからかメカにも強くなった妻

岡山市　井上柳五郎

朝寝くせ正月休みから続き
転居不明　戻った賀状寒に入る
うやむやを嫌う男の勇み足
しかたない言うあいまいな国に住み
語り部に平成七年多事多彩

岡山市　川端柳子

乾杯の音頭をとるねずみ達
黒豆コトコトなやみの抜ける音で煮え
やっとこさ最終電車に乗れました
怖いものもうないという震災後
宇宙とぶ笑顔に笑顔のランデブー（若田さん宇宙へ）

倉敷市　田辺灸六

泣くもよし笑いなおよし人生譜
辛いとは言わぬ男の喉仏
終生を雑魚一匹の意地で生き
一生に知らないことが多すぎる
妻よりも一足先に逝くつもり

岡山県　荻野鮫虎狼

養殖魚　海の恐ろしさを知らず
特売の列　先頭に僕の妻
地に還る紅葉は元気なく落ちる
失業をしてから判る勇み足
五十年　妻恐ろしい事を言い

岡山県　池田半仙

雪国の苦労が解るほどの雪
小鳥達　翔ぶにそれぞれ形をもち
安らげる家が待ってる旅楽し
猫嫌い猫の方でもそう思い
お年玉最後の孫の一人だけ

岡山県　二宗吟平

初詣　孫の車で一走り
まだ負けるもんかと宮の段登る
千両を当てた御幣を翻し
元旦の留守居のんびり寝正月
年賀状　鼠が束になって来る

岡山県　大石あすなろ

結び目が解けて居眠りしてしまう
米洗う静かな夜の水の音
女心にときどき雪も雨も降る
名言を借りてスピーチ締めくくる
晩学へブレーキかける記憶力

広島市　森田文

初詣　去年のことは口にせぬ
開運の兆しだ寒のさくら咲く
さわやかな笑顔が好きな初鏡
寅さんがまたいらぬ世話しています
結局は不安を増したもんじゅ事故

竹原市　森井菁居

僕にも一理　許しは乞わぬことにする
いい旅になりそう電車が空いている
百点はつけない実の父である
放っとけばすぐに千枚田が荒れる
それからは市役所にある地震計

竹原市　岩本笑子

回転木馬よ成人式がまぶしいか
仕事する手ですよ父ですありがとう
生命線深く読んではいけません
紅茶片手に村山さんと橋本さんと
砂時計　今現在を生き抜こう

廿日市市　林野甦光

立春の声聞く梅が開きかけ
四世代生かされて来た無為無策
町角はマラソン済んでなお余熱
嵌り役の役者が消えて行く佗し
船頭に唄あり瀬戸の渡し舟

柳井市　弘津柳慶

勇退を拍手で見送りアカンベー
晦日そば悔いない一年振り返り
初夢を見ぬ間に目ざめた二日酔
もつれ糸ほぐすすべなく燃えつきる
初詣　孫等にまかせ一人酒

宇部市　平田実男

淋しさは売り言葉買う妻が留守
仕合わせはまだ地下足袋が履ける足
自己過信かも知れないが良いワイフ
棒グラフ靴を重くも軽くもし
実家もう憂さが晴らせるとこでなし

鳥取市　小谷　美ッ千

春麗ら私の胸の火喰い鳥
煩悩や川の深さが測れない
両の手が温うてノラになりきれぬ
待つことのこんなに楽し花時計
菜の花をまたいで男逢いに来る

鳥取市　両川　洋々

泥舟ですまぬが僕と乗らないか
四捨五入されると僕の席がない
身勝手な風よ噂をふり撒くな
俺の人生修正液が間に合わぬ
味方なら鬼とも握手しておこう

鳥取市　春木　圭一郎

節くれた母の手　言葉見失う
妻の掌の上で遊んでいた私
幸せを両手に提げて嫁が来る
気がつけば手のなる方を向いている
手の内を見たはずなのにまた負けた

鳥取市　美田　旋風

子らが角出すとは知らぬ遺言書
冬空に残り火燃やすザクロの実
アドレスが減った手帳が手に重い
棲みついた鬼をなだめて古稀になる
存在をアピールときにへそ曲げる

倉吉市　最上　和枝

母さんの両手は魔術師のようだ
不発弾握る両手を懐に
訃を抱いた影の吐息が深くなる
抜け道に母の情けが置いてある
クリームのように優しい塗り薬

倉吉市　野口　節子

富士山にとっても似合う綿帽子
一本の松が風格つけた庭
裸木が静かに燃えて春を待つ
敏感に騒ぐハートを持っている
眉つばのダイヤがとってもよく光る

米子市　中井　ゆき

ふるさとの風だやっぱりいい匂
青空の奥はやっぱり青ですか
情念が湧くには遠い歳月だ
キリキリと弓をしぼってみたけれど
春が来たら淡墨桜見に行こう

米子市　石垣　花子

鉛筆の字が消えそうな老母の文
人間を手玉に取っているペット
打ち寄せる波にも四季の顔がある
地の果ての夢も運んで波は打つ
ヨイショなど言わぬつもりで言っている

米子市　金山夕子

政権の盥回しは奇怪なり
茶目っ気止める自分でないみたい
並以下で大江の本が読めませぬ
ライバルの店へときどき顔を売る
机の前にやっぱり座る一時間

米子市　光井玲子

除夜の鐘　親子それぞれ西東
喜寿金婚　衿を正して屠蘇を酌む
ひたひたと迫るものあり目を閉じる
歩道橋いつも一人で渡ってる
今日の日も普通で終わりありがとう

鳥取県　林露杖

天井のねずみも静か寝正月
餅の数一つ減らして八十歳
反抗も甘えもいまは唯愛し（転校の孫二人帰神）
人生って段々判らなくなるな
亡母の忌にあの日と同じ雪の嵩

鳥取県　石谷美恵子

こまねずみ今年も蟻に負けられぬ
太ってるために苦労を見てくれぬ
わたくしも川もこのごろおだやかだ
曖昧な決意を靴は知っている
ゆっくりとくる幸せが間に合わぬ

鳥取県　石尾かつ乃

長老が席についたら乾杯だ
子を数え孫も数えている両手
偏差値の高いねずみが居て困る
流し雛　川のリズムに乗せられる
やきいもは橋の袂で食いましょか

鳥取県　津村八重子

春よこい草木も意気にもえている
古里が心に帰る七草よ
お正月　祝う一吟高だかと
毬かがる心に鬼はひそまない
亡き父の指紋見つけた墨つぼに

鳥取県　乾喜与志

しゃがれごえ張り上げちゃった年忘れ
にっこりと温泉の窓から初陽
初詣の事故ひとしおに痛ましき
身も脳もゆっくり命うまい餅
舌が縺れる言葉ゆっくり聞いて欲し

鳥取県　松下たつみ

春夏秋冬　山を敬う山男
回り道　笑顔がきっと待っている
生活のリズム夫婦に黙りぐせ
服の色ばかり気にする淋しがり
一人立ちしたくて風を入れかえる

鳥取県　太田幸枝

いつの日か太陽出ない日が恐い
盆おどり袂引かれて妻となる
三十年　礼儀正しい師にひかれ
太陽の匂しみつく父の肌
牛の値が袂の中できめられる

出雲市　吉岡きみえ

久し振り声張り上げた年始会
雪の夜に内緒の話もってくる
ひしひしと孤独をせめる雪の夜
だれにも負けない糸を紡ぐ朝
色づいた隣のみかん見て暮らす

出雲市　小白金房子

戴いた神号吊す新春の床
老梅が咲いたか亡父の夢さとし
石段の高きを仰ぐ神の森
松かざりおろし農家も動き出す
百姓で生きる詩あり老いのペン

出雲市　伊藤寿美

老母に出す便りひらがな多くする
着ぶくれたこころに冬陽届かない
妻の影がだんだん太って来る余生
止まり水の愚痴　枝豆が聞きあきる
蟹工船も多喜二も遠くなり平和

香川県　木村あきら

ヒタスラに海を目指して川ながれ
何処か間が抜けて居らぬと出世せぬ
九回の裏でも女　何か塗り
地中からボツボツ春が湧いてくる
キッチンに灯が点いている温さ

香川県　川崎ひかり

まな板の上で逃げ道考える
いざの時　思うと入れ歯外せない
胸の内　空いた徳利が知っている
人肌の酒があなたを待っている
いい事があるからしかめ面をする

松山市　丹下美津子

祝い膳お豆ころころ初笑い
ご近所のお世話してますされてます
空港で孫とバイバイほっとする
見送って壺も定位置腰をすえ
ふろふきのおいしくなって外は雪

今治市　越智一水

初詣　人の流れのまま動き
魂が枯野で遊ぶ野の仏
愚かなる心は放浪ばかりする
ふれまいと思いふれてる孫のこと
芽ぶかんとする老木へ陽の光

高知市　北川竹萌

厳寒の半月　白い門戸開け
薔薇の鉢　植えかえ正月気分抜く
土佐の海　勝負待ちつつ相撲見る
百合の芽に二つの春が甦る
私は合わせ鏡で春へ向く

高知県　赤川菊野

土佐の海　土佐の男の意地を見せ
町中を挙げて迎える土佐の海
生きてきた人生語るデスマスク
荒れた手に老母の美学が秘めてある
高速路ここは先祖の墓の跡

北九州市　梅田宣司

二人三脚　紐に気付かぬこともあり
詩人でも画家でもないがベレー帽
無位無冠これから風と生きてゆく
冬木立それは確かな生きざまだ
腹の立つ俺もまだまだ活火山

唐津市　浜本ちよ

やぶこうじ添えてトイレも新春となり
春笑顔ラジオ体操でもしよう
虎落笛　寡婦の独り寝脅かし
わたしの目盗んで草の伸び速し
丸過ぎる心でいつも転がされ

弘前市　須郷井蛙

マナ板でコマ切れにする消費税
裸婦像に向かって今日の万歩計
声かけたばかりに払う三次会
水面の雲の美を追い糸を垂れ

弘前市　肥後和香子

蟹みその美味さ男寄せつけぬ
まっすぐに見返す力あったんです
帰ったら家は外より猛吹雪
我が足は本屋と花屋お気に入り

弘前市　小寺花峯

二日酔の朝にいびつな半面鏡
児を抱いた女を娘が連れてくる
二次会のアリバイ作る留守電話
美しい刺でありたい薔薇の花

弘前市　一戸ツネ

黄昏れて今日に感謝の足洗う
地吹雪の殺陣に綾織る津軽三味
プログラムわたしの出番書いてない
髪を梳く汚れを隠す雪が降る

十和田市　小笠原敏人

初夢も良いものばかりとは言えず
初日の出　拝む理屈を問うている
新年会断る理由が出てこない
寒がりで他人にも厚着押しつける

新米が炊けて鍋蓋鳴りはじめ
雪のんのん無欲のいろを野にさらし
過疎の寺　仏も愚痴を吐いてます
休肝日　冬の夜長をもてあます

青森県　諏訪柳々

騙されて騙しあってるオウム教
昭和史の顕末語る尾骶骨
カルチャーの大輪咲かす春を待つ
もてあます余生　時どき鳴る電話

静岡市　安本晃授

明日嫁ぐ娘と鬼は外　福は内
ぬるま湯の中で初心が失せてゆく
頭文字だけの日記がまだ続く
故郷に伏流水が湧く恵み

富山市　島ひかる

朗読を聞いたあとコーヒー欲しくなり
不透明言志四録の知恵借りる
囲碁大会なのに話題は低金利
新春は小磯良平の絵に替える

大阪市　川端一歩

旅に来て日向ぼっこの贅沢さ
赤い羽根つけた税吏が手厳しい
唇がお年齢の割に紅すぎる
いのちある俑の乳房が揺れている

大阪市　桝本蕗児

行く人に道の小手毬なぶられて
いとおしく髪ときつける亡父の朝
突然の思い息子の前厄が来た
勝つまでは離してくれぬひょこ回り

大阪市　大塚節子

がっぱりと福をもらうはえびす様
透視力ほしいと思う福袋
イベントよりママはなりきるカメラマン
あきられて捨てられたのか粗大ごみ

大阪市　藤田頂留子

ルミナリエの人波イブに居る神戸
光る星一瞬背筋凍らせる
自分史のそこここにあり神戸の灯
初春告げる優しき花よ福寿草

大阪市　町田達子

関空が沈没しそう初春の旅
なるほどの轟音に遇う東南園
サトウキビ畑の地下は弾薬庫
宅配が四日遅れて着く帰国

大阪市　津守柳伸

八十路生きなおも子の事　孫のこと
子から孫へ差引ゼロのお年玉
いつでもと思えば八十路にあるゆとり
桧皮干す初瀬の川原に雪しぐれ

大阪市　北勝美

成人式りんごの芯も華やいで
雑草の芽は踏まれても焼かれても
髪薄くなり帽子いろいろ賞められる
年金を手に長い坂ふり返る

大阪市　神夏磯　典子

野良猫のように寝そべるしたたかさ
雪国に雪降り過ぎた大ニュース
初日赫々　至福の年になる予感
退陣へ孤高の人の眉白く

大阪市　板東　倫子

恩師の忌　匂ゆかしき沈丁花
みんな揃うてええ顔してる赤ごはん
欲の雲はらえば心青い空
梅一輪　甘酒茶屋に小半刻

大阪市　本間　満津子

罹災地の一夜の宿の恩を知る
震災後　花のしおれるように老い
病む父へ大寒の夜の文をかく
老いてまだ願う事あり星まつり

大阪市　奥田　良子

許したら心ふわりと軽くなり
老夫婦　食器洗い機邪魔になり
あやふやな返事に嘘がばれている
傷つけば血汐吹き出す透ける肌

大阪市　小糸　昭子

遭難者へリコプターが停止する
近代戦　空想はるか越えている
駅に着く車輪の雪を落してる
今年から年玉渡す顔になり

大阪市　寺井　東雲

報恩講　百畳敷の寒さかな
ひとしきり目で頂いて京の膳
雪の日も窓にすだれの祇園町
美しい指なら煙草吸ったかも

大阪市　大河　未佐子

一日がまるごと自由　昼の風呂
父母の愛みんな奪って娘は嫁ぎ
今日誕生　我が八十の句読点
法話聞く出ると此の世の寒い風

堺市　柿花　紀美女

職員も居ず国境の日曜日（ポルトガル・スペイン旅行）
なかなかに風化進まぬ犬の糞
ロケ先の新建築が邪魔になり
新派では生き続けている松太郎

堺市　吉本　菁風

人形に因果含めて流しけり
髪形を変えて挑戦するつもり
王手王手　追いつめられている私
こだわりを捨てると心軽くなる

高石市　浅野　房子

豊中市　安藤寿美子

一人居てお白湯がおいしいと思う
氷雨ふる私は石になりそうな
太陽が一寸こっちへ来てくれる
かなしくてまた駅前へ来てしまう

豊中市　月原方郎

大臣に誰がなろうと構わない
簡単に残り少ない歯を抜かれ
初日の出もう見えてくる新世紀
日向ぼこ満一歳の片えくぼ

豊中市　江口明光

起き上がる気力をくれた山がある
流転かな別れのめしを何度食う
もうピリオド打ちたい診察券五枚
はやばやと蕾をつけた猫やなぎ

豊中市　稲葉眞郎

言葉だけの聖戦が火を噴いた月
なけなしの相続思う齢となり
大変事の年暮れ無事に蕎麦の味
本年は魔除けを祈り初詣

豊中市　滝北博史

丙子は大黒さんへ初詣
木津信は福の神から見えるビル
大金を摑む初夢見る不幸
初孫はなぜかナースになるつもり

豊中市　湯浅馬洗

長城で飛んだ帽子がリレーされ（八達嶺）
団体さんやせる石鹸値も聞かず
夫婦だな余所見はしない長い箸
売れたあと少年易老がまた掛る

豊中市　三宅つえ子

幸せの数を数える除夜の鐘
新しい暦に老いの願いごと
つややかな柿の中から父のうた
干柿の甘さよ母の忌も近い

豊中市　辻川慶子

新年や広辞苑にもごあいさつ
ミッキーマウス君の元気におめでとう
白梅の蕾も小さい天神さん
ストレスのそれはそれはの長電話

池田市　岡本吉太郎

減塩食　食う楽しみをうばいさり
生涯をもしもの夢を見てる女
発明の世に出る日待つもどかしさ
あの魅力あるえくぼとて老いにかてず

箕面市　坪田紅葉

年賀状出すまでいらいら落ちつかず
あれこれと世話やく孫もいなくなり（孫結婚）
今年からぼけない防止に力いれ
雪の朝　長靴はいて買物に

新しい年を占う股のぞき
身のほどを知らぬ願いもまじる絵馬
胃に悪い話　肴に酔えぬ酒
悪口になって一座が盛り上がる

箕面市　岩津　ようじ

鬼ヶ島　鬼は昼寝をしています
泣き笑い女は武器を二つ持つ
大物は過去の修羅場を語らない
夢に出る亡母はだまって後ろ向き

箕面市　椎江　清芳

世は移る沈黙の金いま何処
おみくじも遊び心のこの余裕
暖冬に不審　寒波に安堵する
ストレスの夫に妻もブランデー

吹田市　瀬戸　まさよ

母の祈りか人形と地ぞうさま
香たいて今日の御加護を祈ります
くじけまい振り返るまい祈りもて
すれ違う破魔矢祈りのそれぞれに

茨木市　堀　良江

ハリ灸を頼り大病院も行き
十歳も若手が年だなどと言う
悪いとこだけはやっぱり私の子
猫よりはましと夫の手を笑い

茨木市　島元　ふみ

前向きを目ざして友へ書く手紙
メルヘンの世界を思う雪の朝
女ですやはり女で生きたくて
尽くしたか自問自答で茶をいれる

高槻市　井上　照子

静から動へ一斉に初詣
良心見える半透明のゴミ袋
照れくさそうに土を払って立ち上がる
強引に森黙らせる電気鋸

寝屋川市　江口　度

恋人と名の付くお菓子前にして
筆持てば腕も背骨も軋み出し
好きなこと書いてみたいな赤いペン
ばあちゃんのお金　心配してくれる

寝屋川市　平松　かすみ

母さんのお祈りきっと僕のこと
酒ならばたっぷり有るとねぎらわれ
生き甲斐の人押してゆく車椅子
肩書の言わす意見と聞いておく

寝屋川市　堀江　光子

震災後の友のその後の知らざりし
厳寒に卒寿の母の身を案じ
三度　三度　当り前のように食べ
少し身を引き後ろからそろそろ

寝屋川市　冨山　ルイ子

寝屋川市　北岡波留吉

信心の深さが分かる頭陀袋
全開の蛇口がうたう朝の歌
撒いた貝に歓声あげる潮干狩
妻の口防ぐテープが見当らぬ

枚方市　海老池洋

春くれば開けたい窓のある私
檻の隅に野性の消えた悲しい目
苦爪楽髪そんな気もする棒グラフ
老い二人ど忘れしては笑い合い

枚方市　前たもつ

たどたどしい声の鶯　春を鳴く
現代っ子も卒業式へ涙ため
長い髪すっぽり切って母になる
満たされて政治へそっぽ向けたがり

東大阪市　安永暁子

引出しがなかなか開かぬ物忘れ
渋滞をラッキーに見せた富士の山
やっと申告　買物籠に花ゆれる
空回りばかりするのにくじを買う

藤井寺市　田中透太

春の海　男は沖へ出る決意
飲みきれぬ薬　冬から抜け出せぬ
木枯しをあつめて咲いた冬の花
曲り角　急に女は喋り出す

藤井寺市　高田美代子

出席と書いて気重になっている
不揃いの夫婦茶碗も気にならず
おとんぼがドキッとさせることを言う
雪がとけたらと夢の続きを見てしまう

藤井寺市　福元みのる

安い葉書で高い感動
政財界ともに金属疲労だな
税金の行方つくづく知らされる
犬猫風の人間フード出来るだろう

羽曳野市　酒井一壺

二月暮れ二人で踏んだ京の雪
朝粥へ待ってたように宿の雪
昼に寝て夜の仕事をしています
夜になると頭が冴える癖がある

八尾市　宮西弥生

疑えば疑うほどに孤独なり
あんなことこんなこと夜更かす姉妹
心配が一つ心配が二つで人間つづけてる
まだ先に夢を抱いて貯めている

八尾市　吉村一風

千手観音　私の頼る手を探す
持ちきれぬ祖母の励ましもろてくる
雪の降る誘いの酒にさっとのる
いい負けてくれてる妻に気がつかぬ

八尾市　山下　美津留

柿の実が一つ残って年明ける
もう少し走って見ると汗を拭く
フィルムが残っていると写される
居酒屋へ電話してくる妻の勘

八尾市　高杉　千歩

ピアノ練習　聞かせてちょうだい長電話
わがままも自立の一歩桃の花
テープからままごとあそびの東京弁
ひとり言多くなるのも歳ですか

八尾市　宮崎　シマ子

一歩下がる床しさ浄土へは先に（片上英一さんを悼む）
札幌は寒し赴任の子に吹雪く
札幌へ送るダシジャコさつま芋
七草粥　風邪の熱にも口あたり

岸和田市　三輪　通彦

声変りしてから親を煩がる
家中を敵に回した反抗期
敵の無い人で面白味に欠ける
卒業も即浪人で気が重い

岸和田市　古野　ひで

遠い日の亡母の匂よ沈丁花
金持の貧しい心見てしまう
テレビには雪の魔性が写らない
みぞおちのあたりで疼く遠い恋

岸和田市　藪野　けい子

弁当にひとくふうする母の味
世渡りが本のページになじんでる
二十二で二億稼いでいるイチロー
隕石の落下バクハツ　ユウホウかな

大阪府　八十田　洞庵

嫁が来てかわる序列に父も慣れ
寄り道のわけを知ってる影法師
海に出て愛の終演　許せそう
矢面に立って姿勢を試される

神戸市　木村　貴代子

被災一年　金の力を思い知る
助け合いがんばったとて建たぬ家
シャッキンと音のしそうな家を建て
恋文を未だ持っている妻強し

西宮市　刈田　泰司

この辺で汽笛と煙欲しい旅
硝煙の匂が消えぬ世界地図
父親にチョッピリ聞かせ孫叱る
叱られて風と遊んでいる私

西宮市　菊池　トミエ

托鉢に少しはなれて社会鍋
風邪ひいて酒は誰より優しくて
躓いた石さりげなく除けている
ゆず風呂の効き目を信じ浮いている

今年ほどほんとに待った十二月
大掃除ガラスの破片今も出る
氏神へ一人静かに初詣
還暦は入れてもらえぬ敬老会

西宮市　池田善守

観光地図　滝よりでかい日本猿
季は巡る虹立つ明日もあるだろう
あの頃も良かったけれど今日も良い
春巡り李さんの店甦る

西宮市　亀岡哲子

窓少し開き素直になれました
またひとつ家族の中に灯がともる
キッチンで追想のコーヒー飲んでいる
信号の向こうとこちらでする会釈

芦屋市　黒田能子

涅槃西風いのちの果てのあっけなさ
プライドも愚痴もやがては風になる
ひまのない人がこまめに書く日記
エアコンがおかしな音をたてて冬

宝塚市　丸山よし津

あこがれは畳の上の大往生
スタートは万朶の桜　星一つ
里の家　灯籠三基だけのこり
あでやかにうつむき開くシクラメン

宝塚市　中田純次

人間に好かれる策を練るねずみ
初夢で好きにしなはれ亡妻の許可
弱虫のこんなに格差昼と夜
性だけがみっともないがまだ残り

宝塚市　上田佳秋

路地裏で誤解をまねく立話
うまい店あると誘われついて行く
ＯＬの社員食堂良く笑う
素通りが出来ない母の駅がある

伊丹市　小熊江美

渦となり滝と流れる火の祭
壁ひとつ隣と違う風の音
句読点ばっかり打ってる石頭
苔むした石に浮いてる忍の文字

川西市　松本ただし

年金の寂しさ靴が減りもせず
雪が降る中を鷗が餌をあさり
老いてなお男の道を忘れない
電卓が言うこと聞かぬ十二月

相生市　中塚礎石

今の今　神風だけを信じてる
深刻な顔似合わない笑み作り
客間には季節たっぷり花の香に
盆梅展　匂う優しさ持ち帰る

京都市　山海友熙

奈良市　米田恭昌

木枯らしに亡友の演歌を聞く夜寒（片上英一氏を偲ぶ）
不遜なり地球を砕く地下工事
あの人の耳に入れば街宣車
山城の幻に聞く閼の声

大和郡山市　坊農柳弘

目覚しの効き目さっぱり春かしら
寒椿　色艶やかに二月堂
寒餅を焼いてぽっちり春気配
健康診断　春それなりの病持ち

大和高田市　岸本豊平次

古希の坂　一歩踏み出す初詣
お隣と会わないままで松が過ぎ
降りたのは同じ訛りと無人駅
ウエアとシューズ揃えた万歩計

奈良県　上田翠光

村山さん見事敵前逃亡か
五十年先の総理談話がどう残る
墓碑名は先祖代々でよし俺の骨
いいじいさんになれるかなと立ちどまる

和歌山市　宮口克子

煩悩がくるくる酔えば酔うほどに
春なのにわたしの雪はまだ溶けぬ
リセットを押してもダメなものはダメ
生き下手の何を今更ごますり器

和歌山市　玉置当代

初日の出　拝む平和な夫婦箸
慣れた海　三角波に油断する
爪弾きされて悔しい二重顎
インターネットに単細胞が乗り遅れ

和歌山市　玉井豊太

跳ねて飛ぶ力を毬はためている
子の背丈　見守りながら老いている
三食へ好きな漬物気遣われ
陽がのぼる肩を並べた我が家にも

和歌山市　榎原公子

孫がくるオレンジ色に染めに来る
あり得ない訃の知らせ来て寒に入る
素っ裸で世間を広く生きている
刻まれて石はいよいよ重くなる

和歌山市　田中みね

話すたび気になる方の言葉じり
身動きもせず老母を介護の夜が白む
死の世界見てきた老母が目を開く
まるで太陽そんな明るい私好き

和歌山市　岩本美智子

榠樝酒を風邪と仲よく飲んでいる
寝太郎になってしもうた背の君は
六甲を対岸に見る仮の宿
木瓜一輪だれが挿したか無人駅

和歌山県　西口忠雄

さてとなああんたの年はこれこれか
四畳半それでも老いの娯楽室
女とは女の肌に惚れている
世の中は歪に見える老眼鏡

倉敷市　小野克枝

母の名を背負い闘魚として歩く
青リンゴまだ仲良しの枠の中
恋文を書いたようには見えぬ髭
少年自爆赦せぬ石をふところに

笠岡市　松本忠三

忠三は本名ねずみ年でない
嫁さんを真似て坊やもぎっちょです
三箇日もうばあさんの愚痴が出る
お年玉じいちゃんばあちゃん除外され

岡山県　山本玉恵

仮の世に命寿ぐ春に逢う
藁屋根の軒でもえても吊し柿
あの波もこの波も抜け生き上手
役終えて春の陽を待つ実南天

岡山県　福原悦子

脇役は温く演じて足りている
胸開き余生　歩いて見ようかな
和やかなその円芯に母が居る
弓引いた娘一児の母となる

岡山県　福原辰江

逃げ込んだ森が癒やしてくれました
快い鼾聞こえる距離にいる
母さんの昔を乗せた縄電車
悠久の大地潤す一しずく

竹原市　古谷節夫

高齢の予備軍となる六十路とか
厨房で評論ばかりして女
居酒屋のオヤジの意気で進む酒
なあ年金　左右確認して六十路

竹原市　時広一路

そして春まだパンジーに笑み貰う
値切るまい花の値打ちが下がるから
フランスパン僕に似ているなと思う
欲求不満　僕の作った竹とんぼ

竹原市　石原淑子

ションボリを目敏い犬が寄って来る
大臣に贈る花ですコチョウラン
末っ子の成人式に思うこと
溜息も笑顔もヤジロベー一つ

広島県　田村新造

強がってみるが疲れる古希の坂
団体に足りぬと旅へ誘われる
大正が群れ批評家になる酒場
この週はラブと蟹座へご託宣

広島県　藤解静風

梵字刻むと石は仏の顔をする
ナースへの感謝　恋文めいてくる
とりあえず味方の顔で通り抜け
好い加減にせい住専の後始末

美禰市　安平次弘道

赤が好きプラス思考になってくる
抜け道を頼ってからの負け戦
追伸へ言葉を飾るのは止そう
右顧左眄するから夢が遠ざかる

鳥取市　岩原喬水

振り込みのボーナス妻が鍵をかけ
そろそろと三途を渡る金貯める
禁煙の決意を指が淋しがり
残りもの食べて母ちゃんよく太る

鳥取市　前田一枝

広告に包めばもらい安くなる
香水の香り止り木迷わせる
ハンカチで足りぬ涙があふれ落ち
運命は幼なじみと橋渡る

鳥取市　西村黙光

雪掻きが美事ほぐした肩の凝り
降り積る雪の白さにほっとする
陽を受けて雪は静かに地に還る
夢売りがどっさり呆けの予防薬

倉吉市　野中御前

机の中からいつも出てくる母の影
袋から思わぬ恥が転げでる
上げ膳 据え膳 やっぱり我が家恋しいな
痛いほど胸にこたえる子の瞳

倉吉市　米田幸子

ばあちゃんの余生　素的な実をつける
新薬に余命細々つながれる
何故かしら隣の庭が荒れている
嫁不足　毛色の違う魚も飼い

倉吉市　淡路ゆり子

雷鳴に雪一尺の夜が明ける
スイートテン嫁に指輪を買ってやる
餅ひとつ食べ切れなくて嘆く夫
赤門の前で繁昌　息子の鮨屋

米子市　政岡日枝子

人の匂に染まってしまう池の波
方言が温くて流木身を寄せる
流木たちで雨の旅籠はやかましい
流れ藻の子供宿したさくら貝

米子市　林瑞枝

子を褒めているわたくし流の省エネ
朝の化粧　春の花弁の舞うように
カラオケの余韻と歩く雪の傘
さっぱりと美味しいね宮内庁御用達

米子市　澤田千春

風呂敷に虹を包んだ北の旅
窓からは見えぬ罠にも眼を向ける
いくたびも我を忘れる夕茜
脆くなった骨に号令かけている

米子市　木村富美子

どなたとも普通に話す白椿
不義理した人にやさしくしてもらう
カラオケで歌えないけど付いて行く
湧くように知恵の泉を持つあなた

米子市　寺沢みど里

きざはしの数たしかめて初詣
帰省子を束ねて送り寒に入る
巣立たせてピアノの蓋が重くなる
現実に戻りいつものポーズ執る

米子市　茂理高代

解ってて筋書通り歩いてる
迷い道休めと椅子がおいてある
藪椿いくら咲いても燃えきれず
地図にない駅に降りたくなって来た

米子市　白根ふみ

年の瀬の霙ひとりの傘とじる
ポインセチアが氾濫かるいイエスの日
ネイチャーセンターいのち浮べる冬帽子
さくら咲くころに小山が動きだす

島根県　西村早苗

一坪へ花芽みんなが覗いてる
経を読む日課となって残されて
大きな大きな鏡にちょこんと小女が
時どきは誘い待っている小指

鳥取県　黒田くに子

したい事する日はとてもさわやかだ
過ぎし日の思いがつもる紅つばき
愛はうたかた積木くずしにならぬよう
おだやかな訛りでさとす母である

鳥取県　さえきやえ

モー六という本に目をさまされる
医者さんに一度借金してみたい
べんきょうぎらいが出世街道まっしぐら
わたしに出来ることがあればと友の声

鳥取県　土橋睦子

冬薔薇一輪さして寒に耐え
色褪せた母の袂を短くする
赤を着る言訳なんかするものか
傷心を繕う春もやがて来る

鳥取県　西川和子

同窓会　野山を駈けている白髪
老いて来た袂にちょっとした色気
ありがとうをお辞儀一つで間に合わす
ふる里に甘えてばかりいる私

鳥取県　岩崎　みさ江

七草の姿が消えて行く野道
赤い実を残して消えた雪うさぎ
太陽に三日坊主を嗤われる
浮き草もやっぱり根っこ持っている

島根県　藤原　鈴江

真夜中の風呂場で月を拝む幸
傷癒えてさくら咲く土手待つばかり
人生は苦しきものと思えども
避けられぬ難なら来いと立ち向かい

鳥取県　羽津川　公乃

まっ白な雪が無気味に黒く降る
若者の消えた大屋根重くなる
国産の大豆豆腐のいい匂
めっきりと人恋しさの募る老い

鳥取県　幸家　単車

宝石で飾る女に騙された
晴着きていてもだあれも振り向かぬ
めでたさを重ね貧乏暇がない
気持よく呑んでめでたい酒に酔う

鳥取県　乾　隆風

忘れ物してやっと間に合う二条駅
国ことば絆をむすぶ終列車
嫁飢饉どこも一緒やなと思う
美辞麗句のべても雑魚は寄りつかぬ

松江市　柳楽　鶴丸

心にゼイ肉がついている美人
ブランドの時計も一日二十四時
独り者　形状記憶のシャツを着る
学歴も肩書もいらぬボランティア

出雲市　尼　れいじ

靴下がぶら下がる私がぶらさがる
そうでっか大阪弁を恋しがる
ミスの無い女はきっと誘わない
退職金ゼロです私小商人

出雲市　園山　多賀子

少し気が退けるが夫より先に寝る
椿ポトリ闇にまぎれて音もなく
冬籠り心の襞を書き残す
マンネリが続くわたしの転び癖

出雲市　岸　桂子

眠れぬ夜　水割をのむ一人のむ
そんなにもその木が好きか寒雀
妥協する暮らしに慣れた花日和
雑木林ぬけた夫婦のいい会話

出雲市　板垣　夢酔

銃声のとどろく異国見るテレビ
倒産に通いの蟻は散ってゆく
定年で他人が座る椅子となる
ああ雨だ笑いもどった野菜たち

出雲市　小玉満江

まあ素敵　八十歳の冬帽子
その後は肩の凝らない者同士
船の旅　見果てぬ冒険湧いてくる
お正月お財布だけが踊り出す

出雲市　石倉芙佐子

底の浅い器と思えばそれで良い
長いこと悩んだ果ての猫の鈴
生傷の絶えぬ夫も古稀を過ぎ
強敵はコレステロールということに

出雲市　富田蘭水

色野菜おれの命と語り合う
老いてなお時代にあわす力んでる
喝采の瞬間男隙だらけ
弱いなあおみくじ読んで千々乱れ

島根県　石飛水煙

除夜の鐘ここは名鐘あるお寺
石仏帽子かむりしだけの冬
寒かろう墓石にせめての香を焚く
日本海　絵になるしぶき天に舞う

香川県　工藤吟笑

温もりが心の奥に棲む夫婦
四国路に遍路の笠が揺れて初春
線香の煙たなびく結願寺（大窪寺）
年金が温い布団に化けている

香川県　山地マツヱ

野暮ったい夫だが心暖かい
子に遠く住んで夫婦の欠け茶わん
夫婦して傷かばいあう五十年
老斑の指でパソコン習い出す

香川県　成重放任

険しくも避けて通れぬ風の道
頂点を残して登る気の楽さ
ハイチーズ背丈をちょっと高く見せ
手は出せぬ天女の裏に潜む夜叉

松山市　宮尾みのり

定年の日からゆっくり歯科の椅子
絵に描いたようには生きてゆけぬなり
赤ちゃんは苦手　赤ちゃん見抜いてる
愛車よりいい自転車が捨ててある

今治市　野村京子

黄昏のページくってる古本屋
濃く淡く子にかけている期待感
回転寿司　骨埋める駅みつからぬ
孫たちとポテトチップス仲がよい

高知県　小澤幸泉

ベレー帽が似合う私の病み上がり
労りと無言の中に復帰劇
身体ボロボロ内なる思い燃え上がる
初日の出　土佐路の旅をまた始め

自選集

老いというものか夫の優しさも
辛いことばかりではない蘭の花
気掛かりなことが重なる冬の屋根
正月の寺ちらほらと人が居る
今はふたりで梅の咲くのを待っている

小出智子

寒いのに笑う隙だらけの椿
椿このいとしき木々の十年後
足音に震えてしまう落椿
成仏をしてから椿　地に落ちる
生きて欲し　笑って欲しと椿咲く

八木千代

枯野にも春待つ花の芽吹きそめ
雑草に生きる根性教えられ
偶然の再会名前出て来ない
白髪の笑顔はしゃぐクラス会
太陽の笑顔に花もふくらみを

藤村〆女

犬も歳わたしも歳の散歩かな
啓蟄や今年も出来た散歩道
お先にと言うてる人が気を遣う
窓ガラス挟み遠のく投げキッス
自分のこと書いてぬ秘書の持つ手帳

黒川紫香

まんまるい顔は昔と変らない
大根の白さ男の料理にも
割りばしのうれしさ客のある日なり
一夜干し淋しがりやの眼をしてる
わびしくて雪が少しのこる朝

正本水客

貧しさに追われ小走り癖がつき
美しい仏へ柩を閉ざしかね
肩書が取れ芯からの笑い声
初場所が見える炬燵にある銚子
大根と語り春待つ冬木立

月原宵明

日曜は休肝にする酒なしデー
宝くじ五十年の夢のあと
子の年の出産ブーム祈る鈴
この場合ほんとうの事伏せておく
父さんの遊びほどほどならゆるす

藤井明朗

広重とささやいて来た小一時間（広重展にて　2句）
〝広重ブルー〟そんな言葉を覚えて来
祝箸老いには老いのねずみ画く
矢印がないと進めぬ僕の性
一句ない友の賀状が他人めく

松川杜的

修身がどうのと老いの愚痴話
早まった事を悔いてる年のせい
片付かぬ机で春の陽がはねる
友の愚痴　酒のせいとは知りながら
酒癖が人の古傷探り出す

恒松叮紅

付添いの姉が目立っている見合
冗談を言うなと友が気にしない
コーヒー好き朝からパンにする夫婦
お見合いを拒みつづけて怪しまれ
薬飲むポーズもテレビ撮っておく

辻白渓子

振り出しに戻り子年の賽を振る
素手だから遠慮は抜きにしておくれ
客一人来ぬ屠蘇独り酌む夜
振り返ると堂々巡りしておった
君ならば出来ると責任のがれる気

有働芳仙

ペダル踏む気力点滴効いてくる
才走る女　一言恩に着せ
道問えば殊更媚を売りつける
空しさは消えず碑前に佇ちつくす
春風駘蕩　呆けてはならぬ地図を塗る

野村太茂津

一行詩でも情念が音たてる
新雪へ誰を待つのか雪女
境界へ六法までもページ繰る
よく値切る客を知ってる招き猫
夢詰める壺を新たに買ってきた

小西雄々

まだ八十五だと今年も言っとこう
自分を評価するとあほらしくなってくる
補聴器に聞こえんでよしコマーシャル
妥協せぬ人だと話持って来ず
自然の香り忘れた花に罪はない

金井文秋

煩悩は払ったはずだよお元日
また一つ齢を増やしてよろめけり
追い越されてばかり悲しい老いの足
天真爛漫　赤んぼにかえりたし
亡妻が出て来ぬか箪笥をあけてみる

工藤甲吉

川柳と仲よく古希の春へ着き
昼の酒　天道さまがまぶしすぎ
送り仮名　確かめる辞書目もかすみ
反省の日からグラフが伸びはじめ
寺の寄付この頃すなおにはなれぬ

小林由多香

恙なく差引ゼロで年を越し
書きにくい名前もまじる年賀状
飲んで寝て一句も得ずに三ヶ日
思い出の武勇伝までで る法事
今日もまた嬉しく孫に言い負ける

野田素身郎

どん底の旧家を継いだ足の冷え
簡単な暮しだ買うて来て捨てて
ほめられた手相をそっと温める
お向いにあるスナックは近過ぎる
銀婚か子が二十五になっている

遠山可住

新玉に届く無気味な蛇むくろ
豆秋の句集いとしや春霞
大寒に縛られている肩の凝り
阿呆くさい笑いでぐんと若返り
傷を舐め庇い合うてる苦労人

久家代仕男

偏差値の脳に浮ばぬ思いやり
紙風船北には北の風が吹く
一粒の葡萄よ妻よ倖せか
ティッシュ下さいうしろを向いている涙
玄関の前で足踏みする不義理

波多野五楽庵

悪童が駅長してる無人駅
リッチではないが夕餉の輪が温い
可愛がり励ましそして裏切られ
トップタイ不敵な笑みと照れた笑み
今年こそで始まり今年もで終る

西田柳宏子

ダイヤ婚祝う楽しい夢がある
お帰りと迎える妻の居る我が家
人柄が便りの中ににじみ出る
下手な嘘ついて愛情待っている
神さんが守ってくれると信じ切り

奥谷弘朗

ワンと泣け神を信じたささげ銃
たべしろを稼ぐ吊り革　窓の景
同居人そんな目になる妻といる
ふたりきり西日の部屋もあたたかい
パソコンに置いてゆかれる日が近い

高杉鬼遊

老いらくに童心戻れ雛の前
割箸にこうも格式　貧富の差
満月の万世橋に父の影
老酒へ水上勉　物しずか（山の上ホテル新北京）
恩人を見舞うて勢う言葉数（佐藤一粒氏へ）

橋高薫風

川柳塔（追加）

名を惜しむ男でいつでも貧と友　八戸市　島田昭治
強情は病名まで独り決め
介護する妻に心で手を合せ　大阪市　小林トメ子
レントゲン撮したような冬桜
責任は私がとると皆だまり
民族の闘争命粗末にし　大阪市　清水利武
橋龍丸　紅一点も乗せ船出
人の世の苦労背負って老いてゆく
麻原の裁き始まる春弥生　大阪市　玉置英子
養殖の魚からもらうＤＨＡ
碗に春をよそう七草粥のいろ
七草の一つに水菜入れてあり　堺市　一瀬福一
出戻りの過去にぎやかに言いふらす
にぎやかに汽車通るだけ俺が村
父はＭ母はＬＬと言う家族　岡山県　岩道博友
欲のない爪を年始で切っておく
青年の主張　真実深くなる
赤を着て風向き変える靴をはく　福岡県　横地東川
高所恐怖　女屋根師を仰ぎ見る
ワープロが普及　草書は難解字
身障に自立の道を遺産とし

水煙抄（追加）

振り向けば耐えて登った坂ばかり
震災はもうこりごりの年が明け
からかった孫にいつしかからかわれ　犬山市　森正

川柳太平記 (214)

川柳の群像

廣江天痴人

東野大八

私（津川紫吻）と「天さん」との交友は、実に大正十五年四月の本田渓花坊（「大大阪」主宰）歓迎大会に始まる。しかも、この句会が、天さんのはじめての川柳句会参加なのである。

当日の参会者名簿には「広江孝雄」と記したが、記念の寄せ書きには「耕翠」と記している。当時の天さんは歌壇で「簸川野耕翠」あるいは「広江耕翠」とも名乗っていたが、川柳はどちらの呼名でもなかったらしい。

彼の自伝によると、川柳の第一作は、大正十五年十一月の松陽柳壇（現山陰中央新報、山陰文芸、川柳の前身）米村餡互選の

秋風をたて切った室に母の咳

だというから、作品の八か月前に、句会出席という珍しい例を作った。

『川柳塔まつえ』（平成二年五月号）に、古い話を聞きたいとして、

「遙かなむかし、その頃わしは川柳へスタートしたばかり…」

というのは、以上の頃なのである。当時、私の出していた『紫陽花』を中心とした話を聴かせてもらいたいという要望も、懐古の情に発したものにちがいない。

あれから六十余年、生き永らえて天さんが思い出される者は、宅和喋朗、小田無鉄砲（後の桃詩）、細田一夢（元代議士）、それに私ぐらいのものであった。

昭和三年、御大典記念第一回山陰川柳大会に天さんが一番喜んでくれたものは、松丘町二に会えたことで、彼をひっぱり出した私をひどく持ち上げてくれたものだ。

私は古川柳を学問として取り組んだが、天さんは低回趣味と嫌っていた。だが、川柳を語り、川柳を論じる日に提唱したいという〝川柳忌〟には双手をあげて賛成していた。これが戦前永らく続いた三社合同川柳忌である。

カスリに兵児帯で、緒の太い厚歯の高下駄を鳴らしながら、上乃木三叉路から、松江中心街の句会場までの四キロ余を徒歩で往復した天さんは、その気力において老いてはいなかった。（『川柳塔まつえ』平成四年五月号・津川紫吻悼文・要約）

広江天痴人は本名孝雄。明治37年5月27日島根県八束郡乃木村の生れ。川柳は前記の通りのいきさつで大正15年から…。

昭和6年、川柳雑誌の麻生路郎に師事。翌年同社古志原支部を結成して本社同人に推されてのち、松江支部幹事となる。

昭和10年、個人誌『阿手奴伎（あてぬき）』を創刊。翌年山根梟人、米江庄介、吾郷夢迷らと自由律誌『川柳風呂』を興し、県柳界に新風を送ったが、折からの戦局に同人らの相次ぐ出征によって止むなく廃刊。

以後は各誌への寄稿となるが、戦争の激化により句作を中絶する。

やがて終戦、21年4月勝谷山川児、本庄快

哉、山根梟人らと手を携えて『柳城』を創刊、いち早く柳界に復帰した。

その後、『川柳まつえ』に参加し、27年から国立島根療養所の川柳集団「葦」を指導し、以来43年までの17年間、倦むことなく川柳振興に寄与した。

この間、『ふあうすと』の椙元紋太にひかれて私淑、同時に大山竹二、房川素生と風交を重ねたが、前記指導者三氏の死去によって、ふ誌を離れ、孤高の道を歩む。庵号風樹庵でひたすら農民川柳の道一筋を歩いた。（個人句集『村鴉抄声』記載の略歴・梟人記）

「私（恒松叮紅）の手許に、今は絶筆となった一枚のハガキがある。日付は平成四年二月一日の消印で、全文つぎのとおり。

『寒中御見舞申上候

近詠　ああ、つまらん　おーおつまらん

つまらん八十九　（天）

九十四歳で天寿を完うした曽祖父、八十二歳での祖父母、九十歳で逝った廣江長造文官、大庭貞徳くんは先年逝った。八十七歳。乃木白町の星野睦も八十五歳で天寿を全うした。ミニ高野山に住んどると、近頃は誰も来なくなった。

こうなれば図太く生きん八十九

と力んでみたが…。

木次から「鮎」が届いた。おいしいものは一番後でたべよう』

木次の『鮎』は、小砂白汀氏の句集のことだろう。文中の「誰も来ない」に胸をつかれて、柳友二人を誘って天痴人居を訪れた。ご本人はいつもの部屋で至極元気そうだった。知人の話では、私たちが訪れた日から二、三日してからの発病だったそうな。

丁度一か月目の三月二十一日朝、危篤の報がきたが、（中略）翌二十二日に亡くなられたのである。この時、米子の澤車楽氏も亡くなられたのである。鳥取、島根の両巨星墜つとなんともいえない気持であった」（恒松叮紅悼文）

正しく言えば天痴人は、平成四年三月二十二日死去。享年87、春阿孝雲瑞心居士。天痴人には『句集・村鴉抄声』（昭和57年8月・島根県川柳協会刊）がある。

「これは、出雲風土記にある山代の郷、阿手奴伎の里に巣食いおる鴉の一羽が、小農のこぼれ餌をひろいながらぼやく、しゃがれ声のうた　天痴人」が自序である。

柳界の書斎人としてよく知られる山根梟人の四頁に及ぶ跋もある。以下その抄録。

「昭和7年、氏は川柳雑誌に

安閑と三十一文字の阿片性

を発表。これと同時に〝ひとり言二つ三つ〟のエッセイの中で『短歌より飛躍した俺だ。川柳は止めない。いつまでも素人の気を忘れまい』と書いているが、それは短歌に訣れてこの道を選んだことへの、激しい志向を窺わせるものがあった。

草の根の白さまっ昼間の春だ

鍬光れ光れ麦が熟れたよ

立腹の暑さだ西瓜を叩き割る

さあ刈って呉れろと稲田が熟れた

昭和8年、作者30歳、而立の作である。

当時、川雑きっての論客、松丘町二氏は、この〈草の根〉を激賞したが、さらに、その僚友松本琴人氏も大いに推賞している。

この一作は、天痴人氏の作家としての地位を不動なものとし、氏はこの作品をステップに農民川柳家として定着した。それらは全て氏独自の造型であり、みごとなフォルムの結実であった。町二氏の前衛・斬新な作風への傾倒から生れた、その鋭角的な作品は、技法の上でも充実し、詩心はいよいよ磨かれて、より高風へと昇華していった。」（以下略）

遠く光って白き道ひとり

▼次号は「**大谷五花村**」

柳籠裏三篇研究（二十八丁・三十丁）

七久保博・岩田秀行・紀内恒久
西原　亮・瀬川良夫・青木迷朗
佐藤要人・八木敬一
鈴木倉之助　故岡田　甫

379　**か〻様へしゆびんを出してしかられる**　千鶴

岩田＝「しゆびん」は溲瓶で小便をするに用いる陶製の器である。これは多分男性用であって、女性には使えぬものであろう。

この辺の知識とぼしく、実証することが出来ない。

西原＝母が病床についたので、息子が「しゆびん」を出して叱られたのであろう。女はおまる「御虎子」または「おかわ」である。

佐藤＝「かかさま」とあるから、溲瓶を出したのは幼児であろう。西原説の場合とも産褥中とも考えられるが、男女の性別を的確に判断できる年齢に達していない幼児では、おまるとしびんの違いは分かりにくい。叱られてもぽかんとして、何が不都合かわからぬ場合が多かろう。そのおかしみを詠んだ句ではないか。

鈴木＝病人としても「寝たなり」の母親なら側に男性用の「しゆびん」など置いておくのはおかしい。これはやはり子供が「しゆびん」をどこからか見付け出して、何だか分からぬので「かか様」に見せて叱られた、とするのが妥当であろう。

岡田＝前説に反対。母親が病気で寝ている。尿意を催し、用具を持って来させる。少年だから男性用の溲瓶を持って来て叱られた…というのです。

380　**陰膳を三年すへる里の母**　丸水

岩田＝松ヶ岡の句。「陰膳」は、不在の人の安全を祈って留守宅で供える膳部。嫁が里の方へも逃げて来ぬとなれば、これは松ヶ岡、あるいは里の母が指図やも知れぬ。

里の母かわいゝ子には旅をさせ　宮四11
こつちへハ来ぬと里からさわき出シ　一七34

青木＝賛。三年に対応するものと言えば松ヶ岡。女よりの離婚。

鈴木・岡田＝賛。

381　**九月の節句ぢゝいの若衆はじめ**　雨譚

岩田＝九月の節句は、いわゆる九月九日重陽の節句である。別に「若衆はじめ」等という行事があるのではなく、この日長寿を祝して、菊酒を飲むところより〈長寿―ぢゝい〉〈菊―菊座―若衆〉という連想を働かせて洒落たまでである。

西原＝どうも苦しい解であるが、そんなところであろうか。雨譚は学者であるから、元日の姫はじめと対応させたのかもしれない。

佐藤＝「重陽の節句は、菊慈童が創めたに相違ない」という洒落句である。七百歳も生き

たという嬖童だから「ぢゝの若衆」ということになろう。

鈴木＝佐藤兄のお説でよく分かる。同時に正月二日の姫はじめが念頭にあること西原氏のいうとおり。

岡田＝佐藤説、簡にして要を得ている。姫はじめなど考えぬこと。

［二十九丁・原稿散逸］

三十丁

382 **尺八を日かげ町にて吹おさめ**　五扇

西原＝尺八は虚無僧が吹く尺八。

あみがさで殺伐の音を吹き歩き　拾一〇9

日かげ町は「富沢町及び橘町の古着屋…日カゲ町にもあり。日かげ町ハ芝口より宇田川町に至る大路を云字也」（守貞漫稿）とあり、今ならさしずめ日照権が問題になるようなところ。いつも日陰で、町名になったとか。

日の照らさぬところが芝の辺にあり　天三智2

そのような、日かげ町にひそんでいたカタキを、苦心の甲斐あって虚無僧が見出し、見事本懐を遂げたという劇的シーン。よって、以後尺八は不必要だから「吹おさめ」と相成った次第。

何時とすかしてみるハ日影町　七九31

瀬川＝賛。劇的シーンにしてはいかにも静かである。

青木＝賛。目的が達せられたので、心静かなのでしょう。その昔は、

天蓋をぶる〳〵として吹キはしめ　五15

佐藤＝賛。敵持ちのため、かくれ住んでいる者も、「日陰者」という。日陰町でこの日陰者を暗示した句案である。

七久保＝佐藤説に賛。ただし、この句は妻敵討ちであろう。

日かけ丁ひよんな二人リへ店をかし　天五信2

鈴木＝小生は次の例句から礎稿に賛成。

居る所を見たのが竹のふき納　四28

岡田＝礎稿及び佐藤説に賛。

383 **どろぼうを壱俵貰ふ村和尚**　門柳

西原＝「村和尚」は田舎のお寺の住職。村人が泥棒をとらえ、俵に入れてしばったのを、和尚さんが引き取り、訓戒を与えるというのであろう。「泥棒を一俵貰う」と表現したおかしみ。

佐藤＝賛。和尚さまに処分を一任するのである。

岩田＝賛。「江戸川柳辞典」には「農村では悪事をした者をこもですまきにする。和尚が慈悲で命乞い」と註するが、佐藤氏説の方がよいと思う。

どろぼうを壱俵にするむごい事　二二28

鈴木＝同。「貰ふ」は佐藤兄のいうとおり、まかせるのである。

岡田＝賛。

384 **松過ギのばくちなぐさみ所コでなし**　桂雲

西原＝松過ぎは、江戸にあっては正月の七日過ぎをいう。それまでは、正月気分で法度のバクチもなぐさみとして大目にみたが、松過ギにやっているのは、もはや「本物」である。

松過はもうなぐさみの場を離れ　安九満

鈴木・岡田＝賛。

川上三太郎賞作品募集　雑詠5句（未発表作品）を千円（小為替）同封で4月20日までに〒956　新津局私書箱15号　柳都川柳社へ。時実新子・大野風柳の審査により川上三太郎賞（副賞3万円）準賞二名（1万円）贈呈。

秀句鑑賞

同人吟西出楓楽

—2月号から

例年、一月十五日に発表の年賀状の当選番号を、立春を過ぎてから調べます。そして、もう一度年賀句を味わいます。

近年、お正月情緒が薄くなった中、心ときめくのは柳友からの年賀状です。年賀句は作りにくいとの声をよく聞き、ご多分にもれず私も毎年苦労します。その理由の一つは暮れに詠むのですから、実感句でないということ。もう一つは、川柳の性格によるものと考えられます。つまり、ハレとケ（晴と褻）のケの色合が濃い文芸ですから、ハレの最たるお正月は、題材になりにくいという訳です。

それなのに、万葉以来、言霊（ことだま）信仰を捨て切れない我々は、お正月をめでたく寿ぎ、言霊さんをせいぜい煽てなくてはなりません。そうしないと、気を悪くして、祟られては大変と思ってしまいます。「めでためでた」の句が上辷りになりやすく、作句しにくいのは致し方ないことなのでしょう。

こうした悪条件を克服したいい年賀句に出会うと、幸せが沢山もらえた気分になります。

抽斗に空き箱のあるあたたかさ

桑原道夫

「抽斗」に、作者のなみなみならぬ思い入れがあります。抽斗の空き箱を、どんなものごとでも受け入れられる心のゆとり、と置き替えてみましょう。下五の〝あたたかさ〟が生き、この句は作者自身の人柄に違いない、との確信が、動かぬものになってきます。

惜しかったねにも皮肉派同情派

海老池洋

大人になるとは、悲しいけれど人が悪くなることかも知れません。けれど、それによって心の傷を未然に防ぐ手だてになるときもあるでしょう。ただ、せめて趣味の世界では、こんな場面では同情派だけと思いたいのです。

生きるとはめがねをふたつ持っている

玉置重人

このめがねは、遠用、近用でしょうか。はたまた普段用とよそゆき用でしょうか。どちらにしても〝ふたつ〟が効果的で含蓄のある句になっています。

年金の暮らしも捨てたもんでない

桝本蕗児

生活する上で、お金はいくらあっても十分と言えるものでないでしょう（などと言うのは、十分に持ったことない者の悲しさかも知れませんが…）。不況、低金利のこの頃、年金の恩恵に浴していない私には〝捨てたもんじゃない〟どころか、うらやましい次第です。

DOCTORも父と語れば普通の子

田中正坊

句作りの一つの例として取り上げました。子息の一時帰国がテーマの五句連作です。偉くなった息子との再会の喜び、照れ、眩しさ、誇らしさがひしひし伝わってきます。この句が敢えて、英語で表記してあるのは、彼が外国で研究者として活躍中であると、読者に伝える意図があっての上でしょう。

主婦の用事に雑用はない水の音

結城君子

ひたすら家族のために、果てしない家事と向い合う主婦。とりわけこの寒さの中の水仕事の途中、うんざりした気分に襲われたとしても、非難できるでしょうか。「雑用はない」と自分自身に言い聞かせ、励ましているいじらしい主婦の姿が見えます。下五が状況を雄弁に語っています。

産んで育てて母の帳尻なぜ合わぬ

両川　洋々

この句を子が詠んでいる場合は、見返りを求めない謙虚な母に子がじれている、と考えられます。反対に母が詠んだとすると、親不孝な子への嘆きです。母親のありようとして断然、前者でなければなりません。

フラスコで老いの呟き煮つめてる

春城　武庫坊

ただ作者の心の中に浮かんだ風景が、詠んであるだけなのですが、フラスコに意表をつかれました。表現力の豊かさで、しばらく異次元に遊ぶ思いです。

からすにもきっと居るだろナルシスト

江口　度

擬人法は作句上、目新しくない手法ですが、この奇抜な着想を買いました。味わえば味わうほどナルシストのからすが、本当に存在するように思え、愉快になってきます。からすを他の鳥に替えたのでは成り立たない〝動かない〟句です。

忙しいもストレスひまもまた困り

山本　義子

人間の本質を、ズバッと突いてあります。我が儘で、贅沢で御し難いと嘆く裏に、人間を愛するまなざしが見えます。

大丈夫　肩に大きな手がのった

宮口　克子

状況を素直に詠んであるだけですが、大きな手の主の人柄まで読めてきます。〝大きな手〟は単に物理的な意味だけでなく、包容力を持つ心の大きさも含まれています。そしてその手の温かさが、肩からからだ全体に広がってゆくさまが読む者にまで伝わり、まさしく人間讃歌の句と言えましょう。

コミカルな風半分はわたしの掌

小倉　アサ

いわゆる心象句ですが、重い言葉がないせいか、気楽に抵抗なく心の中に入ってきます。眉間の皺を増やすことなく、自嘲気分を吹き飛ばせそうに思えます。

弓を射る方向さえもわからない

大角　正道

昨今の社会、あるいは生き方に対する漠然とした不安感が、巧みに摑まえてあります。やみくもに射るだけでなく、チャンスに即し射られる弓を、心の中に持ち続けて下さい。

それにしても有無を言わさぬ改札機

三宅　保州

手まで喰われそうな改札機の生態が〝それにしても〟で、言い尽されています。心にくいまでの手だれに脱帽するのみです。

中流の意識の中にある不安

岸　桂子

国民の八割が中流意識を持っていたバブルが、はじけた後の世相が、ストレートに詠まれています。下五にもう一工夫欲しいとも思いましたが、何度も読み直しているうちに、この正攻法がだんだん好もしく感じられるようになりました。

思い出が背負いきれずに旅に出る

宮西　弥生

上五、中七の表現に、作者のなみなみならぬ力量がかい間見られます。作者にどんなドラマがあったのかわかりませんが、深刻なものに違いないことは確かです。旅という非日常性の中に身を置いたり、川柳での吐露による解決方法は、とても賢明だと思います。

第九も歌いかぶ菜も漬けて年暮れる

川上　より子

第九とかぶ菜のコントラストの面白さから容易に作者像が浮き彫りになります。ものごとに意欲的で、まわりから見ると、ルンルンとそつなくやりとげてしまう主婦です。しかし、このように生活をエンジョイ出来る裏には、不断の努力があってのことと、想像に難くありません。主婦という立場が同じだからこそ、作者に無条件降伏です。

西田柳宏子選

宝塚市　永田暁風

飼い猫に小憎い女の名をつける
女河童が傘さしかける芋の葉の
思い出の背景を少しずつ補修
象の目に優しく過ぎる春の雲
屋上へ誘うて星のない夜空

泉佐野市　稲葉洋

弱り目に男でしょうと背を押され
どう見ても女性主導のペアルック
格言の八起きめきつい老いの坂
オウム禍もなかったように富士初日
対の糸切れて葛藤解けてゆく

枚方市　濱田良知

今朝の雪　君の訃報に声震う（さようなら英一さん）
僕の手紙読まず旅立ち急ぐとは
よく飲んだよく唄ったね上六で
色っぽいカラオケ聞きたいもう一度
二人っきり三坪の事務所忘れない

寝屋川市　宮崎菜月

遠き子がひらりと帰る鶴のよう
きさらぎの水仙郷の香に佇てり
人間と七里結界したい森
加点していくと立派な夫です
笑いすぎ旅の車中の軽い飢え

今治市　野村清美

百人一首　老若男女輪に溶ける
テトラポットへ無駄な抵抗したい波
諦めがよくてストレス溜らない
老いひとり小さな土鍋を買ってくる
知らない振り出来ない母の苦労性

今治市　塩路よしみ

雲つかむ話についぞ乗って見る
浴びるほど飲めば煩悩消えますか
研ぎ水に女の乱が澄んでくる
泰然と父輪の中にいて安堵
幸せは背な借る夫がそばにいる

富田林市　欄　智久

母子家庭　包丁上手に研いでいる
どんくさいと妻にはっきり言いきられ
お互いに本心言えば離婚だろう
ホームレス人の良さそうな顔をしてる
良い事が有ったか無口よく喋り

羽曳野市　安芸田　泰子

孤独から解き放たれた電話口
眼差しに無口な愛を確かめる
何事もなかったように神戸の灯
空瓶が並んで終るお正月
眠る山　春一番が呼び覚ます

尼崎市　森　安　夢之助

美しい嘘が混じっている祝辞
野次馬が集まる俺も飛んで行く
お婆さんがお寺へ愚痴を捨てに行く
大川の流れを変える石を積む
含み針やんわり受ける年の功

和歌山県　杉　山　精　子

矢印の切れたあたりにある迷い
何という事はない日が続く幸
思慮深い孔雀は羽を広げない
もうひとりの私が迷う分岐点
底辺の広さを計りきれる愛

東大阪市　今　岡　貞　人

松籟や歴史にもしもなどはなし
六法の裏で今年も飯を食う
余生なお心に虹を忘れまい
今年からのスタートしかと夢がある
有難し傘寿へ一歩　満　持して

米子市　永　井　三津子

恋の森　理性の針が狂いだす
人生を投げたいような岐路に立つ
年長けて知った家族の有難さ
新春に守れぬ誓い書かされる
寂しくてこの手を繋ぐ人探す

倉吉市　高　多　博　丈

久しぶり夫婦で憩う露天風呂
宴会に強肝剤を飲んで出る
初対面なかなか出来る面構え
少年の笑いを消した塾の風
理髪店　噂の火種置いてある

鳥取県　高　尾　京

港にも山の畑にも初日の出
今年こそいじめ無きよう祈る日々
健在の家族　小さな幸願う
仏前に供えるそら豆よく伸びて
チューリップ水仙の芽も春を待つ

弘前市　櫻庭順三

左遷地の津軽吹雪にいたぶられ
津軽凧ひゅうひゅうびゅうと翔んでいる
竜飛岬の風を知ってる祖父の貌
千早城　鎮守の墓は風ばかり
雪しんしん地吹雪津軽三味が哭く

福岡県　本田忠男

嫁が来て少し遠慮が癖になる
飼猫が取った鼠を見せに来る
不具の子にすんなり嫁が来てくれる
ボランティア一人前の顔になる
振り返る道に一輪花すみれ

富田林市　藤田泰子

足元の氷もぽつぽつ解けてくる
私の堪忍袋の小さいこと
父になり大きくなってゆく息子
三回忌さくらは悲しい花となる
こたつから出ないと何も始まらぬ

豊中市　石川勝

考える鶴は一本足で立つ
不機嫌で出るラーメンのぬるい店
負けたふりするのが母はうまかった
変人がもつれた糸を解いている
わたくしは無実　両の手をひらく

和歌山市　木村親蹐

手に入れた自由さびしいものと知る
寡婦として越える火の坂水の坂
定年後妻の内助をしています
就職難いっそ会社を創ろうか
地下道で寒さにすねるダンボール

今治市　渡辺南奉

善人のぬれ手に粟はくっつかず
神様が全て知ってる訳でない
満足をしたら眠たくなって来る
疑えば空の青さも虚しかり
すぐ妥協そんな男であかんたれ

八尾市　村上剛治

保育器でかわいいあくびする生命
子育ての親も子供に育てられ
夢だとは知りつつ期待してしまう
誰も皆見えない宝持っている
付き合っていれば人間見えてくる

和歌山市　吉村さち子

留守電話　台詞のように言い残す
亀の歩に合わせて余裕の中でいる
子が駈ける道一線に明日を指す
善人に矢張り重い鬼の面
釘一本抜いて迷路を確かめる

富田林市　山原昭水

中学校歌うたい青春とりもどす
丸くなろ自問自答で今日も暮れ
禁酒中　二日酔した夢をみる
飽食がつづいて心飢えている
ふる里を有名にした渡り鳥

羽曳野市　芦田絢子

十回忌まだ外せない妻の面
風邪引かぬようにと墓に声かける
もう少し遊んでおいでと墓の声
面影を追えばいつしか愚痴になる
孫の手を素直に借りる初もうで

今治市　越智青園

結び目がゆるみ不満がぽろり出る
仲が良すぎてけんかの種がありすぎる
いつ払う出世払いの請求書
右へならえ急にやる気をうせさせる
奥様と呼ばれイワシを鯛にかえ

富田林市　中井アキ

恋終り止まったままの鳩時計
学歴も職歴も捨て画布は白
だいじにな吾子のひとこと新春にきく
まだ消えぬ炎で白髪染めてます
かあさんを抱いて看病有難う

大阪市　尾崎黄紅

象の命も蟻の命も変わらない
学歴が邪魔になるほど落ちぶれる
姿そのまま執行猶予の冷凍魚
何かあったら儲けてる評論家
金貯めているらし病気してるらし

鳥取市　岸本宏章

初詣きのうと違う風に会う
リストラの付け残業で切り抜ける
白い歯の奥に笑いが溜めてある
正論を吐いて七人敵ができ
戦後処理いまだ帳尻合わされぬ

和歌山市　木村初子

いくたびも命拾うて喜寿の春
ポーカーフェイス笑いがほしい時もある
海にすねて風化しだした磯の岩
レジャーブーム勤倹貯蓄死語となり
火の車回る虚飾の舞台裏

大阪市　池田一男

二足す二を六にしたくて背伸びする
会者定離今年も梅が咲いて散る
途中下車できぬ片道切符持ち
おでん酒今日も隣で愚痴を聞く
磨かれぬ金剛石のままで老い

八の字の末広がりを信じたい
マグマ住む土壌の上に家が建つ
安穏が過ぎてこの頃物忘れ
逆境の谷でやさしい風と逢う

秋田県　湊　修水

床の間に鶴を舞わせた初春の膳
一枚の賀状に消えぬ渦がある
だとしても嘘をつくのも思いやり
重ね着に冬一番が吹き溜る

大阪市　一本勇太

ファックスで一番に来た年賀状
神戸からお元気そうな年賀状
慕われた上司貧乏くじを引く
連休が多い今年の旅予定

寝屋川市　太田藍子

強がりの影に寂しさ見え隠れ
電話来るとたんに変わる声調子
美しくなって来る娘に目を細め
ひと区切りつけて楽しむミルクティー

福岡市　井崎ミサ子

うつらうつらお昼さがりのお月さま
アバウトに話して善人へと逃げる
その後を尋ねようとはせぬ偽善
かくれんぼずうっと鬼を待っている

寝屋川市　森茜

特上の値段を聞いて並にする
低気圧　今夜のうどん辛過ぎる
ブルドーザー裂けた地球を補修する
値切りよいように端数をつけて売る

河内長野市　大西文次

落ちてなお未練に燃える紅椿
喜寿越えて妻にぼちぼち上手する
油断して幼馴染にだまされる
初雛を買う懐は暖かい

河内長野市　水谷笙子

振り返りゃ地震サリンにクモ騒ぎ
正論を吐いて無念の被告席
里帰り素直に聞ける母の愚痴
比類なきオウム事件に富士も泣く

大阪市　川内叭笑

仮設住　政治に欲しい温か味
成人の日は私の誕生日
医者嫌いアロエ見事に育てる
乾杯の音頭くらいは出来そうだ

高槻市　乙倉武史

ひとときをひからねばひからねば朝の露
信頼の絆　本音ぶっつける
不自然な笑いへ本音かくれんぼ
み仏はこころの宇宙かもしれぬ

八尾市　大内朝子

大阪市　松永会美

大正の終りが古希を迎える日
早く来い無料のパスの貰える日
老夫婦　動物園の陽溜りに
ボンヤリと爪咬む時は平穏で

高知市　細木子龍

反核の鼓動をさげて子等に説き
ヨーロッパ旅へ単語の数珠つなぎ
足早の寒行僧へ雪が舞い
検査してあとは過保護の薬漬け

寝屋川市　籠島恵子

逃げ道を残してくれたのは娘
又逢いましょうと約束それっきり
誉められて調子にのっているわたし
ダラダラとしよう今夜は金曜日

大阪市　中井正秀

肝臓をいためんように呑んでいる
お正月一人家にてろう城す
あの世とは苦しい処かも知れぬ
彼女とは七夕の夜　会ったきり

綾部市　藤田芳郎

ひざまずく位置の小石に角がある
嘘の一つがつまみ洗いのまま乾く
ワープロという置物を子に貰う
逃げ道を見つけて互角だと思う

兵庫県　仲井素水

生かされていますと賀状書く米寿
それぞれに未来につなぐ種を蒔き
倖せを亡妻が大方持って逝き
記念樹に黒がねもちの木植え米寿

日立市　加藤権悟

ラッキーセブン　チャンスに眠っている女神
千羽目の鶴が与えて来たチャンス
軋む日もあった夫婦の半世紀
湯治場の鍋が優しい夫婦箸

兵庫県　森脇和子

今度来る時はと楽しみ置いて去に
好き嫌いあって順番狂い出す
不都合は袖に包んで妻の笛
爪丸く切って腹立ち抑えとこ

東京都　瀬戸きん子

雑煮椀買い足して待つ孫の顔
生まれ来る児にも声かけ祝膳
孫よりも爺が駆け出す奴凧
聞きましたドスンと隕石落ちる音

神戸市　向井泰子

雑用に追っかけられる夢をみる
温泉にいのち沈めて甦る
松ぼっくりがコロコロコロとよく笑う
遅刻して空いてる椅子が真正面

和歌山市　楠見章子

冬日を浴びてテーブルクロス笑いだす
ダイアナ妃ガラスの靴がひび割れて
標準語　調子狂ってくる話
話下手　善人らしく見えてくる

松江市　松本知恵子

福ねずみ猫に捕まらないように
片方の手袋なくし冬になる
主張みな虚しいだけの冬の空
ゆったりと柚子湯に浸る土曜の夜

西宮市　古谷ひろ子

悪夢まだ覚めぬと賀状神戸から
飾らない自画像ことしこそ描こう
天性の明るさ鬼も眠らせる
夫も子年わたしときどき猫になる

鳥取市　杉本孝男

親の愚痴　笑って諭す娘に育ち
混む電車も苦にはならない里帰り
掌の中にあしたへ託す鍵握る
薬代無料にされてから効かぬ

寝屋川市　太田とし子

お隣の事まで祈る余地がない
おしゃれする梅が一輪咲いたから
仕事はじめいつもと変らぬ炊飯器
祝い鯛　瞑想してる松の内

今治市　村上久美子

垣根越し小鉢が往き来して温い
遠慮しているうち消えてる鍋のフグ
列乱す蟻には蟻の訳があり
何処までがまともどこから非常識

兵庫県　円増純子

無理もなく痩せる話へ引き込まれ
おしゃべりも馳走　女の新年会
逃げ道はいつも開けてる母の胸
結び目を信じて翔んでみることに

旭川市　朝倉大柏

食う為でない絵に今日も凝っている
食って寝て日暦だけはちゃんと剝ぎ
合掌をすると仏に見える石
すんなりと育ったように子は思い

和歌山市　山根めぐみ

魂が光ると海も光り出す
諭してくれる声は低くてよくとおる
無駄吠えを叱ってくれる夫がいる
安全ネット越えて女は翔びたがる

鳥取県　藤山弘子

枝ぶりに職人かたぎみせつける
大盛の枝豆　酒がすすみすぎ
口実がないから次へ進めない
口実をポケットいっぱい詰めている

和歌山市　津村武春

この道で生きると決めてからの坂
根性で越えて来ました七曲り
木守柿競う相手の無い寒さ
愛してるなんて妻には言いそびれ

唐津市　浜本治幸

残り火を燃やし続ける我が余生
一年の計が二年の計となり
責任感強くてストレス溜めている
終章はきれいな夢で終りたい

唐津市　江川青琴

元旦や年に一度の孫の顔
大掃除二センチ欲しい背の丈
名を呼んで水を供える愛犬の墓
気力まで奪って去った愛犬の死

鳥取県　原みさを

レンタルの晴着でいいと言う三女
雪国に生まれて雪をあなどらず
ふるさとに木綿豆腐の好きな父
豆腐屋のラッパも消えて乾く路地

大阪市　今西静子

コーラスへ仲間を誘う団地ママ
カーテンの風　心地よいシクラメン
酔うていても警戒心は持っている
めでたい日父が踊った黒田節

藤井寺市　鴨谷瑠美子

早春に逢いたい便りぬくみあり
出窓には心がわりをしない花
脚本がなくてそれぞれ生きている
足首に亡母のこはぜが合うてくる

倉吉市　山本玲子

トタン屋根ベートーベンの引き語り
代表になると器もできてくる
家業継ぐ父のハードル越せと言う
春一番ここらあたりでコート脱ぐ

尼崎市　田辺鹿太

お茶漬をかき込む顔に旅疲れ
二度目には受けなくなった父の芸
この暗さ妻が三日も風邪で寝る
忠告を素直にきけば海も凪ぐ

唐津市　山門幸夫

お年玉　孫を指折る老い二人
万両が一際紅く綿帽子
孫トップこらえきれずに伴走す
鶴たちのヒマラヤ越えに涙する

柏市　上鈴木春枝

証拠にもたせる写真にある日付
家計簿が知る食べ盛り伸び盛り
責任を持たぬ男の無駄話
運命線のいたずらジョークにしておこう

兵庫県　安達　厚

親不孝　思い出すたび亡母こいし
六十路から夫婦げんかは負けにする
風邪引いて妻への借りが一つふえ
窓越しの朝日を入れる妻のお茶

和歌山市　古久保　和子

定価なら損だと決めた主婦の知恵
良い方へ話が進む妻の嘘
おばさんに戻り婦長の市場籠
神頼み来年回しにされた絵馬

田辺市　大峠　可動

一月十七日　時の会話に語り継ぐ
第三者　鬼も仏も飢えている
男には戦があって雪を踏む
すきま風ここにも過激派がいるぞ

兵庫県　高見末野

片言の孫を囲みて初笑い
覗き見のカルテへ読めぬ字が走る
古里の炬燵と母の灯が恋し
おはようと猫に言ってる朝の膳

大阪府　原　美恵子

手作りの味噌　賞めて欲しくておすそ分け
誰も知らないと本人だけが思ってる
しまったと思う人から年賀状
青い空見てたら鬱が晴れました

東京都　清原悦子

天気図へチャンネル変えて願う晴れ
耳よりな話がお茶をさめさせる
濃い口のタレに慣れない街に住み
ウップンを晴らしてくれた長電話

香川県　山崎はつ恵

地獄まで落ちて体温高くなり
聞きずてのならぬ言葉に血が上る
好物の食卓　箸も踊り出す
好き嫌い上手に分ける箸づかい

高槻市　小林一閑

娘の手　届く処へ来いと言う
経済の活断層が動いてる
抗癌剤いつまで続くぬかるみぞ
願いごとせずに無心の初詣

岡山県　国米きくゑ

約束の朝　弾んでる赤い靴
細い指　広い背中に好きと書く
余所目には満ち足りてると言われます
百歳の笑顔に貰う力水

鳥取県　山本正光

猫が仔を産んだと電話　昼の妻
助け合う夫婦に今日も陽が温い
口実を鳩尾へんで考える
断崖の松根の深さ語らない

羽曳野市　川田　晋

ダイエット御節片付くまで休み
孫を抱かせて貰えない風邪マスク
決闘とまではいかない恋仇

宝塚市　黒台　伊佐武

娘は嫁ぎ喧嘩も出来ず夜の長し
花街でおきばりやすと舞扇
愚の前に利口が衿を正し居り

箕面市　木村　天弘

今年こそ不況の出口見付けねば
玄関に今日の気分が脱いである
友情を結ぶ異国のボランティア

羽曳野市　麻野　幽玄

三ヶ日未だたれからもこぬ電話
やり場なき怒り今なぜ核実験
撮りだめのビデオ等見て寝正月

愛媛県　安野　案山子

先生に勇気貰った逆上がり
どん底を生き抜いて来たごつい指
窓際の席へ冬日が暖かい

大阪市　岡本　久峰

収容所野草の新芽奪い合い
赤十字マーク哀しい空の箱
ツララ下がる便所掃除に少佐殿

八尾市　村上　ミツ子

木枯しに風邪のウイルス活気づく
神さまにお礼を言うてまた頼み
いつからか目は口ほどに物言わず

高槻市　芦田　静江

退院に睦月の空は緋に染める
母の留守　子連れ二泊に初春の乱
太陽の塔　泪する太郎の絵

砂川市　武田　正美

馬車に引かれて夢たらたらと深くなる
騙すのが上手　毛皮を着た女
氷点下　厳しさつづく北の春

和歌山市　福重　美子

正直に生きてお金は溜らない
八起目の夢にしっかり種を蒔く
お棺には花いっぱいがよく似合う

大阪市　亀井　円女

好きな字は昔も今も愛と夢
ガンに克ち命におまけがつきました
残り火をいとおしみつつ老い二人

寝屋川市　井上　すみれ

百歳がうまいジョークで逃げてはる
節約がケチに替ってつづいてる
命綱ボツボツ脆くなってきて

八尾市　生嶋ますみ

黒豆をもらって炊いてあげる仲
子育てが終って気付く独りぼち
前向いて肩の荷おろすまで走る

兵庫県　北川とみ子

重箱の隅で素顔を見抜かれる
強くなる妻に迷わずついて行く
意地一つ抱いて我慢を白くする

姫路市　服部一典

電話帳いまでも亡夫のフルネーム
妻の無理　病人だから聞いてやる
立ち小便　昨日と同じ場所でする

鹿児島県　大山舞烏影

新札に羽がはえだすお正月
ビニールのハウスで季語は昇華する
きらきらと薩摩切子で酒おどる

松江市　小西素子

重荷にも楽しみもあり年賀状
無駄口に心の奥を一寸出し
他人だとあきらめがつく影ぼうし

島根県　谷岡ふみ

鍋物を囲む家族の雪の夜
眠られぬ夜は都会の娘を案じ
月冴えて亡夫の影か樹がゆれる

松江市　松浦登志子

各停をあえて選んだ帰り道
サンキューと大正の父照れ笑い
可能性信じた賀状減ってきた

唐津市　山門タミ

タクトとる後ろ姿もはずんでる
海原に叫べば返す波の声
捨てたはず又も拾って抱く未練

今治市　渡邊伊津志

余生など考えられぬ忙しさ
役に立つ人になることだけでよい
頼られることを励みに生きている

八尾市　平川幸枝

着ぶくれて境界線のないヒップ
乱世に母のヒップは太くなり
干しぶとんどれもその子の匂もつ

羽曳野市　西村りつえ

ボーナスの額聞くだけで親はよし
冬木立　春のファッション夢見てる
老木に知恵をもらった春の精

東大阪市　谷口義

人間が出来てないので寝つかれず
決心が一夜で変る夜と朝
夜が明けてみれば大したことでなし

羽曳野市　徳山みつこ

カタコトが海越えてくる初電話
新しい内にとメロン厚く切る
悪でなし善だけでなしマイペース

東大阪市　松山隆

自転車が小回りの利く老いの足
事あると気前よくなる貧乏性
転々とふるさと書けぬ孫が居る

熊本県　高野宵草

うなずいてくれたお前と四十年
免停で歩けば街が新鮮な
子に見せるうしろ姿が崩せない

島根県　安部恵美子

生かされて無事に暮した晦日そば
言い訳を妻は笑って聞いておく
新年の願い平和を祈る鈴

岸和田市　亀井皎月

約束を取り消すことのひと苦労
歳よりもみばがひと足先走る
古希が来てハナハトマメのクラス会

寝屋川市　坂上高栄

赤い靴　思わず口に試歩の朝
自負少しまだ残照に照り映える
四海波穏やかなれと賀状来る

唐津市　山口ふさ子

体重がどんどん増える寝正月
じっと耐え踏まれ蹴られて立ち上がる
元旦の大往生とは物凄い

米子市　服部朗子

酒の肴は可愛いことばで足りる
小袋のパッチワークが嬉しくて
一心に汚れを拭いてきた手足

香川県　高橋たみ

娘がそろい今年は楽し初まいり
川雀すみきっているお正月
角もちも丸もちもあるお正月

米子市　木村春枝

古希という大台に乗り紅を買う
年金の不安を語る子らと飲む
溺愛で気まま許したつけ重い

横浜市　金森徳三

休肝日ずらしずらして年が明け
天井にポツンと冬の蚊が生きて
お年玉もらって散らかし孫帰る

熊本県　岩切康子

温泉で新年迎え亡母思う
政界の不満テレビに吐いている
梅の花　蕾のままに三ヶ日

鳥取市　藤　ふうこ

人並と思う孝行出来かねる
田舎路　濃き紫蘇の香に母を恋う
不死鳥のように今年は生きてやる

島根県　武島　ちよえ

神様も手に余るだろう絵馬の数
嫌なもの見て来たらしい雲の色
枯枝と思っていたのに芽を吹いた

島根県　松本　聖子

しめ縄にことしこそはの願いこめ
出勤の印に感謝をこめて拭き
病む夫に寒さきびしい雪の窓

大阪市　鈴木　トヨ子

玄関を不自由にする葉牡丹鉢
不幸な子も集いて嬉し屠蘇の味
離婚してわが筋通した今の幸

静岡市　中西　雅

女盛りとっくに過ぎて悔い残す
うっかりをとぼけ上手でうまく逃げ
湯の香り浴びてストレス流す旅

兵庫県　大谷　幸次郎

タクシーも機嫌良い日と悪い日と
湯の中で豆腐ことこと肩を寄せ
試乗した新車に夢を置いてくる

和歌山県　吉田　武治

良く耐えてきたと頑固さほめてくれ
生かされてしみじみ朝のうまい食
まだかいな蕾に心弾ませる

宝塚市　飯西　ミサヲ

やり直しきかぬ人生振り返る
膝の本　眠りぐすりのように効く
冷凍の新鮮野菜やっと慣れ

阪南市　正橋　正

運不運頓着もなく生きている
運に見放され自分を取り戻す
友情に亀裂入らぬほどの距離

兵庫県　西山　八重子

秋が逝く小豆ころころ選りながら
カラフルな薬に今日も身を委ね
千円の時計私に妙に合う

吹田市　西岡　豊

白足袋の意欲満々初稽古
新聞の音に目覚めて動きだす
マイカーに家族詰め込み新春の旅

海南市　谷口　義男

果物も野菜も旬の味忘れ
自分では老人などと思わない
逃げた運　拾った運も持って老い

高槻市　江原秀夫

今年また恙無く暮れごまめ炒る
まだ飲めるうれしさに酔う喜寿の屠蘇
好きだよと言わぬがじわっとくる温み

唐津市　市丸晴子

はしゃいだりしょげたり影もついて来る
農薬は播かぬ私が還る土
はき溜に鶴が降りない永田町

唐津市　岩崎實

それなりの仕事で新年動き出し
帰らぬとダダをこねてる孫が好き
一歳児ため息ついて笑われる

尼崎市　的場十四郎

二次会で意気が合ってる国訛り
車椅子おりて気力の一歩二歩
千羽鶴　重い約束ばかりする

鳥取市　山本崇

飽食の猫は忘れたねずみ取り
真夜中に耳を擘く救急車
初雪を冠って咲いた白椿

伊丹市　延寿庵野鶴

新米を試食して貰う仏さま
ナンバーズ　ポロリと落ちる蒼い月
遊廓は何画と聞く吾が娘

鳥取県　橋谷静江

ねずみ年やはり働く年男
きっぱりと断わりきれぬ人の良さ
悪友の誘いに乗って悔いのこす

和歌山県　中後清史

亡父の生きざまを刻んだ錆びた斧
横車押した背中へ寒い風
遮断機の向こうの花は麗しい

鳥取市　冨山雄幸

すらすらと偽証の陰に泡浮く
雪割草　積る思いへ春を待つ
擦る墨に恋の炎が燃えてくる

大阪市　川原章久

ビタミン剤消化整腸薬漬け
どっこいしょ宅急便の親心
屋根裏に夢持つねずみが今住めぬ

松江市　佐野木みえ

満たされぬ思いに土手の土筆摘む
贈る言葉　校舎の桜も聞いてます
備前焼に水仙一ぱい活ける朝

和歌山市　和田美寿子

気短なくせ立話の長いこと
幸せな人許り来る同期会
日帰りのバスにて入る露天風呂

役目まだ果たせず風の灯よ　米子市　林　風子

弓キリリと絞る弔い合戦だ
去る者は追わず一人の舵を切る　尼崎市　野瀬昌子

叱られてなお縋りつく母の膝
井の中の蛙が勝手ばかり言う
背信の女にふる里遠くなり　今治市　中村好恵

大根がぐつぐつ夫待っている
影法師に背なの丸さを指摘され
また一つ山切り裂いてのびる道　和歌山県　藤井春子

おしゃべりも入れて母さん多事多忙
わらべ唄　祖母が唄えば味がある
古釘が艶よく上げた黒豆の冴え　大阪市　福岡雅子

闇市の師走もあった若かった
窓閉ざし私のひとり居る世界
杵の音知らぬ世代の中にいて　横浜市　後藤早智

十二月ジングルベルに背を押され
年賀状　今年こそはと十二月
息子にもらうやけに嬉しい福袋

ただ酒の内緒が腹に落ちつかず　尼崎市　尾宮弘治

雪深い賢治の里に母を訪う
死んだ方がまし口癖に医者通い　米子市　猪森スミヱ

気ままから覚めてすこうし捻子を巻く
安売りの卵が踊るおでん鍋
孫台風去って二人の餅を焼く　鳥取市　田中友子

悪知恵を絞る頭はよく冴える
母の川いつもよどみのないように
居酒屋で教師の素顔垣間見る　熊本県　大川幸子

雛壇の席は忘れない官女
よく親を観察してる子の日記
早とちりこれが私の悪いくせ　羽曳野市　山本たけし

帯の鈴チリリと鳴って新春の杜
ポアされず迎えた新春に湧く闘志
誤字当て字　合格無理と絵馬が言う　兵庫県　玉田三重

挨拶を無口で通す無精髭
年寄りは海の深さを知り尽くす
敬老会昼まで野良の鍬を持ち

大阪府　澤田和重

妻の愛　三人の子に盗まれる
長老の出番　意見のまとめ役
末席で飛ばした意見てきびしい

東大阪市　北村賢子

お百度を踏んで気持がらくになり
握る手を未練心が放さない
生真面目でばか正直は亡父ゆずり

尼崎市　軸丸勝巳

首相退陣　今年余震は永田町
締切りにかけ込むように友は逝き
弔辞流れる故人も僕も聞いている

高槻市　傍島克治

返答をせぬのが母の答です
小春日にうとうとしてる鬼瓦
落し穴墓穴となるも知らず掘る

香川県　田中ふみ

登山帽被れば若い血が騒ぐ
一瞬の笑顔が見たい熨斗袋
はよ逝った墓地ない夫をソッと抱く

島根県　三代朝子

老い哀し話す言葉はひとつこと
陽が落ちて風の子散った河川敷
ささやかな宅急便に義理託し

鳥取市　山宮愛恵

歳神さまをまつりシャキッと身がしまる
ねの春のねずみ談義の温い酒
天も地も怒る　もんじゅのたれ流し

十和田市　阿部喜久江

いざの時　頼れるものは自分だけ
気ばかりがせいて足腰ついてこぬ
尻馬にすぐ乗る癖は親ゆずり

八尾市　神原まさと

背な押され乗ってしまった急行車
現役のしるしバッジをつけて来る
一円を拾う心がまだ出来ぬ

鳥取市　坂田和歌子

泥水へ花ひらひらと無惨なり
大事な日開く聖書に縋ってる
河川敷　昨日のゴミもお正月

島根県　森茂美

年金を齧る曽孫ができた幸
お雑煮に夫婦の味をかみしめる
駅裏に通せんぼうの灯が点る

高知県　百田幸

美人ではないが笑顔が魅力です
玄関へアロエもしまう霜予報
ピラカンサ野鳥が群れる過疎の庭

鳥取県　橋本多哥由

ちぎれ雲　何かわたしを問うている
影法師ぼくを信じているらしい
上司の小言首筋を撫でてゆく

愛媛県　中居善信

はったりをたまには男言わなくちゃ
寝返りをうった途端に皆忘れ
自慢にはならぬ息子が一人いる

犬山市　早川盛夫

精一杯働いたのでうまい飯
貸しをつくって鷹揚に物が言え
年輪が黙っちゃいない祭り事

徳島県　安宅美代子

目障りにされても雑草マイペース
満ち足りていずこも同じ子の悩み
定年の枯木に花を咲かせたい

尼崎市　松下比ろ志

きっちりと正月が来た注連飾り
心底に楽しむ思い出一つある
ワープロに友の癖字も見なくなり

兵庫県　上月梅村

遺産まで他人勝手にきめたがり
着飾って日焼けした手の置きどころ
よくよくの事にも慣れた妻がいる

八尾市　鷲見章

陽は昇り陽は又沈み我病める
柳友の便りうれしき応援歌
冬銀河　煌々たるは妻の星

静岡市　大村正雄

接客に笑顔たやさずいる疲れ
デパートの子どもランチにある慕情
救急車入歯あとからバスで来る

鳥取市　田賀八千代

厄介な胸の振り子が悩ませる
ぐち増えて白髪も増えて母元気
やがて春そして女も芽吹き出す

和歌山市　松本三九

寒椿　折り目正しく生きてます
恋終わる月がやさしく見えてくる
矩形でもそれなりに愛つづいてる

貝塚市　池田寿美子

悪役にもほのかに善意感じとる
ミステリー列車に乗って世相見る
復興の鳥居に伊勢の古材見る

池田市　木村一笛

初夢で絵空事言うおじいちゃん
初孫の寝顔にそっと語りかけ
未来図は若い二人が創り上げ

出雲市　川島和歌子

一人旅　時間が気になる通過駅
カチカチと眠れぬ夜をもてあまし
遠い人今甦り賀状書く

鳥取市　近藤秋星

新大臣　抱負ぺらぺらよく喋り
お代りは出来ぬ施設の雑煮餅
真実を隠さんとして化粧する

静岡市　三浦つね

孫からの初めてもらうお年玉
笑い話拾って帰る散歩道
同居して互いの距離で丸く住む

枚方市　森本節子

まだ大丈夫だろうと三年日記買う
かわり映えせぬおにしめに四世代
ラベンダー一輪咲いて凍てた庭

静岡市　佐藤次枝

同居して見えない糸に絡まれる
寝言だとわかり安心午前二時
ダイアナ妃　世界に苦悩打ち明ける

鳥取市　植田一京

ベストセラー拾い読みして積んである
インタビュー喋る速さを超えて書き
両手に余る欲を抱えてよく転ぶ

米子市　小塩智加恵

遠回りするタクシーは無口です
世界地図買ってタヒチを確かめる
子育てが間違ってない親孝行

鳥取県　津村静枝

好物を兄はあれこれ整える
喜寿の宴図らず子等の語らいで
良い年明け皆に感謝の目がうるむ

岡山県　富坂志重

大雪にうわさ話も底をつき
足先も手先も不満ばかり言う
母の小言　背中に聞かせマンガ見る

池田市　藤井計光

通勤の方程式へ文庫持ち
毒舌も心に宿る粋な人
無理したらあかんと言うて無理さされ

島根県　岩田三和

こぶしきかす根性のうた聞き育つ
息子たち活断層はさけて住む
外国で日本の美徳生かそうよ

岡山市　中嶋千恵子

寒椿一輪さいて和む春
生かされて星のまばたき仰ぐ夜
小さくとも磨けば光る珠を手に

沖縄県　杉谷一栄

乱暴な字になりたがる雑記帳
ねずみより雀を捕って見せにくる

大阪市　平井露芳

飽食でもう飛べないと言うカラス
ドジ踏んだ自分自身に腹を立て

藤井寺市　楠昭子

こう言えばああ言う孫で頼もしい
おいしいのひと言　今日も満ち足りる

寝屋川市　後藤黎之助

嫁の声　義理の電話と思わない
診察券　僕の余命を予告せず

和歌山市　太田木管

もう少し話して行けと墓の父
魚焼くワイフにすがる猫二匹

高槻市　執行稲蕃子

微笑みの順に地蔵に手を合わせ
苔の坂いたわるように息合わす

鳥取市　徳田ひろ子

虚しくて霧笛鳴らしてみたくなる
ハンドルに遊び無いのが欠点で

松江市　鵜飼陽子

宍道湖へ百万ボルト落ちていく
干柿を数えるたびに減っている

尼崎市　岩倉キク子

でっかい夢　話し疲れた三ヶ日
今どの辺を回っているのロバのパン

熊本県　増田一乗

挑まれた孫の将棋に苦戦する
四世代現世極楽謳歌する

大阪市　川久保睦子

一年の邪気を祓うて小豆粥
大和路でかぎろいを待つ明けの月

静岡市　増田扶美

イの一番　合格祈願に初天神
青々と冬菜育てて老い二人

豊中市　岸田知香子

ゴミ置場　空から見張るカラス群
体力のある内　歯医者通います

愛媛県　宮本末子

入閣へ大臣らしい顔となる
大吉のみくじほどにはない師走

松江市　安食友子

場所柄で妖しいネオン悪くない
耳に栓して守り袋を死守してる

広島県　森川抜智

新年はオウム解散すがすがし
わが家で新茶を入れて御来光

富田林市　大橋鐘造

好奇心　開けてしまった玉手箱
毛虫でも明日を夢見て生きている

豊中市　みきわきみ

アル中にならずに済んでる恐妻家
賀状来る空閨守って五十年

大阪市　杉澤　汀

妻病んで新兵の頃想い出す
子の睦月　何事もなく淡路島

千葉県　大川晩翠

都庁まで気勢を上げる幟立つ
初写真　家族の無事を詣でてから

神戸市　船津とみ子

父上の自慢　神戸の水でした
一人旅いつもお水を持って行く

大阪市　三浦千津子

天真爛漫だけで生きてる未熟者
飛び切りの笑顔　私の護身用

泉佐野市　大工静子

捨てよかな捨てるのよそう未だ元気
背を丸め魚の料理を嫁の留守

和歌山県　久保ふみえ

寒中に咲いてる花の逞しさ
搗き立てのお餅のような孫を抱き

倉吉市　大下智子

うまいお茶勘が冴えてる匙加減
子育てはじっくり待てと祖母が言う

米子市　足立由美子

カレンダー半分埋めて始動する
子育ての軌道修正したくなる

兵庫県　倉垣恵美

お仕置きのごと大雪に閉ざされる
なにもかも雪に清算してもらい

鳴門市　八木芳水

耳慣れて口から吐けぬ現代語
千両の灯が温もりをくれる庭

和歌山市　森口美羽

生き残る花の命がいとおしい
突然の別れに狂う不整脈

河内長野市　妹背尽呂久

新社長　不良債権渡される
スタミナを賜わりたいと絵馬に書く

高知県　桑名孝雄

賀状二通あいつと俺の呆け具合
南国の雪は化粧に慣れてない

尼崎市　立谷勇次郎

不意の客　美人で舌がもつれ出す
褒められた言葉じっくり噛みしめる

四十年掛けた保険にうら切られ　唐津市　福島紀一

身勝手がわかった頃の老いの坂　横浜市　清水潮華

ロマンスもあったと通夜の温かい

餌付けしたカラス葬儀で鳴いている　和歌山県　村中悦男

夕あかり明日を信じて鎌を研ぐ

愛憎を越えたく思い鈴を振る　愛媛県　中岡錬三

ポケベルに愛社精神試される

剣が峰　男の美学見られそう　尾張旭市　三浦きぬ

半世紀　海路の日和待ちわびる

写真帳　若い私はセピア色　交野市　山川日出子

クラシック軍歌も知ってる古ピアノ

巡礼の鈴の音に似た寒風鈴　成田市　斎藤房子

雪　雪　雪おんなの炎もえ盛る

綾取りの橋を渡って夢買いに　静岡市　小木久子

風を切る肩　奢りには気付かない

プライドの高さ自分を追いつめる

仲人が勝手に条件つけている　鳥取県　権代康女

無口でも夫婦は同じ事思う

かかりつけの医者を作れと医者が言う　兵庫県　うえむらゆうたろ

現実がこわいオウムの入信者

ポップスの速いテンポに追いつけぬ　鳥取市　山口しげる

火傷した小指が約束したがらぬ

還暦へ名刺のいらぬ役ばかり　新潟県　高野不二

パソコンを食わず嫌いのままやめる

決心がつかずゆれてるイヤリング　香川県　堤くに子

大根も漬け込み母の秋終る

泣きはせぬ打たれ上手な太鼓です　鳥取市　石上悦子

こだわりを脱ぐとやさしい風に遇え

ＯＬのメカの強さに監査まけ　大阪市　中田あい子

月二回　小豆御飯をたく老舗

皿洗い一息ついてお茶にする　兵庫県　中野とよ子

味噌汁が今日の英気を作り出す

来年は旅館でしようお正月　河内長野市　印藤智子

着飾って友の個展に重い足　鳥取市　岸本孝子

冷戦が三日ともたぬ夫婦仲
背を押してくれる夫あり坂登る　岡山市　藤原一平

満ち足りた掌に歳月の音がする
残り火をも一度燃やす風を待つ　島根県　槻谷仲子

失言を後であやまる滑稽さ
福寿草　春へ目出度い色もらう　八尾市　與田明

自販機は数えるように釣を出し
百まで生きたら友達いなくなる　倉吉市　田中八太朗

迎春の賀状と雪が舞いこんだ
お年玉もらう孫より目を細め　和歌山県　中村君枝

見栄張った祝儀袋が威張ってる
将来に毒グモ暗示かけにくる　尼崎市　中澤向西

この道に決めて希望が湧いてくる
思いやり母の忠告には負けた　尼崎市　長浜澄子

お節よりハンバーガーと言う平和
艶やかでなんと淋しい冬花火　札幌市　三浦強一

休肝日先にずらした三が日
深追いをせず弁解を聞いてやる　大阪市　田中せつこ

爪弾けば心のひだにしみる唄
にべもない返事に心凍らせる　橿原市　西本保夫

街頭のマイクも私には向けぬ
正しいのに採り上げぬのもまた自由　倉吉市　山中康子

褒め言葉ひとつ笑顔のおつきあい
スーパーのちらしに負けて閑古鳥　尼崎市　向井末貞一

八十路でも来年へ夢たんと盛る
ひとり居の古巣の老母は頑固すぎ　尼崎市　河津正治

忠告を交え巧みな褒め言葉
力まずに流れにそった墨の色　唐津市　宗弘

清濁を納めて師走春を待つ
傷心の富士の裾野に春よ来い

住みなれた町から出れぬ老いた父母　唐津市　松本　圭

席ゆずるきっかけのがし狸寝入り　米子市　池尾保子

角隠しご先祖様に別れ告げ
玄関に亡夫の靴を置いたまま　和泉市　横山捷也

手紙には書ききれなかった長電話
境界線これよりふみこめない二人　河内長野市　木太久正一

初孫が賀状に載って顔見せる
妻とだけ静かに過す三ヶ日　犬山市　森正

百円で孫の笑顔をまたも買い
客待ちのおでん沸々雪模様　岡山市　山磨行子

孫が去にこれから二人の寝正月
節料理　嫁の一品はなやいで　兵庫県　西井つや子

初詣　神戸を思い掌を合わす
仮設の灯　大きく揺れて一周忌　岡山県　土居ひでの

ねずみ百態　年賀で届くおらが春
おふくろの味噌がうまいと子のお世辞　出雲市　園山かおる

止り木は温い話題で活気づく
神の声聞きたく太い注連をなう　島根県　福間博利

手のとどくとこでゆれてる柿のれん
ボランティア終えてお面をとりかえる　島根県　菅田かつ子

春近しおしゃれして待つ桃の花
それはそれ静かに初日昇りけり　寝屋川市　瀧本八十八

不良債　騙し上手が財を積む
新年の富士にオウムの霧晴れる　岡山市　清水金太郎

麦飯が贅沢だった戦時中
暇だから散歩を兼ねて医者へ行く　松江市　浦辺静江

補聴器の話へいこじ耳貸さぬ
疲れ過ぎ親子仲よく舟を漕ぐ　倉敷市　戸田正志

印刷の文字しか見えぬ年賀状
ちっぽけな自分に朝の陽が当たる　島根県　今川三津江

日本海　荒れて潮ふくバスの窓
サンマ焼く猫二階から降りてくる

秀句鑑賞

—水煙抄

—2月号から

山本義子

一億のひとりと添うて半世紀

斎藤房子

一口に半世紀と申しましても、多々山坂あってのことと存じます。老後の正念場はこれからです。一億のおひとりさまとお健やかにお幸せにお添い遂げ下さいませ。

散る落ち葉　詩になりそうな音で燃え

樫谷郁子

いい音ですね。春には美しく芽吹くことでしょう。人も樹木、草花みたいに芽吹きから落ち葉また芽吹くよう生きその時々ささやかでもいいのです。いつも詩がありますよう。

たまに啖呵で子とのキズナを締めなおす

古谷ひろ子

ご立派です。幾つになろうと親は親でありたい。言うことをきっちり言ってこそ、響き合うキズナと思います。あなたの啖呵にエールを贈ります。

お辞儀する形で母が老いて行く

足立由美子

少しお腰を痛められたのでしょうか。あなたのお優しいまなざしが見えるようです。何卒お大事になさって下さい。

母看取る五度目の冬へ覚悟して

森茂美

また母の句が続きますが、私「母」と言う字に弱いのです。覚悟してと言い切っておられますから大丈夫ですね。あなたも何卒お体にお気をつけ下さい。

しまい風呂　首の骨からまず弛め

古久保和子

思わずまったくと合点してしまいました。一日の終りのしまい風呂も楽しからずや。また明日の活力といたしましょう。

隅に居る意見も数のうちなんだ

福原悦子

そうなんだ。そうなんだ。えてして世の中まかり通らぬことが多すぎますが、隅にいる者も今ははっきり意見を言いましょう。

元旦の計をくすくす笑う鬼

越智青園

鬼が笑うのですからでっかい計画をお立てになったのですね。くすくすですから鬼もほほえんで見守ってくれます。

無理のない歩幅やさしい風に会う

芦田絢子

お互いに無理が利かなくなりました。ゆっくりの歩幅だからこその出会いと幸いがあると信じましょう。

耳打ちは困る大きな声が好き

村上久美子

こそこそ耳打ちする政治はほんと困りものです。住専、震災復興など数え切れないほどありますが、国民の細部に至るまでよくわかるよう大きな声で言ってほしいですね。

極楽で酒買う金は貯めてある

山本正光

楽しいですね。極楽に行くと決めておられますから、きっと良いお酒なんでしょう。彼岸には急がずこの世を楽しんで下さい。

どこ着くか分からぬ舟に乗っている

福永ひかり

それは面白いのです。どこに着くか、誰に会えるか、何と出合うのか、好奇心旺盛、元気に百歳までが目的の一つです。

仏像も欲があるのか手を受ける

太田とし子

仏さまご自身は「ノー」と仰せでございますが、チクリ言ってみたくなるご時勢でございます。情けない限りでございます。

湖水抄

小出智子選

ずっといつも貴方の腰巾着です　出雲市　園山多賀子
責任のない人姑にみな優し　大阪市　三浦千津子
恥多き日を下駄箱にしまい込む　和歌山市　木本　朱夏
鷹の子と比べられたら可哀そう　富田林市　藤田　泰子
たこ焼きを土産に帰る家がある　旭川市　朝倉　大柏
定年へ歩む吹雪の道歩む　五所川原市　斉藤　劦
一本の藁と浮き沈みを語る　砂川市　大橋　政良
ふりむけばタンポポ迷うことはない　和泉市　中川　楓
苦労してますねんと幸せそうに　八尾市　吉村　一風
ボーナスがおどけて妻の手に渡る　鳥取市　武田　帆雀
結び瘤　やっぱり一つひっかかる　米子市　中井　ゆき
願い事亡母よ亡祖母よと身勝手な　東京都　山口　新子
倖せが三歩前から近寄らぬ　米子市　足立由美子
正月に歩と書きだしてから久し　鳥取県　鈴木　公弘
うしろの正面いつもいるのは夫　寝屋川市　籠島　恵子
生きいきと苦労していたころが華　今治市　渡辺　南奉
銃も鍬も握った命がけの手だ　岡山県　小林　妻子
弁解をすれば濁ってくる鏡　和歌山市　福井　桂香
一月十七日残ったいのち皆無口　富田林市　池　森子
鉛筆をきれいに削りお元日　鳥取県　新家　完司

なかなかに艶めくことば古語辞典　尼崎市　田中　薫
遠吠えをふり切っている始発駅　鳥取県　土橋　螢
人見知り激しい幼児のポケット　弘前市　肥後和香子
うす墨で書かねばならぬ父のこと　米子市　林　荒介
愚かおろかを左義長の火になげる　鳥取県　江原とみお
美談をいつも疑ってみる嫌な私　宝塚市　永田　暁風
母と娘が枕並べて通夜の出会い　尼崎市　春城　年代
ポケットをひっくり返して嘘を聞く　和歌山市　古久保和子
ともしびが雨にうるんで春の予感　八尾市　高橋　夕花
裸木の前なら素顔さらせそう　和歌山市　田中　輝子
母だからこそ確信をもっている　和歌山市　榎原　公子
枕木のような役目を全うす（故若宮武雄さんへ）　和歌山市　細川　稚代
前略と書く大胆なラブレター　海南市　三宅　保州
梅林へ道を教えてくれる風　大阪市　本間満津子
被写体のまん中におく好きな人　大阪府　籾山　隆
咲いてから大事にされる冬の花　豊中市　辻川　慶子
男らしさ女らしさのない砂漠　八尾市　宮西　弥生
街灯の影はのれんをくぐってる　横浜市　菱田　満秋
三浪の子にため息は聞かされぬ　寝屋川市　坂上　高栄
家計簿を思うアイロンかけながら　青森市　工藤　甲吉
冬の貨車わたしの駅を出たがらぬ　吹田市　山本希久子
二の足をうながすようにドアが開き　和歌山市　山田　高夫
荒れた手がきれいになってきた余生　大阪市　稲本　凡子
何はともあれ今年も米を作らねば　鳥取県　田村きみ子
耳寄せて春の鼓動をきく更地　尼崎市　田辺　鹿太
俎の表も裏もなく使う　芦屋市　黒田　能子

占いにつと立ち止まる寒の入り　尼崎市　長浜　澄子
リタイアはまだしたくない座りだこ　和歌山市　堀畑　靖子
子孫曽孫母はいずこの夢にいる　尼崎市　春城武庫坊
墓まいりすませた足が寄席へ向く　大阪市　板東　倫子
娘宛の封書をちょっと裏返す　羽曳野市　吉川　寿美
秋の話案山子はあまりしたがらぬ　米子市　政岡日枝子
踏んばった跡がくっきり付いている　島根県　松本　文子
雲速し今できること考える　西宮市　奥田みつ子
風邪の床反省ばかりしています　西宮市　西口いわゑ
父のステッキ遠い形においてある　和歌山市　野々　圭子
絵筆など買うていたのは初夢か　和歌山市　松崎　幸子
七十歳のデコちゃんが居る　わたしが居る　岡山市　川端　柳子
矢印の反対がわも気にかかり　八尾市　村上ミツ子
母の手へ渡ると止まるブランコよ　倉敷市　小野　克枝
揃わない皿を並べて満ちている　西宮市　門谷たず子
遠慮なく門から入る風邪の菌　岡山県　岩道　博友
濁り酒　今年の夢が浮き上がる　鳥取市　冨山　雄幸
夫婦旅腹立つことは覚悟して　大阪市　松尾柳右子
自尊心という虎をまだ飼っている　大阪市　池田　一男
過ぎたるを言うて足らずを笑い合う　綾部市　藤田　芳郎
若い人とおなじ量りに乗れませぬ　大阪市　神夏磯典子
玉手箱が遺失係に届かない　鹿児島県　大山舞鳥影
同輩の訃に勿然と生きなおす　米子市　白根　ふみ
人を許して世界が広くなってきた　米子市　澤田　千春
腹割って話してくれぬ男の子　京都市　松川　杜的
住専のしまつはどなたさまがする　鳥取県　乾　隆風

流れ雲忘れ上手に年を積む　岡山県　矢内寿恵子
デコボコの道ばかり選る夫の靴　和歌山県　杉山　精子
余命表弾むこころで生きていく　八尾市　大内　朝子
4Bで描くと機嫌のよいモデル　黒石市　相馬　一花
かた結び亡母の想いはまだ解けず　富田林市　中井　アキ
日にち薬とて一日が長くなり　寝屋川市　井上すみれ
美辞麗句に返事は書かぬことにする　鳥取県　さえきやえ
解説者が言うと本当だと思う　美祢市　安平次弘道
むちゃくちゃに生きたふたりの足の裏　出雲市　吉岡きみえ
満ち足りているのね鍋の置き方も　大阪市　渡部さと美
チョッキ編む去年出来ないことをする　神戸市　船津とみ子
針供養まだまだミシン踏むつもり　堺　市　桜沢あか里
定年で家を建てたぞ小役人　倉吉市　奥谷　弘朗
ここ一番扇の的をまたはずし　大阪市　大河未佐子
一喝の恐さは頭からしみる　大阪市　上田　柳影
旅に出る妻は三つは若がえる　枚方市　前　たもつ
元朝の海へひたすらなる祈り　阪南市　深日白光子
羽根ぶとん妻とおんなじ夢をみる　松原市　小池しげお
幸せは小さくてよし藪柑子　豊中市　田中　正坊
怒ったら恐いが怒らない亭主　出雲市　竹治ちかし
抱きしめた温みが両の手に残る　鳥取市　小谷美ッ千
空港は近く海外遠過ぎる　和歌山市　池永　正雄
三が日徐々にペースを取り戻す　米子市　金山　夕子
彼岸花　蕾の頃はひたかくす　米子市　石垣　花子
ムルロアの魚は黙って死にました　唐津市　山門　幸夫
誰もいないとお位牌とする話　箕面市　岩津ようじ

思い出の中に抜けない棘がある　藤井寺市　田中　透太
建て前の話ばかり拾う寒い街　和歌山市　青枝　鉄治
右に左に気遣いの皺深くなる　和歌山市　岩本美智子
吹雪く日はドライブマップ見て我慢　鳥取県　西原　艶子
バランスのうえに人事が仕組まれる　愛媛県　中居　善信
微笑みの胸底深く鬼を飼い　弘前市　岡本　花匠
歳月や流れるごとく飛ぶごとく　広島県　田村　新造
強化ガラスにして思い切り恋したい　和歌山市　森口　美羽
黙ってるけれど自信のある顔だ　鳥取県　権代　康女
まだ女希望は捨ててておりません　和歌山市　田中　みね
木枯らしにせきたてられて散る枯葉　八尾市　村上　剛治
無理をして買った指輪がよく光り　唐津市　福島　紀一
想い出を糧に余生の一行詩　和歌山市　山口三千子
お互いを許し小さな城保つ　鳥取市　田賀八千代
ひらがなのように優雅にくらせたら　岸和田市　古野　ひで
落ち葉路心許した友に似て　高槻市　守先　伸子
シクラメン暖かそうに咲いてくれ　寝屋川市　江口　度
目鼻だち絆の怖さおもしろさ　松原市　玉置　重人
惚けてる酸いも甘いも知っていて　阪南市　正橋　正
納得のゆかぬ達磨がスッと起き　鳥取市　杉本　孝男
あれも夢これも夢かと寒椿　堺市　黒田　真砂
引き出しを出しつくしたか余力なし　姫路市　服部　一典
スカーフを派手に結んで喪があけぬ　寝屋川市　太田とし子
忘却があるから生きていられます　鳥取県　岩崎みさ江
三猿も三日続けば気疲れる　奈良市　米田　恭昌
約束にしばられ春が過ぎてゆく　鳥取市　植田　一京

日本を出たなと思う海の色　唐津市　田口　虹汀
デジタルの時計は父にそぐわない　大阪市　北　勝美
夜の静寂　寝るには惜しい刻がたち　熊本県　高野　宵草
無理すればおつりがきっとくる年に　大阪市　川原　章久
一服の清涼剤となる美談　倉敷市　田辺　炙六
まだ本音つつむ流されまいとして　岡山県　山本　玉恵
事なかれ主義の相槌打っている　倉吉市　野口　節子
喝采をするから財布軽くなる　枚方市　濱田　良知
鼻唄のように聞こえる独り言　藤井寺市　中島　志洋
勘定にいつも自分を入れ忘れ　青森県　西谷　鐵郎
善きことは早く悪しきは去らぬ日々　泉佐野市　稲葉　洋
いい話ばかりを提げて母の膝　和歌山市　玉井　豊太
悔しさの残る負け方してしまい　仙台市　川村　映輝
ご破算で明日の大吉待っている　米子市　宇浪屋太郎
母さんの小さい下駄履く里の庭　茨木市　藤井　正雄
笑ってる人には裏がありそうな　香川県　成重　放任
不義理した賀状に軽く頭下げ　横浜市　金森　徳三

多賀子さんの句。「腰巾着です」という言葉に、古いと言われるかもしれないが、夫婦のありようのすべてが籠められて、つぶやくような仕立てに思いが深い。**千津子**さんの句。お姑さんの世話をされている人の、心の綾が見事に詠まれ、言葉に無駄がない。**朱夏**さんの句。下駄箱に靴を仕舞って、辛かった一日に区切りをつける。それだから明日も生きてゆける。**泰子**さんの句。ことわざの一片を取り入れて、母親としての思いを素直に一句にされた。**大柏**さんの句。たこ焼きを買って帰るというだけのありふれたことなのに、何とも言えない温かさと味わいがある。今回は、解りやすく、率直な思いを詠まれた句の佳さに惹かれました。

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころ (62)

橘高薫風

落語や浄瑠璃は目で読むより耳で聴く方が遙かに面白い。それと反対に小説や随筆は人に読んで貰うより自分で読む方が確かに楽しみなものである。

詩歌の世界に於てもそうである。諸君は百人一首朗詠の妙は、しばしば味得されるところであろう。或は啄木集に於て黙読、徒らに頁を繰らるるよりも自ら声を発してその無限に迫る寂寥のリズムを貪られたことはないか。

之に反して最近勃興せる所謂新傾向俳句の如きはどうしても目を通して玩味せねばならぬ部類に属するであろう。

植木屋の梯子の下へ子が帰り　明　珠
肩書が役にも立たぬ十二月　路　郎
戎橋月を眺むるとこでなし　濁　水

これらの川柳から受ける感興即ち川柳味はその目を通じての場合と耳を通じての場合とに於て、何等の差異を発見されぬであろう。換言すれば、これらの活字が構成する迫力とこれらの字音が包含する迫力に強弱の差を認めないというのである。無論この場合の朗詠は、明朗な発声と正確なアクセントを以てなされなければならぬ。畢竟これらの句は読む川柳であり、又聴く川柳でもあり得る。

右の文は明治四十年生れ、八十九歳で今なお本社句会をはじめ川柳活動を活発に続けておられる楊井二南氏の三十歳頃のもの、氏に敬意を表する意味も込めて引用させて頂く。題は「読む川柳と聴く川柳」である。氏はこのあと、読む川柳の例を、特殊の活字技巧を弄した句と、音声のみでは難解の文字を含む句の二つを挙げる。前者の例句

君・君・憂鬱を配ってあるくのは止せよ　路　郎
病ゐんへ行ってなみだの天と地　英　彦
せんりゆうはかなしわたしのかけらをひろふ　静　太

句のコンマがどんな役割を演じているか。そこに作者の何らかの故意が働いていること。「病ゐん」を病院とせず「なみだ」を涙としない用意のよさは奥村丹路氏が本誌の月評で褒めたこと。仮名ばかりの句も、氏が漢字を知らない訳でもなく常に仮名ばかりの句でもないのに、この句の場合漢字を一字も使わなかったところに、此の句の独自性があるのではないかと説明する。そして、耳に聴いても意味はわかるものの、作者が期待している句の特殊性、独自性を認識することは、おそらくインポシブルと叫びたい、と書く。後者、音声だけでは曖昧な文字を含む句の例に

腹立てて来た一団の匂いなり　大　門
完全な愚夫愚婦となり汽車を待ち　乱　耿
心耳漂渺光の走る音聴けり　町　二

何の苦もなくこれらの句を読過することが出来、意味も理解されるが、最初から耳に聴かされたとすればどうであろう、と結ぶ。

次に「聴く川柳」、読む川柳が能動的なのに比べ、受身で味わう句を指すとして

一、会話体とそれを含む句

君見たまえ菠薐草が伸びている　路　郎
生活の為なら煙草も吸いますわ　莞　路

一、強調の語を含む句

五六人どうにもならぬ顔を寄せ　閑　生
酔ってからハッキリ知った彼の恋　みつる

一、滑稽・感傷の句

散歩なら財布を置いて行きなはれ　素　人
粉薬をさみしくなりて吹いている　静　太

紙数が尽きたので補足解説は省略する。

女性コーナー

黄香の花

八木千代選

別れたくないと叫んでから埴輪
影が消えると忽ち転ぶ紙人形
すたすたと今日を昨日にしてしまう

鳩に一瞥されたベンチを動けない　和歌山市　木本　朱夏
鬼になることが私にできる愛　倉敷市　小野　克枝
降って降っての雪と激しさ同一化　島根県　松本　文子
口開けて骨になっても吠えている　和歌山市　古久保和子
やじろべえの笑みに何人救われし　富田林市　藤田　泰子
吹きぬける風をもってる風景画　弘前市　肥後和香子
真剣に米を研ぐのは男達　米子市　政岡日枝子
薄氷　はなし相手をして上げる　大阪市　渡部さと美
遠いまつりの屋台の位置もあざやかに　米子市　青戸　田鶴
失敗をした階段を拭いている　鳥取県　野口　節子
風の無い日は駅に降りてみる　和歌山市　福井　桂香
その上の空気を吸いに木に登る　尼崎市　春城　年代
同心円　仲違いなどせぬように　米子市　茂理　高代
癖のある苗木に価値をつけている　大阪市　神夏磯典子
今日生きた証を残す仏の日　鳥取県　西川　和子
限りなく無色に近い不透明　西宮市　奥田みつ子
気がつけばその他の欄にいる私　和歌山市　榎原　公子
若さとは破調の笛も美しい　八尾市　宮西　弥生
花は花　実は実のなりによく喋る　堺　市　桜沢あか里
私がわたし待ってるまがりかど　大阪市　三浦千津子
春めぐりめぐり畳んだままの羽衣　西宮市　門谷たず子
庭の木と伸びるわたしの目指すもの　河内長野市　植村　喜代
寸劇の見事戸籍を子が抜ける　羽曳野市　芦田　絢子
青空を映す川面にまだなれず　米子市　林　風子
片方の耳がとっても役に立つ　和歌山市　田中　輝子
モデルと同じ服誂える肝っ玉　今治市　野村　京子
惑星になったつもりの愛で居る　鳥取県　岩崎みさ江
花の傘この仕合せを散らすまい　米子市　田中　亜弥
砂時計いく度こころ裏返す　大阪市　本間満津子
ひとときも不真面目だったことはない　和歌山県　小倉　アサ
ひとりになると奇怪になれて面白い　米子市　寺沢みど里
無防備な背なのくぼみから冷える　羽曳野市　吉川　寿美
胸底にわたしの宿が病んでいる　倉吉市　淡路ゆり子
人生に汚点なくしてなんの味　米子市　金山　夕子
欲がまだはなれず危篤繰り返す　寝屋川市　森　茜
風吹いて風になり切る芒の穂　和歌山市　野々　圭子
嗤われて笑顔の出来る岩になりたい　大阪市　大河未佐子
もういいよ大臣さまの揃い踏み　米子市　石垣　花子
椿白くて絆が集うつかの刻　寝屋川市　坂上　高栄
無一文になって残ったこの体　米子市　木村富美子
熟睡の間は罪が消えている　八尾市　高杉　千歩
石五つ祀りわたしも歳をとる　米子市　白根　ふみ
竹の節女の節は哀しすぎ　鳥取県　さえきやえ
　和歌山市　山根めぐみ
　米子市　野坂　なみ
　八尾市　高橋　夕花

三叉路で迷って四つ角で悩む　藤井寺市　高田美代子
木枯らしも淋しいんだね窓叩く　西宮市　西口いわゑ
万年青の実　長い道のり振り返る　大阪市　日阪　秋子
お坊ちゃま育ちのような養殖魚　米子市　林　瑞枝
樹氷ききらきらガラスの城に招かれる　和歌山市　岩本美智子
諦めの指が顎から引きはじめ　寝屋川市　宮崎　菜月
笑いたいお喋りしたい箸の台　鳥取県　田村きみ子
見ていたら窓があくかと待っている　吹田市　栗谷　春子
かす汁の具を切るあたたかい音だ　神戸市　船津とみ子
覗かれたら幸せうんと見せつける　八尾市　村上ミツ子
母さんの玉子焼ならすぐ分かる　米子市　中井　ゆき
コンパスの円なら妥協してしまう　和歌山市　玉置　当代
鑑定に出したい姑の箱枕　寝屋川市　平松かすみ
人ひとり許せぬ冬の忘れ物　香川県　川崎ひかり
刻　刻をかみしめながら今日終える　米子市　足立由美子
手品師の鳩は知らない青い空　熊本市　永田　俊子
幸せな位置で小太鼓打っている　倉吉市　最上　和枝
見捨てられまだくたくたのまま心　和歌山市　堀畑　靖子
生きている欲重くして街吹雪く　弘前市　佐治千加子
大息を吐いたら明日が見えてきた　米子市　光井　玲子
異分子をわたしとねずみ齧ってる　松江市　安食　友子
自分だけ大事逃げ打つもと他人　和歌山市　山口三千子
今夜また残り話すと昼の月　茨木市　堀　良江
春は曙バイオリンの音やわらかく　貝塚市　池田寿美子
歩くんだ靴も荷物もかるくして　米子市　澤田　千春
2Bの鉛筆削ったのはいいが　枚方市　森本　節子

ぜんまいを巻いて明日を待つとする　岡山県　山本　玉恵
譬え話　私の事と言えなくて　寝屋川市　籠島　恵子
願わくばいろは匂えと親心　岡山県　矢内寿恵子
捨て石と思う親切浪費する　出雲市　園山多賀子
ふろ吹き大根ひとりの味になる　大阪市　鍛原　千里
幾たびを化けそこなってお人好し　米子市　木村　春枝
手がそれてマリの行きつく先はどこ　岡山市　川端　柳子
てのひらで愚痴を笑うはホトケ様　弘前市　一戸　ツネ
分身の爪　何気なく切り捨てる　芦屋市　黒田　能子
寒さおさまり椿の蕾勘定する　守口市　結城　君子
新調の眼鏡ときめき連れて来た　富田林市　中井　アキ
凍てついたままのわたしへ春の風　和歌山市　宮口　克子
新春の花　一輪ざしに溢るほど　東京都　山口　新子
還暦へ六十本の赤い薔薇　兵庫県　円増　純子

木本朱夏さんの埴輪の生々しさはどうでしょう。思いがこめられている埴輪は実像になって迫ってきます。最後に血を吐くように叫んだまま、開いた口は穴になり、目は眼窩だけになりました。土偶の哀しみは尽きることはありません。**小野克枝**さんの紙人形は人生の姿です。苦をなぞって繰り返して、それでも雪を被りながらも道のりの証として支えてくれる大切な影があればこそ。光を見つめて立ち続ける紙人形は昨日に裁かれ明日を信じ、その影と今日を重ねてゆくのです。**松本文子**さんには動があります。前の二句は静の形態で、内側の懊悩を抉りだしていますが、現実を歩いてすたすたと今日を通り過ぎてしまいました。からっとした書き方が一層身に沁みて、取り返しのつかない悔恨がじんじん伝わってきます。

艶

園山多賀子選

夢を追う子にだんだんと艶が出る　旋風
艶話時効になったおもしろさ　重人
黒豆に託す女房の味と艶　紀一
後を継ぐあてない鍬の握り艶　鉄治
ユーモアの艶も交えて吐く一句　権悟
姑にまだ及びもつかぬ茄子の艶　寿美
もみ消せば消すほど艶の出る話　久美子
終章に艶を足したい一行詩　京子
艶のある言葉で話す雪月花　博友
水茎のかしこの文字が艶っぽい　強一
焚火の艶に人は黙って掌をかざす　たもつ
母若し慈母観音の頬に似て　久仁於
大臣の椅子を艶聞脅かす　高明
床柱家長もたれた艶を見せ　満秋
艶消しになってしまった法螺話　義男
ボカシ絵の中に昔の艶がある　美代子
艶聞の絶えることない果報者　隆
艶っぽい会話に上気するコケシ　一花
一匙の艶がグラスに溶けている　可住
艶ばなし無縁単身まだ続く　春枝
艶のない安来節では踊れない　俊路
愛されているのだろうか髪の艶　たず子
死んでから聞く裏話艶話　武史
若さには勝てぬと知った肌の艶　庸佑
遍歴のさすが艶ある隠し芸　英壬子
艶っぽい秘話も残して卒寿逝く　よし津
老農はご飯の艶を自慢する　かおる
艶聞に触れて女を取り戻す　みね
博多人形の艶を土産に買うてくる　シマ子
横顔の愁い艶ある過去を持つ　希久子
艶聞を笑って済ます老夫婦　水煙
声だけは未だ艶のある郷の母　美子
艶っぽくうなじで返事する答　正雄
艶やかな老妓にふっと見る孤独　幸夫
艶っぽくなって街から娘が帰る　ちかし
想像に任すと避けとく艶話　杜的
艶のある声して姑が竹を踏む　艶子

佳

そのままでいいのにリンゴ磨かれる　南奉
一人の夜磨き続けて爪の艶　哲子
艶めいた話になると咳が出る　(松)文子
艶のある木偶に一礼しておこう　雄々
七転びしてから変わる声の艶　しげお

人

縁側もみんな鏡にしてやろう　荒介

地

魂を洗った艶が生臭い　螢

天

前頭葉艶に翳りがみえてきた　政岡日枝子

軸

それなりの艶を自負するダイヤ婚

乗る

川崎ひかり選

乗り継いで継いでようやく花の駅　希久子
円周を走る木馬に乗るちちか　荒介
決断がつかず一駅乗り過ごす　寿美
泥舟へ片足だけを乗せておく　しげお
追い風に乗れば俺にも春がくる　勝巳
花びらに乗ってあなたに逢いにゆく　朝子
泥舟に乗ったと沈むまで知らぬ　佳雲
上昇の風に乗れない父の凧　俊子
地下鉄に乗ってコロッケ買いにゆく　隆

伊津志

勝手口小皿に乗って来た噂　旋風
波に乗る船を眺めてばかりいる　あずま
君となら泥舟だって乗る覚悟　克治
親だけが気乗りしている娘の見合い　晴子
幸運が乗せた奇跡のホールインワン　圭一郎
図に乗った失敗談はたんとある　あずき
見切り発車のままでベルトに乗せられる　重人
おもちゃ箱雲に乗りたくなってくる　よしみ
休止符があるからリズムに乗ってくる　久美子
追い風に乗ると情けが見えにくい　一風
コンベヤーに乗れた油断がけつまずく　倫子
才色兼備の女が乗った玉の輿　高夫
安住に慣れて時流に乗り遅れ

タクシーに乗って無言の行をする　幸次郎
神でさえ儲け話に乗る時代　ちかし
乗り捨ての自転車雪に震えてる　雅城
乗りかかった船だよ愚痴は止さないか　みね
乗る人のない過疎の駅風が乗る　ミツ子
飛行機に乗ると無口になる男　武春
順風に乗り大海へ出た惑い　よし津
上げ潮に乗った男の太い眉　京子
次の電車で座ろと脚が訴える　みつこ
相談に乗って下さいからの恋　春枝
孤児の夢遙かに乗せて黄砂吹く　久仁於
母は陽気で遊びごとにはすぐに乗る　シマ子
乗り心地いかがときけぬ霊柩車　とし子
笑い乗せ笑い降ろしてはしゃぐ駅　かおる
柿たわわ子等は帰らず雪を乗せ　てる

佳

乗り換えが上手になった縄電車　杜的
助手席で妻が采配振っている　宵明
点滴がショパンに乗って落ちてくる　満秋
駅前に住んで電車に乗り遅れ　あきら
お調子に乗りすぎ背骨が嗤いだす　たず子

人

不機嫌な喜劇役者と乗り合わす　哲子

地

風だけがふわっと乗った通過駅　美代子

天

平等の権利で乗れる切符買う　土橋螢

軸

生命抱く綿毛を乗せた春の風

ワープロ

政岡日枝子選

ワープロで母上様とあるしらけ　佳雲
話すこと忘れてワープロ睨んでる　アキ
ワープロの年賀に愛がうすくなる　志重
ワープロに老いの想いが載せきれぬ　芳水
ワープロに筆の音痴を助けられ　子龍
ワープロでまず打ってみる名が一つ　たず子
教養のなさをワープロ見破った　艶子
ワープロが漢字の壺を空にする　和枝
ワープロにジョークの温さ教えたい　よしみ
恋文もワープロいいえペンで書く　とみ子
ワープロに話せば愛が言えそうで　シマ子
ワープロは恋にならない美人です　ツネ
ワープロが時々私確かめる　和歌子
ワープロで子供らしくない答え　とし子
ワープロでさよならの文らしくなる　俊路
ワープロを毎日叩き変になる　次男
ワープロの賀状も同じ運を乗せ　四郎
ワープロに取組み人生まだ捨てず　宵明
ワープロづいて腱鞘炎になる年賀　洋
ワープロへカラの頭を掻いている　しげお
ワープロを打って一日黙秘権　保州
ワープロとパソコン区別まだつかぬ　徳三

ワープロは祖父さん買って孫独占　正
世代交替ワープロに席押し出され　花匠
字はまずくともワープロにない温み　勇太
ワープロの断り状が水くさい　雄々
ワープロの年賀状にはキーの音　隆
無機質なワープロでさえ癖を持つ　希久子
時が流れてワープロで来る年賀　重人
ワープロを部屋の飾りにしてないか　ミツ子
ワープロを一人一台持っている　はるお
時流にのった指がワープロ駆使している　寿美
ぼけ防止と言われワープロ怒ってる　舞鳥影
ワープロを買ったら投書したくなり　伊津志
氏を探すワープロが死を出してくる　満秋
ワープロの便り相手の顔がない　ちかし
ワープロに打込む献寿ありがとう　螢

佳

ワープロの詫び状文字は詫びてない　大柏
ワープロの連名で来たいい知らせ　好恵
ワープロを叩く瞳にある若さ　勝美
魚売りが来てワープロの手を休め　文子
ワープロもやさしく打てば響きそう　富美子

人

ワープロに押されて鉛筆が転ぶ　美代子

地

ワープロの風という字は木枯しか　正剣

天

ワープロはワルツの曲をまだ超せぬ　林荒介

軸

産声をワープロ　キャッチしてくれた

初歩教室

題―開く

吉岡美房

四面楚歌開き直ってからの運
土壇場で開き直ってからの運

課題吟の場合、誰もが同じことを考えるものです。この二句、面白い所を見ておられるのですが、同想句となり惜しいので紹介しておきます。なお一般的な問題として、どうしても題を入れようとして無理をされている句を見かけます。題から離れて他の言葉に変えて別の句にするといい句になるのにと思われるものが多いので、今一度自分の作品を見直し、自由吟として生かすことも考えて下さい。

添削句

大門を開き放った新年会　㊦静子
（大門を開けばどっと初詣）

お年玉かくれて開く孫の影　隆
（とびついてそろそろ開くお年玉）

花開き正月らしく床の菊　崇
（元日に合わせて開く福寿草）

いい門と言われて開く時がない　タツエ
（山門は初春の化粧をして開く）

松の内地球の裏で宴開く　雄幸
（松の内地球の裏にある火種）

開くまで開いて後の福袋　雅子
（家中が覗いて開く福袋）

耐え忍ぶ年金暮し幕が開く　孝子
（ささやかな年金暮し初春開く）

窓開けて元旦の風呼び入れる　高栄
（元旦の風を呼び込む窓を開け）

開運のみくじも結び初詣　タミ
（開運のみくじ大吉らしい仲）

開運をマジに願って初詣　ふさ子
（開運を願い続けて初詣）

鏡開き少年剣士の眼が光る　きん子
（歓声は鏡開きの小剣士）

正月の疲れが仏壇閉じたまま　幸枝
（仏壇も開き祝った三ヶ日）

仏壇のとびら開いて語りかけ　よし子
（仏壇の扉も開き初春祝う）

努力して運を開けと教えられ　宏章
（努力して開ける運を引き寄せる）

窓一パイ開け放ちたい庭の梅　武治
（梅咲いて窓一杯に開け放つ）

窓開く雀たわむる庭の春　旭
（窓開き庭の雀に春を聞く）

雪の下開く準備の水芭蕉　辰男
（雪の下開く準備の花芽聞く）

開くまで大きな夢のカスミ草　りつえ
（開花して夢見つづけるかすみ草）

贈られし蘭開くのが待ち遠し　トヨ子
（お見舞いの蘭皆開く回復期）

胸襟を開いて語る茶碗酒　太郎
（胸襟を開いてうまい縄のれん）

胸襟を開いて友と呑める幸　ミツオ
（胸襟を開いて飲める友が居る）

ライバルと胸襟開き話したい　正
（ライバルに胸襟開く余裕持つ）

人柄を見込んで心の窓ひらく　行子
（人柄が父の心を開かせる）

ゆったりと心を開く夫がある　多哥由
（ゆったりと心開ける妻と居る）

幕が開く人文字呑んで初舞台　てる代
（初舞台人の字呑んで幕開く）

幕開き浴びる視線に舞い上がり　叭笑
（幕開き浴びる拍手の中で舞う）

開店だねじり鉢巻乗っている　幸夫
（鉢巻きで客呼ぶ父の開店日）

本日開店ああ日本語はややこしい　勝巳
（本日開店お色直しの度に出し）

週刊誌開いたページ間が悪く　一典
（恥ずかしいページ開いた週刊誌）

本開くあわてる仕草見てしまい　美恵子
（覗かれて勉強部屋が本開く）
家計簿を開き財布の口を締め　ふみえ
（家計簿を開き財布に言い聞かせ）
いらっしゃいませテープの声と自動ドア　美子
（強盗もいらっしゃいませ自動ドア）
酒蒸しだアサリ一気に口開けた　玲子
（酒蒸しの浅蜊一気に口開く）
朝市を開いて過疎の和がなごみ　八重子
（朝市が開く女の逞しさ）
月が出て海は華麗な夢ひらく　三九
（嵐止む海が心を開かせる）
開けゆく世義理も人情も薄くなり　梅村
（世の中が開け人情薄くなる）
開墾碑宅地の中で息ひそめ　方子
（開墾の碑文の中にある哀史）
開発に古墳肩身をせまくする　君江
（開発にブレーキかけた古墳群）
試練いくつそれから開けてくる未来　淳子
（耐え抜いて未来を開く試練かも）
その時を知るアルバムを開いてる　(坂)静子
（アルバムを開くと若い日の笑顔）
老いの知恵道理を問いて道開く　義男
（進む道開くに老いの知恵を借る）
言葉出て愁眉開いた近親者　一乗
（麻酔醒め愁眉開いた妻の顔）

般若経開きほとけと密談す　弘子
（心経を開き仏に近くなる）
開いたら古へ匂う手紙来る　美寿子
（開いたら故郷が匂う母の便）
傷口が開く不倫を公表し　まさと
（傷口を開くスターの不倫劇）
嫁姑の距離は少うし開けておく　ますみ
（距離少し開き平和な嫁姑）
開いたが岩の戸閉じる呪文消え　日出子
（神話から岩戸を開くのは女）
登龍門開く意気ある少年期　俊一
（少年の大志登龍門開く）
目薬のしずくに口を開けている　三重
（目薬をさすのに何故か口開く）
開いた足に天の橋立波しずか　和歌子
（橋立の景は開いた足の中）

表現・着想ともに立派な句

開店の粗品につられ列にいる　孝男
初孫が心開かす嫁姑　黎之助
合格で愁眉開いて初春を待つ　睦子
突っ張りが心開いた保健室　絢子
開花待つ蕾に寒波厳しすぎ　君江
せめぎ合い一歩譲って道開く　忠男
道開く気概歪んだ靴に見る　幸次郎
おはようの声で心の窓開く　ミツ子
初夢で先ず開運の兆し見え　剛治

閻魔帳開けば亡母の味が出る　君枝
頑なな心開いて知った愛　三津子
窓開き心ゆくまで掃除する　方子
往訪の保護司へ心開かぬ娘　捷也
藁苞の温みに開く寒牡丹　志華子
軋む戸をすんなり開ける母のこつ　行子
裏門はいつでも開けてあると母　春枝
暖かい言葉で貝は口開く　三重
子の前でうっかり足でふすま開け　ふゆ子
開けゴマ孫の呪文で開く財布　芳水
お仏壇開いて今日が回り出す　高栄
花開くそんな思いの便り来る　雅子
古希近く開き直りも板につき　木管
開運の絵馬に今年を賭けてみる　武春
あなたを想う胸の片隅開けておく　碧
やわらかい心で開く福寿草　めぐみ
思いきりカーテン開く自己主張　キョエ
受験子を開運グッズとり囲む　幸子
結んで開いてあの清らかさあどけなさ　円女

私の句

胸襟を開いて飲んで風邪をひき
開き直ってみると人間面白い

◇

題「**積む**」3月15日締切り（5月号発表）

宛先　〒583　藤井寺市道明寺2丁目11—4　吉岡美房

老地図壇

毎月25日締切・30句以内厳守　編集部

川柳塔みちのく（前月分）小寺　花峯報

温泉で恨みを少しずつ融かす　五楽庵
人妻と人妻恋を語り合う　甲　吉
恋だけが桃色でなし人生譜　一　花
温泉へ来てからアリバイ考える　北　歩
茸汁ころころ母の味がする　しげる
湯の滝で男　修行僧となる　彩　人
松茸を焼くので換気扇回し　一　閃
人が良いだけでは越せぬ山がある　黙　人
茸雲　青い地球が黒くなる　井　蛙
ふるさとの山から貰う潤滑油　花　峯
この人の子が欲しくなる雨の夜　一　光
子育ての道のり遠く　ははを恋う　ふさゑ
母の手はきのこのように熱くなる　すみ子
ドラマより不倫をしたい私です　雅　子
山の湯にどっぷり浸る逃避行　東　山
ときめきの恋の道から地獄坂　ツ　ネ
バスガイド神話で山を登らせる　蛙痴郎
人間の鼻にも生える天狗茸　雅　城
定年の山越えホッと人生譜　花　匠
老いらくの恋に木の葉も紅くなる　鐵　郎
松茸を一本妻と買う決意　正　徳
パレットに無い色を着て秋の山　龍　人
赤い糸誰が切ったか君と居る　柳　々
岩かげの湯気の向こうは美女らしい　ふじ子

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

お世辞など通さぬ父のノド仏　ひかり
ふところを師走の風に試される　はつ恵
子宝に恵まれ過疎に一人老う　マツエ
手紙燃す煙に遠い人を恋う　くに子
キッチンに灯がついている温さ　あきら
反抗期温情の手を逃げてゆく　吟　笑
影武者を前面に立てぬくぬくと　かおり
懐の寒さに滲みる寒の風　放　任
メモ帳に書いて置き場所また忘れ　よしみ
Uターンした子へ母の温い膝　いさむ
冴え渡る月に見とれて蹴躓く　治　延
遺影まだ何か言いたいように見え　ふ　み
日本中紅葉を見て満足し　チカエ
ハラハラと舞って木立も冬支度　正　雪
割り切れば汚濁の海も泳げそう　坊太郎
旅の宿アルバムに貼る箸袋　文　仙
寒い朝手編みの手袋母の温もり　なみ子

川柳クラブわたの花　吉村一風報

孫帰るああ疲れたと言う本音　シマ子
活発なセリへ夜明けも動き出す　一　風
恋をしてやさしくなった娘の変身　幸　枝
年の暮れ孫活発にガラス拭き　道　子
風邪なおりもとのうるささぶり返す　けい子
ふぐ食べるふところにあり宝くじ　宏
バイバイと笑って最後眠りたい　剛　治
宝船の行く手を阻む不況風　ミツ子
活発がすぎてお嫁にまだゆけず　春　子
活発な妻がときどき不貞寝する　君　江
追い越して活発に行くハイヒール　ますみ
活発に手伝う孫と冬支度　トシエ
活発なあの子も今は人の妻　明　子
友達と言うが本音はまだ言えず　春　江
腕白を活発ねえと羨まれ　まさと
活発な詭弁が仇で身をくずし　泰　成
活発に遊べと言わぬママが増え　幸　子
嫁ぐ娘のショートカットに熱くなる　朝　子
活発な娘しとやか披露宴　友　甫
うろ覚えなんで生き生き唄えます　隆
活発に動く亀だと冷やかされ　美津留
お年玉みな活発な返事する　鬼　遊

溝口川柳会　小西雄々報

手術あと少々いたむ冷える朝　鈴　枝
冷える朝菊を離れぬ薄氷　信　敬
ダイアナも冷えきり夫を喋り出す　康　女
冷え込みへ庭の椿も色を増す　静　江
冷えこんだ家に一輪バラの花　弘　子
冬の虹消えて余韻が冷えてくる　正　光
霜焼けへ朝の寒さがじんと来る　智恵子
過剰米のニュースに心冷えてくる　久　子

冷えてゆく心を止める杭がない　豊枝
吹雪く日を待ちうけている雪女　雄々

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

ボーナスが出たか賑わうマーケット　光水
ポリープの疑い解けて明るいお正月　のぶ子
広告で流行を知る出ずの神　善代
喜寿迎え残る余生を模索する　楽山
迷いから覚めてきれいな月にあう　志重
投げ売りに残らず売れて店じまい　禅心
にっこりと笑えば周りが温い風　秀香
近頃は母に似た背がまるうなる　智恵子
甦る五十年目の教師と子　美恵子
知ってても笑うてばかりお地蔵さん　甫正
面白い話に花が咲いている　種子
面白い顔売り物にして儲け　すみれ
面白う笑うて余生送る幸　伊久栄
面白い技で湧かして舞の海　知世
ひそひそと面白そうに話し合い　旭泉
孫が来て祖母を陽気にさせていに　千代女
店の目がみな生き生きと売れている　吟平
あれこれとやる気があって忙しい　久子
八十路坂やる気の趣味へ若がえり　亜矢
慣れて来てやる気おこした朝の靴　冨士野

川柳後楽吟社　従野　健一報

痩身の骨に命がしがみつき　青銅
元旦のほろ酔い妻の酌をうけ　哲郎
廃屋の主人となってノラが住む　正秀
三ヶ日笑顔絶やさぬ父であり　照路
これという策のないまま回遊魚　美智子
指切りの風の行方を確かめる　幸子
凧糸で引けない愛が逃げてゆく　博友
これからも昔も変わらぬ歩幅です　たけ志
ひそと咲く野草の花にもある主張　桃風
産声が尊い命と宣言し　佐加恵
よそよそしい顔で木枯らし吹き抜ける　吉則
少年の腕に翔べない鳩ねむる　拓治
振り向いて命の重さ確かめる　まさお
太陽も私も生きてる炎えている　玉水
正義の旗振ると胃の腑にたまるエゴ　進
子等のワル大人のワルある限り　吟平
捨て石を想うやさしさあって負ける　道博
吹き溜まりそれぞれ落ち葉独り言　柳五郎
姿見に女は生命かけている　邦季
稲の穂がゆれて知らせる豊作だ　敏明
深い入江で人魚が月の子を孕む　草風
ライバルを地獄へ送る列続く　鮫虎狼
勇み足慎重居士の目が笑う　秋月

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

箸袋ちょっとメモすることがあり　甲吉
父の背を抜いたもやしの親孝行　一路
お袋と呼べる幸せ噛んでいる　健二
パッチワークどんな袋ができるでしょう　隼人
剃った青ニヒルに笑う膝枕　北歩
剃髪の煌く朝は永平寺　順三
朝夕に戦士は二回髭を剃る　霜石
領分をわきまえている蕎麦もやし　正徳
肩書きも一緒に包むのし袋　柳々
点取虫　部活もせずでもやしっ子　花匠
痩せても枯れてももやしに髭がある　雅城
箸袋今日は目出度い膳に乗る　しげる
眉を剃る模索の道はまだ遠い　ツネ
美しい涙で満たす皮袋　祥子
堪忍の袋持たせて嫁にやる　生恵子
塾窓の灯が好きなもやしっ子　きえ子
捨てられぬ石を袋に入れておく　銀波
剃り跡の青さで肩は風を切り　井蛙
欲望の袋大きくなり過ぎる　黙人
剃りあとは海だ　少年期を抜ける　ふさゑ
二日酔い他人の貌で髭を剃る　一花
香典の中味知りたい仏様

佳句地十選（2月号から）

新家完司

首曲げたままで迎える新世紀　あずき
便宜上夫を連れて旅に出る　苑子
肉づきがよくて骨身に滲みにくい　幸子
十年日記いくたり人とわかれしか　正坊
ぺらぺらと喋り続ける負けている　義親
今日も無事夜汽車が響く湯につかり　たけ志
急病に備えて掃除しています　みずき
十二月薬屋さんも風邪をひき　佳秋
いらっしゃいませに陳列からはなれ　頂留子
銀行が潰れたそうでおめでとう　とみお

政治家の恥部を活字が剃り落とす　花峯
疑問符の形で生えるもやしの芽　五楽庵

三幸川柳教室　三宅　保州報

迷いつつ命ひとつに突き当たる　武春
損得を除くと迷いふっきれる　靖子
保護色に染めてあなたを迷わせる　さち子
迷い子になるまい磁石買い替える　正雄
迷路ゆく亀の確かさ信じよう　圭子
勝算が立って視線が迷わない　百合子
すれ違う親の迷いと子の迷い　親路
底抜けの阿呆を演じ丸く済み　満洲子
腹の底何も残さぬ人が好き　美羽
どん底に落ちると恐いものはない　当代
底辺に築いた城が暖かい　初子
腹の底から秋を笑った栗のいが　和子
澄む水の底に生命のシンフォニー　めぐみ
靴の底男の悲哀見え隠れ　貞子
激流の底をゆったり流れよう　秀男
主婦の価値やすくみられている寒さ　孝子
包丁が錆びてお寒い台所　章子
着膨れて恋には遠き女となる　みね
鳩尾の深いところにある寒さ　朱夏
虎落笛　母上如何に在わします　保州
寒菊に揺らぐ心を諭される　千秀
北風の画く絵はどれも前屈み　町子
会わずとも美人と思う筆のあと　よし子
友情に逃げ道つくるペンの先　かず子
紐付きのペンに心が寒くなる　鉄治
再生紙ノートになって頼り甲斐　和代
堪えてきた亡母の文箱がしゃべり出す　桂香
赤ペンが見逃し出来ぬ誤字脱字　三千子
つっぱった日もあり僕の雑記帳　公子
罪消してみても修正液の白　高夫

東大阪川柳会　森下　愛論報

清流の魚はふるさと捨てず住む　文秋
美しく語ろうふるさとはダムの底　恒明
ふるさとへ心は先に飛んでいる　賢子
幸福駅の切符財布ですり切れる　柳宏子
まだ着かぬ幸福運ぶコウノ鳥　東雲
幸福を祈る二人の神の鈴　太一
幸福な老後も家族あればこそ　晋吾
色めきて老舗も変わる城下町　隆
信楽のタヌキが留守をしてる店　真柳
繁盛の店にこだわるねたがある　猪太郎
父の影跨ぐ老舗の古のれん　章久
それぞれのドラマ団地の窓明かり　頂留子
それぞれの願いこもった絵馬並ぶ　庸佑
それぞれの言い分聞けば五分と五分　勝美
未知数に挑む息子にある若さ　雅文
遙かなる空だ息子よ鷹になれ　湖風
自我の出た息子が外す縄梯子　シマ子
男同士フォローしてくれたのは息子　恭昌

南大阪川柳会　金井　文秋報

迷惑をかけない姑で恐くなる　凡子
迷惑を許し合ってる両隣　智子
駅前であやしい餌を播いている　秋子
世話焼きの伯母の厚意が押しつけで　寿美
連続の小言へ欠伸かみころす　萬的
退屈の連続だろう天国は　楓楽
栄養より減塩しろというカルテ　透太
平日も日曜もない土に生き　庸佑
連勝に自分の力酔うている　悟郎
新婚の栄養恥じらう弁当箱　正博
平日の下見へ誤算つきまとう　柳伸
肩書がとれて平日もて余す　柳宏子
招待券なら平日に願います　文秋
お目当ての魚に餌は惜しまない　千里
止まらないクシャミみんなが噂する　直子
本を読む娘我が家の栄養士　頂留子
平日の晴老人会が動き出す　度
献盃をしてリベートをちらつかせ　重人
迷惑はかからんはずの保証印　章久
コマーシャル連続見せて覚えさせ　東雲
犯人と同じ名前で踏みこまれ　良
老母の平日医者の梯子で忙しい　志華子
ドミノ倒しだったよ倒産の我が社　恒明
程々の栄養でよし老夫婦　勝美
はた迷惑一人しゃべって居る仲居　真砂

岸和田川柳会　田中　文時報

梨半分むいて話を切りいだす　鹿太郎
でかい顔歩道半分駐車する　一斎
半分のその半分になった利子　文時
半分はさくらが埋める演説会　甚一

自己保身半分うそも言うてます　冨志子
あの方の半分ほどの知性欲し　ひで
バイブルへ半分ずつの手を添える　白光子
食べ放題敏感に胃を刺激する　けい子
あれ以来敏感すぎる震度一　朝一
核の海地球の痛み敏感に　ダン吉
サラリーマン踏んで踏まれて窓際へ　弘象
同じ轍踏んで大臣棒に振り　洋
健やかに生きたし老いのペダル踏む　呂万
踏まれても弟子は忍の字離れない　東雲
階段の下に踏み絵が置いてある　一弥
堂の暗さへ餓鬼踏んまえた多聞天　萬的
母の旅弁当もお茶も入れて行く　路子
遠い日の豆粕入りの昼弁当　盛之
駅弁が旬を教える京の味　信博
弁当もカロリー計算する時世　辰郎
弁当に優しい母の顔がある　狸村
借りた本返さぬままに形見分け　苑子
この本と出逢って人間開花する　敏光
長生きの本が目につく古希の人　昭二
美しく老いたく今日の本を選る　さよ子
積んどくの本へ妻から出る苦情　通彦

川柳塔打吹　奥谷　弘朗報

健忘症すぐに白紙となる頭　玲子
白紙に書いた命名太郎風にゆれ　勝見
きれいな紙に六十年の絵を書こう　秀芳
風雪に耐えた柱は父の顔　博文
行き過ぎた過去は白紙に戻れない　幸子

梨蹴ころがし河童エビセン食べている　節子
晴れ間から少し真実見えてきた　孝恵
梨売りの娘の方が欲しくなる　螢
秋晴れだドブの掃除でもしよう　とみお
刀疵の残る柱のある自慢　雄々
聞き役にまわって梨をむいている　杜的
頂いた梨ばっかりを食べている　喜与志
一枚の白紙にもある裏表　佳女
火あぶりにしたら白紙に出た秘密　早苗
母からの便りに白紙がそえてある　野草
美味しい梨蜂たちがよく知っている　喬水
正論が白紙の中で雛になる　帆雀
晴れてきたぞ布団干そうか遊ぼうか　きみ子
みんなから大黒柱としたわれる　弘朗

川柳塔唐津支部　久保　正剣報

雛段に座すには歳をとり過ぎた　虹汀
酒飲めば裸踊りもした親父　圭
白黒の差別を嘆くどぶ鼠　久仁於
腰痛の背ではしゃぐ孫の騎手　弘
子会社が待って居るから横辷り　高明
土曜日の夜を泣かせる大地の子　晴子
店頭の日記横目で自答する　あき
大学の孫娘奇麗になって来た　タミ
A面のネズミ律義な顔を見せ　四郎
白雲流れ流れて止まぬ中におり　實
寒泳の焚き火を囲むエネルギー　幸夫
老いの手と頭ワープロままならず　ちよ
元朝のお隣さんも静かなり　ふさ子

お年玉孫の笑顔にもう一枚　青琴
青い空だったと村山退陣す　紀一
趣味一つ増やして呆ける暇がない　治幸
かた言の孫が御慶の初電話　正剣

竹原川柳会　時広　一路報

ヨーイドン今年の干支とかけくらべ　高1史子
犬走る吐き出す息が真っ白だ　中2千枝
幕引いてからの夫婦が面白い　蘭幸
夫婦現役そろそろ齢がものを言う　清水
幸せの予感ふくらむ福寿草　淑子
白菜がほどよく漬かりごはん党　比呂子
損得を捨てると浄土見えて来る　喜美子
胃袋も笑うカメラの異状なし　勲
反省猿になって笑いを忘れてる　臣子
五百羅漢お笑いなさるのがひとり　房子
何よりも笑いが好きで長寿です　喜久恵
四面楚歌笑い袋に救われる　菁居
笑っても泣いても夫婦ゆれている　規代
にらめっこ勝負は何時も僕が負け　節夫
包帯がケラケラ笑うほどの傷　静風
不景気とか店は結構流行っとる　夏喜
店名が横文字となり三代目　静佳
旅の店味見ばかりをして歩く　貞子
売出しに全力注ぐ年度末　八重美
短冊のかかった店に足が向く　栄恵
新装開店うちのビールと同じ味　笑子
円高差益返してくれる店に寄る　螢
人生の幕はまだまだ閉めぬ喜寿　蝸牛

人生の最後の幕は任せます　一枝
紅白の幕の中から祝い節　美佐雄
さあ幕を開けよう春が近いから　一路

川柳岩出　小倉　アサ報

氏神に武運祈った過去をもつ　悦男
大家族母覗いてる鍋の底　綾子
氏神に願うに軽い五円玉　重徳
お正月そこまで来てる筆の先　春子
脇役が揃いひとつの鍋になる　幸子
犬喰わぬ仲も時には氏神を　良一
理屈ぬき氏神信じ鈴を振る　愛子
氏神もバブルの風が寒かろう　精子
鍋つつき始めて理屈丸くなり　和子
包まれたベールを拭う祝い月　保子
伝説は今も鎮守の森に生き　千鶴子
裏山の松竹梅のかざりつけ　哲雄
正月の松竹梅に春が来る　英子
初詣　晴れ着姿の風に逢う　智恵子
鍋みがき磨き女は脱皮する　アサ
鍋の底覗けば生命の音がする　忠雄
鍋囲む噂の美女はほっとかれ　与呂志

ほたる川柳同好会　井上　直次報

スタートは無口が続くぼたん鍋　ただし
スタートに立ったら猪突のみと言う　眞郎
復興のスタート遅れるダブルローン　馬洗
他人事　だがスタートがいじらしい　万之助
八起き目のスタートだった立志伝　源一
スタートはやさしさごっこの嫁姑　喜美子
あでやかにうつむき開くシクラメン　純次
国体の開催府県なぜ勝つの　祥風
花開く何もなかった日のように　桂子
脳の奥あなたの位置は開けてある　しずえ
スタートはいつでも大志を抱いている　久子
この人を信じて開く胸のうち　まみ子
白星だ今年は何かを掴みたい　明光
お人好し掴んだ運をつい放し　吉太郎
雲掴むような話にある魅力　直次
掴まれた手をさりげなくいなすママ　方郎
舞の海掴み損ねて土俵割る　竹二
あのチャンス掴み損ねた悔い残る　正安
ついた嘘妻にしっかり掴まれる　保子
初詣済ませて馬券買いに行く　佳秋
震災地の友から元気な年賀状　博史
福袋大袋から掴まれる　恭子
戸を開けたとたんにあなたおそいわね　英子
行く道は自分で開けと父の背な　つよし
アルバムを開けばありし日の神戸　蛍柳

川柳ささやま　酒井　靖子報

覚めないで欲しい昔の夢だから　恵美
咳一つしただけ薬飲まされる　純子
結ばれた絆をそっと抱きつづけ　とよ子
梅干しを長寿ぐすりと信じてる　とみ子
父と子の湯舟に浮いているマンガ　つや子
二冊目のマンガで仲間にしてもらう　和子
無人駅待つ間幕を持ち歩き　ヒサ子
七人の敵が待ってる朝の靴　八重子
また一人いじめが摘んだ幼い芽　市三
ベストテン一位は阪神大地震　素水
口ひげをはやしてマンガ手放せぬ　美智子
新しい出逢いの春を待っている　末野
待ちぼうけ一人乗車のうしろ髪　芳乃
年の暮れまさかに備え味噌仕込む　多美子
無事着いた電話を待って風呂にする　すず子
恐いほどまさかが当る妻の勘　冨美
のらくろが心の隅でラッパ吹く　可住
切札にまさかの時を秘めておく　靖子

城北川柳会　吐田　公一報

霊苑の未来の住居御影石　義江
待ち惚け灯影の石を蹴って去に　扇帆
同じ目の高さで話す婦警さん　あき子
欲深く考え過ぎて恥をかき　美代子
行楽日きりきり舞いの弁当屋　千尋
コーヒーで僕の本音が喋れない　典子
親たちの高い期待で塾通い　秀夫
欲言えば女の子一人ほしかった　睦子
吊り橋の真ん中で足動かない　政子
犬のリズムにあわせて回る余生です　トヨ子
老いてなお天手古舞の日々楽し　久留美
頭痛する世相めがねの度があわぬ　満津子
無欲にはなかなかなれぬ遍路笠　純子
風雪の大地をつかむ根は太い　史風
八十路坂うす紅さして身だしなみ　登美子
木の息吹きじっくり聞いてる宮大工　ただし

頭数並べて見ても雑魚はざこ　柳影
色即是空色なき風のほの寒し　春蘭
拍子木に安堵一人の夢結ぶ　高栄
丸木橋渡る勇気が出せぬまま　八重
被災地の雑草に舞う蜆蝶　あい子
大木を抱えるあごは横向いて　とし子
花吹雪舞うて敗者は去って行く　昭子
奴凧キリキリ舞いの挫折する　静子
地球儀を回す戦禍の子供たち　一枝
磨かれた北山杉に背をただす　達子
石橋を叩く暇なき世の流れ　白峰
年頭の抱負だんだん小さくなる　倫子
一葉ずつ落とし老樹の冬支度　公一

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

胃の疲れ七草粥に助けられ　明美
わからない政治関心持っている　野草
礼智信だれも教えてくれません　汲香
ふところに重いあの人この人の小骨　荒介
福助を袂にいれて止まらせる　久枝
信じてただから袂を分かつのだ　武子
古写真袂に俺を隠し居る　実満
霊力は長い袂の奥にある　瑞枝
袂から横糸がほこらしく老いる　富久江
大橋のたもとで兵を送ったな　保子
一日一善誓い七草いただこう　八重子
七草に青梗菜も入れて炊き　三千代
七草になって普段の顔になる　和子
七草を摘んだアベック物語　喜与志
真心のごとく絶えない七草だ　諷人
七草を供えて日本の話する　本丸
七草の仲間にもなる仏の座　隆風
息子には太陽系の嫁にする　智恵子
太陽に愚痴も涙も似合わない　ひかり
お得意さんの太陽暦を壁に貼る　公子
太陽に賄賂の両手火傷する　忠良
太陽が見ている嘘がつけません　孝男
風邪ひいて僕の太陽来てくれぬ　一京
太陽が怒るもんじゅのたれ流し　愛恵
陽が沈む縋れるものが欲しくなる　くに子
太陽を背にいただいて控え目に　由多香
太陽を抱いているから頑張れる　みさ江
太陽を崇めるこころ太くする　茂
太陽とゆび切り明日も逢いたくて　かつ乃
太陽と月の間を挟み撃ち　螢

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

海峡や身をよじるたび靴濡らす　薫
靴の泥働き口を選ばない　しげお
靴音も絶えて閑居の枯れ柳　秀夫
帰る道時々迷う父の靴　〆女
靴を干すいつか私に戻る日へ　澄子
古稀のまだガラスの靴が履きたくて　杜的
脱ぎ捨てた泥靴とぐろまく飯場　石舟
エリートの道を走ってきた孤独　マツエ
ジョギングに妻を誘ったのが誤算　源一
走らねば昨日の夢がふいになる　(松)芳子
ときどきは走って試す息づかい　節子
主婦の目がキンキン光る特売場　あきら
特売用に造った品と知らなんだ　東雲
まだ生きるつもりブランド漁ってる　静江
宝石も特売になる年の暮れ　獏沓
特売の玉子がつづく朝の膳　瀧小
消しゴムの屑だけ知っている本音　英一
夢消えてこれでいいのだ日々平凡　よ志子
消しゴムで消えぬものあり恋の傷　光穂
消えかかる炎を抱いて冬の蝶　恵美子
悲しみが全く消えるまで祈る　とみ子
電灯が消え張り込みの目が動く　白渓子
融通をきかしたつもりが仇となり　克治
頑固だが父は我が家の守り神　波留吉
齢ですね愚痴も不満も小さくなる　萬的
することは無いが診察券がある　重人
堅実な足元乱す虚栄心　庸佑
勲章はいらんがやるとも言って来ず　正坊
冬の風心変わりをして荒れる　艶子
無位無官達者なだけが取り柄です　諷云児

川柳高知　川竹　松風報

喪中はがき震災の日がご命日　さち
擦り傷勲章にさせ子の育ち　春枝
どの顔も当てる気でくるくじ売場　有佳
座布団の乱舞の中の土佐の海　竹萌
バーゲンへ路地まで並ぶ主婦の列　子龍
ピカピカの鍋です主婦の誇りです　千鳥
一円硬貨数えて主婦の顔になる　圭風
迷いから覚めると教祖ただの男　菊野

魂胆があって一杯酌いでみる　孝雄
幸せな頃を手酌が思い出す　佳風
握られたこぶしにかくす父の意地　幸泉
握る手に力がはいる良い出会い　幸
手に汗を握って三猿守り抜き　功
再会へにこにこ顔でする握手　松風

ローズ川柳会　山崎君子報

脇役に徹し悔いない孔雀羊歯　てる
炬燵から風を見ている今の幸　ミサヲ
主役にはなれない顔が徒党くむ　みつ子
地震から睨みのきかぬ鬼瓦　藍
二番目の母が主役になる平和　哲子
托鉢に少しはなれて社会鍋　トミエ
夢にでも聞きたや亡友の黒田節　まさお
いくさ終らず無縁仏の兵の墓　武庫坊
ほどのよい酒で波立てようもない　年代
酔うている顔はできない今日の席　いわゑ
裏方も主役の台詞暗記する　はつ絵
レントゲン酒は毒だと軽く言う　民平
なぜ迷う道は一つしか無いのに　キク子
産声に我が家一変した主役　澄子
玉子やき主役のように真ん中に　君子
下戸上戸かも鍋かこむ湖北たび　義子
世紀末主役は鼻にピアスせり　薫風

サークル樺樣　小林一夫報

米びつを充たし何かを探してる　いわゑ
仲人が良き米びつと紹介し　雅子
米拾う指　闇米を憶えてる　みつ子
米櫃に米溢れ核実験続く　薫
僅かばかりよびたい春の粥を炊く　たか子
傍にいて存在感のない人だ　房子
棒グラフ中間にいる人間味　智恵子
歳月よ半分ほどは忘れ去り　希久子
赤ちゃんが泣いている夢をみていた　一夫
誰か来そう　来そうで元日誰も来ぬ　喜美子
日記サボるともう分からない三日前　正坊
靴が喜びそうでことさら枯葉踏む　楓楽
葬の輪の中で繕いものをする　千代
わたくしの後ろ姿に雪が降る　智子

西宮北口川柳会　亀岡哲子報

母さんの手紙とピンチ切り抜ける　澄子
投函の出来ぬ手紙を書く夜更け　佳秋
手紙にはつらいことなど書いてない　能子
ワープロで悪筆かばう手紙打つ　よし津
戦地から来た文遺書になったとは　江美
追伸の一行師から愛の鞭　源一
蜆汁望みは春の章で書く　透太
奴凧望みは大きい方がよい　たず子
まだ望みあるから走り続けよう　芳子
叶わない望み白バラ白いまま　みつ子
高望みしすぎて鏡に叱られる　美智子
身にすぎた望み背負っていた挫折　ひろ子
陰膳へ一縷の望み繋ぎ留め　道胤
氷河期を行く学生に待つ望み　トミエ
望まざりし仕事いつしか天職に　貴代子
血が通う言葉にいのち甦る　鹿太
甦る迷い不惑の年過ぎて　キク子
ボランティア被害のこころして甦る　春蘭
甦る青春五十年目のクラス会　涼子
三叉路に立てば思い出甦る　絹子
雪しきり無人の駅のねぎ坊主　杜的
失語症独りの窓に雪頻り　はつ絵
拍手しきり半分だけを信じよう　香子
冬眠が出来たらいいな雪頻り　義子
誰にでも間違いはある風しきり　房子
牡丹雪頻りに亡母の灯が招く　てる
大みそか湯船を洗うしまい風呂　泰子
幸薄い女いたわる福寿草　佐江子
友の訃も知っているような今日の月　まさお
ボランティアやる気ばかりが先走り　曙蝶

京都塔の会　松川杜的報

もみ殻の下で待ってる青い芽が　瀧小
殻一つ破ってセールスノルマあげ　巨詩
殻破るアイディアほしい町おこし　正坊
その殻を破る力を愛と言う　福子
デコパージュ卵の殻が甦る　杜的
陳情へ綴じた署名をどんと置く　求芽
今年も終る殻を出られないままに　礫
倖せな指で恋文綴じている　百合子
茶殻まき箒が好きな母といる　栄
女の殻脱いで旅情に酔うている　〆女
綴じ忘れた女が一人宙に浮く　豊次
たとう紙の綴じ目に母の愛がある　諷云児

銀杏の卵とじ付く京の膳　圭坊
でっかい夢綴る鉛筆ちびてくる　英一
古文書が歴史を変える袋綴じ　ただし
祖父の辞書私の宝綴じ直す　友熙
お針箱寸法書が綴じてある　芳子
気の合った同士でしたと通夜の席　波留吉
最初から同士と思っていた誤算　白渓子
意気投合女同士で飲みに行く　庸佑
忘年会ここでも雑魚は雑魚同士　飛鳥
冬の蚊が弱まりながら一途なり　てる
糖尿食三度三度に気を配り　笑女
遠景の鉄橋ハイカラな貨車が行く　達子
家計簿買うた平成七年早くゆけ　美穂
自慢話聞かされ酔いがまわらない　武庫坊
アンパンを生涯愛すノスタルジア　年代
秋澄んで我が道を行く万歩計　春蘭
トップバッターイチロー鼠の立ち姿　水客

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

あちこちの瘤につまずくけもの道　晶子
目の上のたん瘤今日は留守になる　朗子
今までは瘤と思った人も逝く　春枝
たん瘤がいじめのサインかも知れぬ　天雀
いつもいつも生活のパターン同じです　のり子
父さんはいつも勉強せえと言う　繭
稼業ありいつものように九時に寝る　夕子
美容院いつものヘア変えてみる　八重子
掌の中の母はいつも味方です　ゆき
ポケットにいつも離せぬ自分の地図　美世

乾杯がすんで何時もの式次第　荒介
アドリブを信じていつもけつまずく　玲子
自販機がいつもの顔を待っている　すみえ
太郎はいつもいじめに耐えているようだ　保子
人間の弱さがいつも絡み合う　てい子
猛犬がいつもいそうな女の家　花子
いつもの位置で仏に線香あげている　亜弥
電話ではいつも話をする夫婦　寿々子
転んで起きていつも刺戟の足の裏　瑞枝
六感がいつも私を追いあげる　ふみ
風のように噂がいつも先に行き　富美子
気配りはいつもの角を曲がる時　恵子
矢印をいつも信じてはいけない　日枝子

川柳塔わかやま吟社　宮口克子報

寿の袱紗ほほえみ添えていく　めぐみ
みな白を目指して白に行きつけず　緑良
ムルロアの海に願いが届かない　さち子
平家村のしきたりにある紙の白　萬的
真っ白い下着で妻の愛を受け　淳太郎
この余白あなたのことを書くために　ダン吉
白黒のけじめをつけて隙間風　利治
自信喪失わたしの白い影法師　射月芳
真っ白いドアー開ければ蘭匂う　誠子
てのひらにせめて乗せよう白い罪　寿子
白黒のめり張りつけて赦しあう　英子
早いめに白旗老いの保身術　紀美女
真っ白の子を染めて行く娘の育児　冨美子
真っ白い船に通うと鳴る鼓動　稚代

三三九度きょう寿を勝ち取った　豊太
紫に金糸銀糸の寿が映える　三男
寿の字が酔ってきた朱盃置く　白光子
寿の判が医療費左右する　美子
賽銭なしで神さん聞いてくれますか　金太
大器晩成願いつづけて古稀の坂　柳宏子
受胎して神に願いが多くなる　和重
願い事叶わぬものと決めて生き　正
乞い願う妻よ俺より先死ぬな　呑天
長生きを願いぽっくりをも願い　好笑
花封筒のびっしり書いてきた願い　輝子
願いごと山ほどあって莫迦になる　栄美子
この人となら願ってもない話　美羽
土と火の調和を願うつぼの彩　佐代子
寿に虚脱の帯を解いて母　アサ
どの色を混ぜても白は戻らない　克子

川柳大阪　坊農　柳弘報

終わりなき恋を続ける老い二人　喜楽
沖縄に基地は要らぬと被告席　叭笑
あの人に寄り添い走り続けたい　太元
税関の目をすり抜けて毒のクモ　末坊
煩悩を括りきれずに除夜の鐘　酔照
二十年妻と走って今日の日々　信酔
終わるまで気長に待とう長電話　柳昌
実力を出しきりあとは運まかせ　美子
今度こそ家族のきずなたばねます　良花
歩いても走ってもいい連れがいる　美花
実力もこんなもんですお父さん　須賀夫

時々は実力行使に出てる妻　まつお
実力の足りぬをカバーする努力　しげお
実力を秘めて続いた蟻の列　洛酔
大震災日本の一年揺れさせた　川童
損ばかりしてる男の無精ひげ　本蔭棒
自分史は未だ終わりたくない切磋　雅巣
定年をスタート台にまた走る　一歩
はら括る男の眉は上を向き　比呂志
もう終わりなどと言いつつ愚痴続く　希久志
走るほか楽しみないのかと聞かれ　ダン吉
電話機を静かに置いて恋終わる　青道
読み終わり本の世界を泳いでる　かよこ
実力者にんまり出番待ってます　敏
ロボットの実力人を消してゆく　美津留
わたくしのレールに終着駅はない　金太
実力者人の温みを知っている　笑風
完走のベベタへ拍手あたたかい　重人
一年目そして神戸の空寒く　柳弘

川柳塔まつえ吟社　恒松　町紅報

慶弔の度に悪筆思い知り　清子
悪筆も見れば見るほど個性あり　陽子
筆太の文字懐かしい父の遺書　雄々
友人の年賀の筆の重み知る　ひふみ
君の手が下手だといばる松江筆　午朗
達筆で口八丁の妻といる　佳江
先人の色紙を飾る春の唄　房子
飾ろうとしない女房で足りている　早苗
溜息を何度吐いたか飾り窓　満江

本棚に飾る聖書にある微熱　多賀子
言葉飾って美しくする別れ　文子
ミニわらじ卒寿の作だから飾る　友子
懲りもせず当りもしない宝くじ　米子
健康の宝を抱いて除夜の鐘　畔
明日光る宝かも知れね石磨く　れいじ
俎を宝と思う主婦になる　瑞枝
宝とは何であろうか空を見る　登美子
宝船舵をとられた夢ばかり　螢
ねずみ算みるみる増える零の数　みえ
ねずみ算赤字をうめる夢をみる　知恵子
遅くまでねずみ同士で飲んでいる　静江
哀しみを溜めたねずみが痩せてゆく　きみえ
米倉のねずみは遠慮などしない　静恵
鍋囲む黒いねずみのほら談義　義良
不器用な男で知らぬ美辞麗句　鶴丸
ほめられて少し華やぐ耳飾り　太泡
ほめられた事を知らないひき蛙　桂子
喉元に溜まってしまう褒め言葉　荒介
大物の器だちゃんと部下をほめ　与根一
ほめられて調子に乗った紙風船　叮紅

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

ジャンプ一番手が届くはず新世紀　まさお
ジャンプして時の流れを追い越そう　正治
ジャンプして水たまりならまだこせる　正子
その先は私次第のジャンプ傘　正一
参加費でいい少しでも飛躍できれば　義芳
父の背をジャンプしてゆく竹の馬　いわゑ

眩しく視つめている少年のジャンプ　(河)芳子
書初めの飛躍の文字のまぶしさよ　渉
我が頭ポンと叩いてひとり笑む　千恵
余生なおなに望むとてかしら芋　求芽
鬼瓦まだまだ頭高すぎる　(松)芳子
ひかりと影が頭の中で交叉する　鹿太
粉雪のふわりと落ちるさびしき頭　薫
頭ごなしに莫迦と言われているいのち　礫
目立つ手話二人に温い風が吹く　瀧小
歳月や目立ち始めた娘の白髪　すみ
ほんの少し目立った頃がありました　比ろ志
今年こそ今年こそはの初めかな　キク子
呆けました言うてて怖い記憶力　弘治
結論が出てから一言いうおろか　颯云児
緋おどしの群れにはぐれて老い一騎　暁風
連れ添うていつかは一人遍路旅　伊三郎
ベラフォンテが扉を叩いている風か　澄子
元旦や新聞一ぱい買い帰る　吉太郎
一人でも笑える稽古しています　杜的
怖がりの男と夜警組ませられ　白渓子
急かされてぶぶでかけ込む昼下がり　一笛
真実の彩で咲きたい瓜の花　ハツエ
あきもせずテレビの前のお正月　昌子
躓いて足の脆さが身にしみる　夢之助

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

見込みある新人だからシゴかれる　柳宏子
八十八の世話で育む一等米　度
人間を一人育てる飴と鞭　欣之

腕白に育ち太陽追いかける　森子
二代目を育てる鬼に母がなる　とみを
育てあげた木々を倒して新興地　弘直
鬼になりぼさつになって子を育て　ますみ
蛸壺へ引きずり込んでいる宝　泰
価値観の違う宝の石磨く　年人
妻の不満宝石箱につめておく　信博
国宝の腕と言われる人嫌い　信治
三ヶ日だけ村正が蔵を出る　祥一
母を写し父を写して子が育ち　シマ子
羽化をする蝶の涙は写らない　美幸
妻怒る何時も女と写ってる　東雲
篤農家トップの米が叩かれる　東川
トップの影孤独と見せぬ胸を張り　洋
せり勝ったトップの椅子の寒い風　一風
悪友のトップに僕の名があがる　恒明
同窓会トップの彼は隅にいる　宏
つらいですトップになって孤独です　和子
人気はやがて私の煩悩から責める　元紀
世渡りをリズムに乗せて人気浴び　美津留
どの子にもやさしい砂場の人気もの　たもつ
出る人気もぐら叩きが待っている　隆
先走る人気に芸のもつれ足　頂留子
人気よぶ笑い袋はあったかい　朝子

富柳会　池森子報

被災して残る余生の無人駅　文子
無視されたあの夜からの笑い皺　アキ
会釈され思い出せない誰だっけ　二三子
亡母に似た仏としばし無の時間　昭子
白い壁落書きしたくなる或る日　鐘造
忘れたい忘れられない亥どしの乱　絹子
つかみ取り小さな手にも意地があり　登子
無念無想うるさいものに除夜の鐘　宗一
美しく老いてゆきたい古稀の坂　方子
寅さんは頼もしそうで頼りない　(伊)勇
指きりしたラストダンスを忘れてる　昭水
無意識の俺のしぐさを子に見つけ　(田)勇
一人居て柿の甘さに取りつかれ　トシエ
無から無の間をひらりとぶいのち　美代子
今日もまた財布忘れたことにする　柳太
手の中にふっくら包む忘れもの　維久子
無口から出る一言が火の匂い　花梢
年賀状欠礼今年も冬の音で来る　紅紫朗
結び目で私に気付いてくれるはず　扶美代
無意識の中で子を呼び母を呼ぶ　悦子
間髪を入れずハートを狙う人　智久
無をひとつひとつ登っていく仏　欣之
孤独感井戸が深くてのぞけない　岳人
木枯らしの真ん中あたりから炎　森子
無医村に来た医者病気になりました　冬虹

倉吉川柳会　谷口次男報

バラ色の嘘抜け道に落ちていた　雄々
抜け道を探って生きる裏稼業　天雀
抜け道のつもり閻魔の真ん前に　よしえ
抜け道を探しています旅の宿　(山)康子
ストレスの抜け道物を買いまくる　和枝
国会の抜け道右往左往する　小生
抜け道をトイレの中で考える　石花菜
抜け道が欲しくて長いコーヒータイム　ゆり子
抜け道のまん中辺で逢うほとけ　秋女
政治家に後援会という抜ける道　独歩
六法全書読んで抜け道探すと言う　菩句
抜け道を考えてたら病気した　智子
抜け道でときどき起きる土砂くずれ　とみお
抜け道の真ん中へんにラブホテル　完司
抜け道にお酒を飲ます店がある　かつみ
抜け道に杭が一本打ってある　喜美子
さてはてなこんなところに抜け道が　寿満湖
強情な男抜け道通らない　秀峰
こっそりと抜け道を出る恐妻家　次男
荒れてきた土蔵へよく効く塗り薬　幸子
片肌を脱いでもよいなこの孫に　(小)康子
縫い物にもみじの手までしゃしゃりでる　玲子

尼崎尾浜川柳会　前田いわお報

チビッ子の挨拶嬉しい散歩道　まさ
心まで温めてくれたご挨拶　向西
若者の挨拶朝をさわやかに　すみ
挨拶に世辞もまじえ初対面　江美
気持よい挨拶をする隣の娘　昌子
挨拶を顎で受けてる回り椅子　勇次郎
初詣　焚火のなかで挨拶し　十四郎
挨拶の震えの声にある誠　夢之助
訥々と筆の賀状のありがたし　ハツエ
紋服で机に向かう祖父の筆　弘治

退屈な男が愚痴を持って来る　六浦
名工も初心にかえる初かまど　末貞一
歳月が初心を変えた顔にする　正治
おはようと明るい幸を持って来る　澄子
今年こそ子供の頃の絵を描こう　鹿太
決意もう初心に戻り顔になり　紫香
辞書引きひき筆が進まぬ手紙書き　いわお

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

流儀などいらぬ茶碗を高く持ち　民子
サービスと山盛りされて手が出せぬ　かつ子
サービスもほどほどにしてと音をあげる　聖子
サービスにもらった大根泥のまま　好栄
ボランティア帰ると按摩をしてもらい　ちよえ
サービスは菊が迎える無人駅　恵美子
すねかじり海外旅行など希い　英子
サービスと言うややこしいおせっかい　はるえ
若き日の恋のかけらを抱いて病み　鈴江
サービスかついでにエコーもとってくれ　博利
ボランティアつらぬき妻はもう八十　清泉
最高のサービスだった膝まくら　白汀

はびきの市民川柳会　榎本　吐来報

適量の酒は体に聞けと医師　和風
迎春へ庭木も容姿整える　昇
限界を知って六十歩き出す　かつみ
お見舞は不得手病室直ぐに出る　晋
二度惚れと晴れ着の妻に言うお世辞　さとみ
善人ですぐ引き金を引きたがる　重人

留守電が達者ですよと告げている　吐来
綿ヒゲの市長サンタは票稼ぐ　美喜
子が育ちサンタも疲れひと休み　りつえ
ほのぼのと仮設にサンタやってくる　聡
寝た振りでサンタの父を見てしまい　志洋
淋しくてサンタを信じてみたくなる　扶美代
人の恋ほっときなはれワイドショー　まつお
さてどれが初恋だったかなと思う　ダン吉
火も風も恋に冷たいことを言う　元紀
雰囲気へすぐに融け込む処世術　一壺
知らぬ間に猪口を重ねて終電車　洞庵
雰囲気を壊すマイクを一人占め　希代司
雰囲気にのまれ毛皮のコート買う　利武
B面でがらりと雰囲気が変わり　美代子
大晦日定めなき世のさだめかな　辰子
猪が去って殺気が消えた大晦日　忠宏
せかせかがだんだん無口になる晦日　昭子
来年の絵を描いている大晦日　金太
大みそか今夜も酒がよくまわる　みつこ
置き薬みんな元気で期限きれ　敦子
期限切れ仏の顔も鬼になる　敏
期限なし催促なしの親の恩　泰子
賞味期限ぎりぎりで来るお裾分け　絢子
期限ない人生だから頑張れる　たけし

翠　洋　会　米田　恭昌報

初めから予想したのが大はずれ　東雲
震災後心を飾るのも忘れ　宏子
初詣おんなに飾るもの多し　鬼遊

老いの日は和顔愛語で飾りたい　楓楽
貯めるコツそっと教えに来たねずみ　英壬子
初心忘れた影に尻尾が見えかくれ　蛙
恙なく夫婦で祝う雑煮餅　叡子
初めから負けてやる気のかるたとり　千歩
夫も子年わたし時どき猫になる　ひろ子
はじめての馬券それからのめりこみ　千梢
干支頭ねずみは自負を持っている　佳秋
身を飾る何ものもなし冬木立　希久子
餅好きでとんと忘れたダイエット　志華子
悲しみに坊さまの袈裟飾りすぎ　さと美
飾っても見映えのしない妻をつれ　真砂
白ばらや二十歳の春の夢飾る　源一
着飾って派手かと妻が聞く帽子　正雄
飽食で抜け穴通れないねずみ　光子
飾り気はないがかあちゃん太っ腹　宣司
日本人嬉し悲しと餅をつき　綾子
着飾ってみても鏡の背がまるい　絹子
虚しさにひときわ派手に身を飾る　みつ子
新薬開発影で支えているマウス　恭昌
飾っても見映えのしない年齢になり　照子

とっとり川柳会　武田　帆雀報

ボーナスを貰った日だけ殿様だ　明美
ボーナスを貰って堅い事を言う　行男
ボーナスが出ると女房が翔びたがる　銀嶺
ボーナスの力で家に風が舞う　多哥由
ボーナスが男のロマン買いに行く　喬水
ボーナスを聞いて年金族愚痴る　孝男

ボーナスもあちこち銀行梯子する　一枝
ボーナスが鎮座するのは三日だけ　輪多朗
ボーナスが夫より多いのはナイショ　ひろ子
広告で買った眼鏡の度が合わぬ　侑里
広告につられダイエットの梯子　正和
疑似餌とは知ってチラシに誘われる　静生
広告の裏から名句こぼれ出す　圭一郎
接待よりも広告料が高くつく　螢
みぞれ降る街に広告ビラが舞う　一京
広告の墓を買うまでまだ死ねぬ　大漁
仲人が誇大広告下げて来る　忠良
人混みにまぎれて犬が見つからぬ　粗粒
スケジュール忘年会で混んで来た　一夫
手の混んだ料理しばらく目で食べる　美恵子
鴨の群れ混んで厳しい冬が来る　舎人
ほのぼのと鎮守の森も混む晦日　和歌子
人混みに埋もり淋しさ抜いてみる　悦子
感情が混み合う時は目をつむる　茂
手の混んだ罠にはまって動けない　一瑶
長寿国日本楢山混み始め　帆雀

川柳ねやがわ　江口度報

小娘が僕の二倍も賞与とり　勇太朗
ボーナスがはいったらしいお隣さん　弘直
ボーナスが妻の魔術で消えた暮れ　シマ子
ボーナスダウン忘年会が一つ減る　恵子
ボーナスが出たなとわかる人通り　頂留子
ボーナスが出たら返すとそれっきり　あやめ
つまずいて今日からやめた急ぎ足　かすみ
コンパスの違いをぼやく急ぎ足　冬葉
急ぎ足でうちを素通り福の神　一風
たこ焼の熱あつ抱いた急ぎ足　朝子
年の暮れ数珠もやっぱり急ぎ足　たもつ
雲は流れ一期一会を繰り返す　時弘
激流のような私の貯金帳　高栄
京友禅川の流れに身をまかせ　日出子
外国まで流れて咲かす恋の花　波留吉
燃え尽きて骸は見せぬ流れ星　一鬼
ゆるやかに流れにどっぷりと漬かる　ルイ子
勇気ある発言それからの流れ　亜成
ふる里の川が無惨にやせ細る　菜月
無惨にも首をならべて落ち椿　光子
水溜りわたしの名刺浮いている　とし子
退職金積んでコスモにだまされる　博泉
夢覚めるそこに無惨な僕が居る　一途
来る来ない花びらは皆ちぎられる　文秋
素うどんで別れの唄は歌えない　吉之助
それらしい言い訳さがす終電車　洋
貸し借りがなくて友情恙なし　英壬子
けったいな一年やった賀状書く　小路
残塁が今年もあった十二月　礫
肺活量負けず嫌いになってくる　度

川柳塔おおとり　上田俊路報

今日という新しい日はもう来ない　真一
新築の香り豊かに年が明け　舎人
新しい手帳わたしの虹をかく　艶子
新しい風がほしくて旅に出る　みさを
新調の背広へ職が定まらぬ　宏章
臆醫りこれが最後と晴れ着着る　道子
若い日の晴れ着タンスで良く眠る　伝住
父さんは晴れ着の値段知りません　余志身
レンタルの晴れ着で夢をふくらます　幸次郎
成人の晴れ着翔びたい顔ばかり　由多香
一日の衒い終って晴れ着脱ぐ　俊路
晴れ着などなくて心に錦着る　孝子
母さんもほんのり屠蘇でほほを染め　銀嶺
お屠蘇よりほしい年玉可愛い手　宗
屠蘇受けて古希の幸せ身に沁みる　登美
幸せをふと噛みしめる屠蘇の味　千秋
屠蘇をのむいのちの水をくむように　佳子

岬川柳会（前月分）八十田洞庵報

口喧嘩解ける温泉四畳半　正美
街中で温泉出たと大さわぎ　孝子
温泉へ一夜で効をと湯あたりし　ヤエ
顔の皺温泉宿で湯のしする　勇
温泉で妻の素肌が若がえり　末吉
好きな事出来て感謝の日を送る　いと
老境の一期一会を温めて　忠男
ひとり身になって女の彩が映え　狸村
飛んでいる娘そろそろ嫁ぎそう　みつ子
何となくひとり身したい時もある　俶子
朱の椀にひとりぼっちの夢を盛る　幸
独身と言って男は生臭い　晶子
ひとり来て川湯につかるあほらしさ　太茂津
喜怒哀楽織りなす綾に楽も添え　良平

手作りでよろこび満ちる母の味　みやこ
よろこんであとで気がつくお人よし　鉄男
喜びを体一杯孫と逢う　年子
七五三フラッシュの中祖母も笑み　龍彦
へそ繰りを見つけ喜ぶ大晦日　悦子
ライバルの不運喜ぶ人の性　とみ
喜びも苦しみもある年の暮れ　庄六
喜びは親子が揃う郷帰り　よし子
奥さんはまだでっかとはおせっかい　洞庵

岬川柳会　八十田洞庵報

地下鉄を出るの不思議な安堵感　みやこ
地下鉄の復興うれしい神戸っ子　狸村
明暗を走る地下鉄ミステリー　鉄男
しめかざり姑が作った門の花　よし子
口喧嘩孫が顔出し小休止　みつ子
プロ野球新外人の出来次第　龍弘
新人はすぐに責任転嫁する　庄六
ほほえみを絶やさぬ稽古ニューフェース　いと
美しい新人が来て花が咲き　勇
新人に甘くなかったプロの水　太茂津
新人が年下だとは限らない　年子
ドラフトでビッグ新人当てた顔　孝子
挨拶にとちる新人頬染める　悦子
ベテランのかげで新人見えかくれ　俶子
新人が議員バッジをちらつかせ　末吉
趣味の道喜寿で新人面映ゆい　正
爽やかな新人目立つビル通り　洞庵
新人のナースの怖い注射針　晶子
新人の頃の初心を忘れない　良平

川柳藤井寺　高田美代子報

運不運背中合わせに持つ男　恒雄
十三日の金曜にする運だめし　しげお
運の向き変って流れ矢が恐い　修六
振り向いた女神とずっとおともだち　和子
運の無い落ち葉ですぐに流される　美代子
運のない群れが賽銭なげている　吸江
おみくじを信じて運は天任せ　二南
娘来て嫁来て愚痴を置いて行く　トミ子
やれやれと言えばくずれてしまうので　扶美代
やれやれと思った油断ねらわれる　春蘭
やれやれの言葉に溶けてゆく疲れ　治子
やれやれと思えば淋し落ち椿　昭水
やれやれと腰を降ろしてからの冬　絹子
遺言を書いてやれやれパチンコ屋　正一
やれやれはできない幕がおりるまで　透太
やれやれの数だけ老いを加算する　和樹
うたた寝の中で仕事の夢を見る　悦子
やれやれと座り込んだらもう立てぬ　昌子
梵鐘をレジャー気分で撞くヤング　史郎
道成寺の鐘は悲恋の音がする　花梢
出合うたび胸の早鐘止められぬ　愛子
鐘つけば銀杏はらはら亡母を恋う　政代
尼寺の鐘は優しい音で鳴る　志洋
就職がまだ決まらない除夜の鐘　昭子
山寺の鐘は召されて還らない　かつみ
除夜の鐘十二神将眠られず　宗一
警鐘乱打あすの日本がたよんない　一屯
やれやれと明日から武器はもう要らぬ　敦子
癖もみなわかり合っての老夫婦　キミ子
鐘の音まだ人生が悟れない　美房

いずも川柳会　園山多賀子報

飛躍した総身に受ける石つぶて　まこと
少年の夢は野茂から飛躍する　青湖
飛躍する姿見せたい母はなし　水煙
飛躍せねばせねば少年笛を吹く　みよ女
雪よ降れ春へ飛躍の夢を抱く　満江
喜びの花一輪を添えて春　義良
喜びも悲しみも知る足の裏　昭二
哀しみの中で喜びだけ掬う　文子
喜びの毬よく弾みよくはしゃぐ　佳江
爽やかな笑顔の妻がいて温い　ちかし
爽やかな心を映す初鏡　房子
飛躍し過ぎると住みにくい地球　正朗
沈黙のよさ反省の爽やかさ　芳子
爽やかに柏手打てば春の音　流石
凧上げの親子の糸は爽やかに　明朗
爽やかなひとときを花と対話する　篤子
白い息吐いて爽やかさが走る　れいじ
爽やかな弁舌何かキナ臭い　幸一
古寺巡礼眉爽やかな飛鳥仏　寿美
幸せになる暦なら信じよう　蘭水
花暦四季を飾ろう種を撰る　多賀子
春の絵を毎日暦を見て暮す　きみえ
今年こそやりたいことがある暦　叮紅

尻少し重い娘が本が好き　草丘
指先で探る点字の読書熱　茂美
手遅れの無念伝わる闘病記　清子
ハイネの詩読む子は恋を知りはじめ　一葉
心を洗う涙を読書から貰う　ちえ
未だ枯れぬ日々乱読の本を積む　裕
読書には縁なき土と五十年　義弘

堺川柳会　河内　月子報

三ヶ日雑煮の湯気にあやつられ　春蘭
大根を漬け込む手だな愛なんて　勇太
テキサスの農地陽が出て陽が沈む　文時
包装紙そのまま使うお裾分け　二南
脇道を歩けば視野が広くなり　紀美女
古井戸の一つが悲話を語り出す　洞庵
切っても切っても憎い男の顔が出る　途子
ずっと空ずうっと砂漠音もない　みつこ
こじんまりと包んでくれた母の愛　りつえ
大根の首の青さを地へ還す　森子
眼があうと包みかくせぬ妻の勘　頂留子
海へ落した恋を深しているのです　こころ
平成八年ほろほろ酔っている瓦礫　美子
ぽつんとひとつ心が落ちている広場　喜代子
大学は出たけど下界　雨あられ　冬虹
広い道出来てうかうか歩けない　摩耶
大根のつまではもはやあきたらぬ　八千代
ナトリウム漏れても嘘で包み込み　梓
警察を出ると一度は振りかえる　彰
果てしない砂漠の蓋は青い空　健吾

切口の白は迷いを許さない　楓
大根の存在感と冬を食べ　春香
ふろしきにずしんと包む弁護士よ　満州
野の花を両手に包みくれました　小雪
包みこんだ棘が時々びてくる　かりん
サロンパス持って背中を出してくる　東雲
正月の顔で白髪を抜かされる　一二三
掌の広さは知っているつもり　泰子

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

老いてゆく音を引きずる夜のスリッパ　薫
スリッパに義肢がてこずる悲しさよ　悟朗
スリッパを食わえ込んでるポチの家　一笛
スリッパを履いてはどこか脱ぎ忘れ　慶子
本当の死因は秘めて心不全　〆女
原因をつきとめました揉めました　重人
原因をつきとめにゆく深い森　きく子
賢いと言われユニークとも言われ　芳子
黒いリボンに立ち止まってる絵画展　萬的
派出所に巡査が立っている平和　紫香
紙コップ握りつぶして席を立つ　蕗児
飽食の猫より賢くなるネズミ　柳宏子
賢いと馬鹿は本音を喋らない　明光
喪中欠礼それから絶えた年賀状　杜的
キャンセルの座席が丁度二つある　白渓子
ニヒルにもピエロにもなり櫂を漕ぐ　ただし
お伽噺の続きをみかん聞きたがる　源一
原因は私でしたとてれ笑い　英子
スリッパに足を取られた胸騒ぎ　寿美子

梅匂う亡父を呼びたし春の景　つえ子
英才教育して人間を置き忘れ　石舟
魅力ある未来を信じ老いを生く　吉太郎
古希の宴　友と数えで子と満で　博史
僕のリストラ会一つやめ二つやめ　正坊

豊中もくせい川柳会（前月分）　田中正坊報

語り部の口調ほのぼの炉が赤い　きく子
乗り換えてほのぼのと聞く故郷訛り　〆女
冬の陣いよいよ出番雪しきり　知香子
ひとりぼっち踏んばっている冬の陣　つえ子
円陣がパワーの炎　束にする　悟郎
陣中見舞士気を鼓舞する菰かぶり　柳宏子
背水の陣ゆっくりと水を飲む　重人
万全な陣容見せたAPEC　一笛
円陣の真ん中にいる怖い鬼　明光
友情は二つに分けたにぎりめし　正坊
運命のわかれ道すっとやって来る　吉太郎
コーヒーも割勘という気の軽さ　慶子
母と娘の話題分かれる十二月八日　登代子
僕が分けた誰にも文句言わせない　蕗児
研究の蓑にかくれた核実験　ただし
震災の年に終止符　除夜の鐘　博史
意地消して素直に回り出した独楽　瀧小
べちゃ靴でゆっくり歩きたい余生　楓楽
兄ちゃんがどんぐり分けてくれた森　寿美子
表紙とれた漫画も暮れの散髪屋　萬的
一陣の風に女神が向き変える　庸佑
ピリオドはしっかり二度と会わない気　英子

本社　二月句会

二月七日(水)午後五時半
メンズファッションセンター

北日本、日本海側は大雪、冬型気圧配置はゆるむ気配も見せぬ七日夕、二月句会は八十七名の参加により定刻開催された。

初めに同人小池しげお氏に昨年度本社句会月間賞永久保持の表彰状並びにカップが薫風主幹から授与された。

次いで一月末亡くなった元同人飯田悦郎氏に一分間の黙禱を捧げる。

お話は阿萬萬的氏。神社の社頭で必ず見かける一対の狛犬について。その歴史をたどり人々から忘れられながらも、ユーモアのある勇壮な姿と阿吽の形相により我々に語りかけているものがある。大陸から渡来し、古くは平安朝後期にその原型がみられる。また大和盆地の東、都祁高原の水分神社の境内には鎌倉時代の一対が昔の姿のままであると言う。

月間賞は川端一歩氏（大阪市）に輝く。

（司会—岳人）（記名—森子・弥生）
（受付—射月芳・楓楽・千歩）

席題「たき火」　福井桂香選

たき火囲んで励まし合った震災忌　洋
寅さんとたき火神戸のいい笑顔　一風
どんどの火焼き芋恋し故郷恋し　洋
おまわりさんもちょっと当ってゆくたき火　保州
自転車を降りてたき火へ話好き　白渓子
海女憩う惚気ばなしに火は盛ん　シマ子
古傷を束ねて未練断つたき火　千歩
ゆらゆらとたき火の向うに泣きに行く　茜
たき火する幼い頃の貌をして　金太
たき火して竹の悲鳴が跳ね返る　愛論
たき火するほども余裕のない宅地　満州
運悪くまた風下になるたき火　庸佑
先細る命たき火であたためる　諷云児
たき火する顔は仕事にあぶれてる　重人
さざんかの香りを消しているたき火　照一
さつま芋ほっこり焼けた焚き火の火　笛生
飽食のたき火に匂うさつま芋　勇太
燃えさかるたき火に罪を投げ入れる　鹿太
春の夢追うてたき火にあったまる　朝子
たき火囲む古稀の眸に明日がある　吐来
童歌日本の四季にあるたき火　射月芳
たき火からもう出てこない童唄　佳秋
たき火の輪たしかに入れた芋の数　英子
遠慮がち犬も焚き火に寄ってくる　ダン吉
落ち葉焚きながら老僧話好き　萬的
たき火してアメノウズメのように舞う　寿美子
大人でも危険なたき火ありますな　哲夫
住専の話題にたき火燃え上がり　金太
ていねいにもみ消す二人のたき火　希久子
一人ずつ闇を背にしてたき火にあたる　薫
たき火する剃りあと青き修行僧　雅文
佳
明日嫁ぐ娘と語り合うたき火　諷云児
早起きのとんどに父の冬がある　照一
落ち葉焚き土もみみずもよろこばす　楓楽
西成のたき火あぶれた手が群れる　信治
恋文のたき火で芋を焼いている　鬼遊
人
墓守のたき火に祈るものがある　幹斉
地
たき火から昔むかしのわらべ唄　蕗児
天
落ち葉焚くいずれわたしも地に還る　たず子
軸
煩悩が燻りつづけているたき火　桂香

兼題「サイン」　門谷たず子選

いじめられてるSOSに気が付かぬ　希久子
寒いサイン朱鷺の消え毒ぐもの来て　洋
うっかりとサイン見逃がしまだひとり　義子
確定申告サイン済ますと腹が減り　信治
名刺のサイン効いたらしくて丁重だ　いわる
さりげない母の合図で父に詫び　一風
あの時の仕草サインだったらし　月子
妻だけに分かるサインを決めてある　金太
奥さんのサインが洩れる電話口　典子

口笛のサインに弾む赤い靴　勇太
署名捺印　本人よりも信じられ　洋
逆さまの切手がサインとは知らず　雅文
連帯状サイン男の賭けがある　満津子
簡単なサインに億の桁動く　弥生
貴女だけ判るサインの伝言板　愛論
手術承諾神に祈ってするサイン　正雄
消灯ラッパ五十年後も生きている　一風
妻のサイン　ノーで押さずにすんだ印　章久
親と子の連繋プレーにあるサイン　柳宏子
口笛がサインか窓がそっと開く　諷云児
飲み過ぎは駄目と妻から出るサイン　萬的
信頼の絆が太いノーサイン　天笑
恋びとのサイン見落す冬の駅　薫
出直しのサインに年齢が重すぎる　弥生
目くばせに気づかぬままの遠い恋　みつ子
悪筆のサインで名前覚えられ　月子
一呼吸おいてサインの裏を読む　英子
青い空　寅さんにも出るGOサイン　萬的
フランスへ届かぬ反核の署名　寿美
目で話す人あり風の街ぬくし　鬼遊
サインはゴー恋の架け橋通りゃんせ　鹿太

佳

ウインクをくれた昔むかしの青い鳥　森子
飲みに行く指で丸描く退社ベル　正雄
住専に眠る千昌夫のサイン　幹斉
終章のサインが出てる急がねば　諷云児
古井戸のサインを軽く見てないか　元紀

人

代役へ舞台の袖が出すサイン　信治

地

椿ぽとりとおんなが冷えてゆくサイン　薫

天

尊厳死の父はVサインをくれた　森子

軸

よいサイン朝の茶柱立っている　たず子

兼題「点」　三宅保州選

親友と気まずくなった早合点　ルイ子
一点しか見えぬ他人のこわい口　狸村
点と線結べば億の金踊る　稚代
点と線わたしに解けぬ抽象画　萬的
大物は互いの汚点つつかない　天笑
共通点あるからうまい酒の味　稚代
満点の男敬遠されている　重人
焦点距離合わないままに添いとげる　楓楽
接点をさぐる夫婦の旅かばん　たず子
そして三年妻に弱点握られる　信治
満点の笑顔夫を掌に乗せる　吐来
慣らされて満点パパに甘んじる　天笑
満点のパパでときどき肩がこる　幹斉
辛い点くれた父さんありがとう　一歩
百点の男になっている余生　笛生
頂点に立つと見えない落とし穴　諷云児
良い点をもらってからの不摂生　満津子
その時に点灯してたのは黄色　しげお
考えるロダンは点をなんと解く　雅文
点滴のリズムといのち対話する　隆

生きるため下げねばならぬ妥協点　正雄
点つなぐあなたが少し見えてくる　ダン吉
一点が思い出せない吹雪の夜　シマ子
一点豪華フェラガモの靴がある　希久子
一点を見つめドンキホーテになる　みつ子
弱点ぽろりこぼしてしまう紅椿　洋
頂点へ登れぬ風と知っている　照一
氷点に岐れる帰路を埋めている　元紀
原点に帰ると風はあたたかい　(長)澄子
冬苺死にゆく人は点となる　薫
濁点が続いてしまう負のページ　桂香

佳

欠点か美点か僕の女ずき　蕗児
句読点欲しく小さな旅に出る　いわゑ
点滴の海よ帰れぬかも知れぬ　美子
仮の世の契りで点線を渡る　森子
因習にあらがう点を打ってみる　蕗児

人

点稼ぐ度にベルトの穴がふえ　月子

地

原点回帰そして鱗を光らせる　森子

天

濁点があるから今を生きられる　鹿太

軸

頂点でひとり歩きをする虚像　保州

兼題「片隅」　川島諷云児選

片隅の隠しカメラに狙われる　白渓子
ロビーの片隅いい話ではないようだ　三男

片隅へ風が運んで来た噂　重人
片隅で油断もすきも無い眼　二南
片隅にいると落ちつく癖がある　朝子
片隅に居りますお酒のめぬので　シマ子
輪に入るチャンス窺う片隅で　ルイ子
部屋の片隅父の名句が生きている　千恵子
片隅へ思い出落とすイヤリング　勇太
片隅の幸せでよい猫抱いて　房子
いやな男とタバコは隅へ追いやられ　鬼遊
住専の怒りをバブの片隅で　いわゑ
終の部屋の片隅答え置いてある　楓楽
片隅の椅子で余生の灯をともす　たず子
あの頃が片隅にあるティールーム　満津子
片隅の味方が敵にみえてくる　鬼遊
ほろ苦い罪の記憶が片隅に　射月芳
片隅で企らむ影が動き出す　千歩
片隅で愛の告白聞く茶房　信治
片隅の記事だが重いいじめの死　ダン吉
片隅でじっと耐えてた柿の種　稚代
片隅で祈りつづける母の絵馬　房子
喫茶店の片隅だった遠い恋　元紀
出さなかった返事が胸の片隅に　満津子
新聞の片隅が哭く尋ね人　桂香
片隅に時々亡母の声がする　みつ子
王様を片隅に置くルノアール　元紀
片隅で別れを告げた日の駅舎　鹿太
夢のある明日をいつも片隅に　幹斉
好き好きとこころの片隅に居るの　かすみ
野仏の小暗き藪の片隅に　薫

良心の片隅鬼が出入りする　佳
片隅にくやし涙の跡がある　洋
片隅でごそごそするだけの正義　森子
隅っこの椅子に無遅刻無欠勤　しげお
嘘も方便罪の意識を片隅に　天笑
人
ジェラシーが潜むポケットの片隅　鹿太
地
片隅の靴はにんげん嫌いだな　(長)澄子
天
片隅の鬼の意見をよく聞こう　薫
軸
片隅で浮き世の風をやり過ごす　幹斉
諷云児

兼題「余り」　玉置重人選

娘の部屋が一つ余ったためとり唄　信治
字余りと字足らずウマの合う夫婦　楓楽
人生の余白彩る夢を追い　一風
余さずに食べてもらった皿の自負　典子
あり余る若さを試すボランティア　三男
余り物詰めこんである福袋　天笑
バラの花余り期待をせぬように　射月芳
ネクタイを突くとポロリ出る余罪　(長)澄子
おくすりが余り出したらワンカップ　かすみ
陽だまりの時計と余った矢を放つ　元紀
昆陽池の白鳥と会う余りパン　信治
神戸へどうぞ愛が余っていましたら　照一
手に余る田んぼが憎い嫁不足　勇太

両の手に余る太めの妻といる　鹿太
余る程ないから知恵を働かす　昭子
有頂天の余り鬼にも味方する　茜
自信家だが余り詳しくない仕事　房子
青春の構図へ力あり余る　萬的
飽食の街に鴉がよって来る　鬼遊
輸入できるうちは食品有り余り　満州
あり余る証拠人形しらを切る　雅文
追伸の余白へ愛を滴らす　寿美
手に余る悩みを易の灯にすがる　諷云児
歩いて歩いて余生のいのちを干している　弥生
夢の余白にうすももいろの花が咲く　鬼遊
余りいい話はしない場末の灯　紫香
修羅抜けた父に余生のベレー帽　たず子
別れ言葉胸に夜道を行く余寒　希久子
余る筈ないと家計簿湯冷めする　正雄
不器用な自叙伝余白たんとある　萬的
そしてまた余り時間は酒が好き　森子
佳
仕合せの余白に雪まつりその他　森子
定年の父にパワーが有り余る　隆
夢の種蒔いて余生の絵はぬくい　朝子
余り重いので影が別れてくれと言う　美子
余ったパンに聖書の影が消えている　元紀
人
珈琲を余し別れことばを撰っている　たず子
地
泣き止まぬ乳房が知っている余熱　冬葉

天

少し余ったお金で夢を買っている　智子

軸

以下余白私の座る場所がない　重人

兼題「うなずく」　橘高薫風選

セロリを噛んでうなずく朝なりき　元紀
うなずいたと思ったが居眠りだった　房子
うなずいて嫁った私は若かった　稚代
聞き役に回りうなずく事ばかり　勝美
その人の立場になればうなずける　保州
春うらら素直にうんと言えそうだ　希久子
西郷ドンのようなうなずき見せて父　たもつ
定年後父はうなずくだけの人　鹿太
のれんくぐってうなずく友情だってある　一二三
税務署でうなずき家で怒鳴られる　典子
絶景をうなずきながら見ています　紫香
辛口の酒にうなずく飛驒の宿　萬的
頷いてはいるが相槌打ってない　太茂津
うなずいてはったが寄付はしてくれず　月子
安心は黄門様がうなずいた　重人
後ろの席でうなずいている師匠　智子
自動ドアうなずくように開くなり　茜
うなずいているのが受話器にもわかる　文秋
うなずいているが心の奥見えず　昭子
鷹揚に頷く　当選したらしい　柳宏子
住専の話うなずいてはおれぬ　ダン吉
主権無視されて一億うなずかず　一二三
うなずいてばかりいるけど思慮の人　一歩
うなずいた弾みに鬼の面割れる　源一
拝んだら観音様がうなずいた　金太
よっしゃよっしゃとうなずきはったお賽銭　満津子
頷いて反対意見考える　天笑
零一つふえてうなずくのをやめる　利武
うなずいてみても何んにもしてやれず　たず子
うなずけば昂りだした妻の愚痴　太茂津
晩学にうなずく事が多くあり　ルイ子
うなずいてくれたか揺れるお灯明　楓楽

佳

目をちゃんと見てうなずいて下さいな　満州
たんぽぽがぽっと咲いたらうなずこう　朝子
うなずいて南の空へ消えた戦友　弘直
うなずいておこう何でも知っている　しげお
うなずいてさてそれからをどう生きる　シマ子

人

うなずかぬ子が教室の隅にいる　希久子

地

うなずいて神がくれたは藥のしべ　寿美

天

うなずいて正座していた龍安寺　一歩

軸

頷けばうなずく友がいてくれる　薫風

（清記—希久子）

阪神文芸祭入選者決まる　第18回阪神文芸祭・川柳部門で、本社同人の小池しげお氏が兵庫県文化協会賞、同門谷たず子さんが兵庫県阪神県民局長賞を受賞した。

いずも川柳会創立七十周年記念川柳大会

とき　**5月19日**（日）午前10時開場
ところ　ビジネスホテル**ハァツ**
（元大社カントリーロッジ）
お話　西田柳宏子
兼題と選者（各題2句）
「緑」　橘高薫風選
「栄」　柴田午朗選
「独」　小出智子選
「古」　小林由多香選
「潮」　小池しげお選
「仲」　林荒介選
「七」（事前投句）久家代仕男 謝選
会費　1500円（懇親会3500円）
欠席投句　1000円（切手100円10枚）
◎事前投句・欠席投句は2句を連記
4月15日までに左記へ
〒693　出雲市松寄下町284　吉岡方
いずも川柳会川柳大会委員会
主催　いずも川柳会

■各地句会だより

川柳塔おおとり

上田俊路

従来の「川柳塔とっとり」の解散後、小林由多香（川柳塔参与・鳥取県川柳作家協会長）を中心に川柳塔同人三名、誌友九名で、品格ある川柳を目指して、平成七年二月四日に「川柳塔おおとり」の旗揚げをしました。

それから僅か一年ですが、その後新人も加えて十五名の会員が和やかに勉強を重ね、最近では川柳塔誌や新聞の柳壇、大きな川柳大会等に会員の佳句が取り上げられるまでに成長し、会としての一応の基礎は固まったと自負しております。

定例句会は、毎月第二土曜日の午後一時から鳥取市勤労者福祉センターで開いております。句会では原則として兼題三題、席題一題を出題し、初心者の会員もおりますので、会長の小林由多香、副会長の上田俊路、会計の西原艶子が指導も兼ねて選者をつとめて来ました。ゆくゆくは他の会員にも選者をやってもらうとか、出席者全員による互選とかで、レベルアップを図りたいと思っております。

また、定例句会以外の行事としては、春秋二回の面影川柳会との合同吟行会で、お互いの親睦を深めるとともに、作品の向上に努めて来ましたが、この交流は今後とも続けてゆきたいと思っております。

会報も発足当時は、ワープロによる手作りの粗末なものでしたが、昨年の九月号からやっと現在の本印刷のスタイルになりました。まだ満足のいくものではありませんが、会の発展に伴って、さらに充実した内容のある会報にしてゆく積りでおります。

会員の年齢構成をみますと、高齢化社会を反映して、昭和一ケタ生れの方が約六割を占めておりますが、また反面、三十歳代の若い会員もおりまして、将来的には若い初心者の会員の育成も必要ではないかと思っております。

この会の名称には「川柳塔」の名をいただいており、また会員の構成も川柳塔同人、誌友の方が殆どで、川柳塔の流れを汲んでおります。したがって、一朝一夕にはまいらないと思いますが、路郎語録の「川柳は人間陶冶の詩」を指針として、「おおとり」の名に負けない飛躍をしたいと願っておりますので、今後とも薫風先生はじめ川柳塔本社の皆様、また各方面の柳友の方々のご指導・ご鞭撻をお願いいする次第です。

句集紹介

花の向こうに

『花の館』鑑賞

木本朱夏

一冊の句集を鑑賞する時、「作者の日常、或いは生い立ちなどを知っていることが、作品の詩因を探る上で大変有効である」という考え方がある。

しかし私は、桂香さん自身あとがきに「一糸まとわず鏡の前に立つ心境」と書かれているように、一冊の句集をもとに一人の女性を解剖してみたいと思う。

句集『花の館』の扉を開くと一面、時ならぬ紫陽花が咲き乱れ読者を立ち止まらせる。

『花の館』にはいろいろ趣向が凝らされ、桂香さんの多趣多芸な一面を垣間みるようで楽しい。

『花の館』には川柳のあらゆる傾向の句の良さ、魅力がちりばめられている。

例えば、

冷奴きょうもお相手つかまつる
上様と呼んでおきます領収書

の軽み。

ヴィーナスも私もすこし太めなり
にんにくを効かせ歯医者へ仇討ちに

の巧まざるユーモア。

僅かなのよクレオパトラと私の差
酔芙蓉きみも五時から女だね

のウイット。

モンローは腰で説明してくれる
やわらかい手だしばらくは放せない

のそこはかとないお色気。

また、ガラリと視点をかえて厳しく社会を批判する。

政治改革あじさいの首重し
国保値上げおばはんは怒ったぞ

等、桂香さんはにっこりと人を社会を斬る。

そしてまたまた女らしくロマンチックに、

消えぬまに渡っておこう虹の橋
美しい椅子にうつくしく睡る

等々、桂香さんの句は自在である。

感情を直截に表現する方法は回避しながら自在に表現する桂香さんであるが、時にナイーブに感情をなぞってみせる。

剝いても剝いてもわたしは玉葱
尽日を花に埋もれていたい日も

等の句にそれらを見ることが出来る。

以上、駆け足でみてきたように桂香さんの句の多彩な傾向は、物事にこだわらない大らかな性情によるものであろう。その大らかさは、食堂の女将という、常に人に接する立場から培われたものであろうか。

友は遊遊わたしはめしを売っている
赤頭巾も狼もいる僕の街

天笑さんがいみじくも『花の館』と名付けられたように、この句集には花の句が多い。

ひまわりの燃える原野が胸にある
背比べしても所詮は水芭蕉

等々行間から芳しい花の香りが漂ってくる。

また、薫風先生の「桂香さんは花である。それも不思議な花である」の書き出しで始まる序文の美しさには、圧倒されるばかりである。

これから川柳を始める人にも、川柳を知らない人にも、楽しく親しく愛される一冊であろう。

スタンスは花いっぱいの野に置こう

この一句に桂香さんの今後の姿勢が見えるようである。

桂香さん、おめでとうございました。

柳界展望

★札幌川柳社は第2回大雄賞に前田芙巳代さん（姫路市）を決定した。前田さんは「川柳一枚の会」会員で第一句集『しずく花』、第二句集『日ぐれ坂』などの作句活動が評価された。

★平成7年度の柳都賞は、山根素蛙（岡山県）、石橋水絵（北海道）の両氏に決定、**1月14日**の新春川柳大会で表彰された。

★'95年度アサヒグラフ新子座大賞が決定した。

好きという大きな毬を渡される　長野　宮本草子

準賞は、峯裕見子・葦妙子・和田あきお・北村幸子・石垣健の5氏。

★第14回番傘いざよいひなまつり句会は**3月10日**午後1時から大阪府社会福祉会館第3会議室で開く。宿題と選者（共選）は、イメージ＝三好聖水・上野多恵子▽このまま＝北沢双舟・神夏磯典子▽苗＝榎本信治・西川景子▽大阪＝久保田半蔵門・森中恵美子、各題2句、午後2時締切、会費2000円。

★'96ふあうすと川柳大会は**4月21日**、午前10時から兵庫県中央労働センターで開かれる。お話は「これからのドラマの目指す方向」音成正人氏、宿題と選者は、花＝吉原湖水▽放す＝川路泰山▽火＝山倉洋子▽遊ぶ＝岸下吉秋▽輪＝安藤まさ代▽打つ＝角本華峰▽原＝ト部晴美▽喜ぶ＝中川一（各題2句）11時半締切。会費2000円（記念品・軽食）。

★NHK学園の川柳九州大会は**5月12日**午後1時から大分県・湯布院町中央公民館ホールで開かれる。宿題と選者（各題2句・事前投句）は、金＝佐藤真砂延▽速い＝坂本柳峯▽木綿＝森中恵美子、席題選者は外山あきら・吉岡龍城。事前投句は投句料1600円を添え、**4月10日**までに国立市富士見台2－36・NHK学園川柳九州大会事務局へ

★NHK学園川柳大会の平成8年度の各地開催予定が決まった。九州大会は別項のように5月12日、大分県湯布院町中央公民館、根上大会は7月14日、石川県根上町総合文化会館、全国大会は11月10日、東京都国立市くにたち市民芸術小ホール、四国大会は平成9年2月2日、愛媛県松山市総合コミュニティセンター。

★打吹川柳会（奥谷弘朗会長）は1月から会名を「川柳塔打吹」と改めた。

新同人紹介

西谷鐵郎
―甲吉・五楽庵推薦

榊原彗心
―薫風・みのる推薦

▽同人消息△

■井上柳五郎氏（岡山市）は、昨年11月の岡山市民の文芸で市長賞に輝いた。

ほんとうのことしか言わぬのもこわい

■渥美弧秀氏（富士宮市）の作品「刻も水も流れる中の命哉」が高橋伸忠富士宮医院長が「岳南朝日新聞」に掲載したエッセー〝院長室の窓から〟に紹介された。

▽出版△

■橘高薫風川柳句集『古稀薫風』（B6判226頁・沖積舎刊・3000円）新旧の作品999句を収録。

■川柳句集『花の館』（福井桂香著・B6判176頁橘高薫風序・河内印刷刊）

▼訂正▲

■**1月号**＝P7下段1行目「阪東倫子」→「**板**東倫子」

■**2月号**＝表②下段4行目「ございました」→「**ご**ざいました」▽P80上段1句目（苗香の花欄）「海底に届く手紙を書いている」→「海底に届く**絵葉書かいて**いる」田中輝子

3月各地句会案内

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	1日(金)午後1時から 喉・招く・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－17　春城年代
堺川柳会	7日(木)午後1時から まとめる・自分(共選)	堺市総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2－16－3　河内天笑
川柳塔 まつえ	9日(土)午後1時から 受ける・掴む・出会い	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
川柳塔 わかやま	10日(日)午後1時から 夫婦・増える・気配り	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111－2　牛尾緑良
八尾市民 川柳会	10日(日)午後6時から 組・舞う・ヤング・積む	八尾市文化会館4F　近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1－15　宮崎シマ子
西宮北口 川柳会	11日(月)午後1時から 片方・つぶやく・ふくよか・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市段上町6－6－2－202　奥田みつ子
ほたる 川柳 同好会	12日(火)午後1時から 励ます・ゆっくり・雑誌	豊中市立蛍池公民館　阪急宝塚線蛍池駅西へ150米 〒560 豊中市蛍池中町3－10－28　井上直次
南大阪 川柳会	15日(金)午後6時から 悪質・快感・策略・退却	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2　金井文秋
岸和田 川柳会	16日(土)午後1時半から 見得・無傷・名声・目的	市立福祉総合センター2F　南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610－85　芳地狸村
川柳 ねやがわ	17日(日)　正午から 近所・トップ・敬遠・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
もくせい 川柳会	18日(月)午後1時から ドラマ・座る・のらくら・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	21日(木)　正午から 悪い・腕・エリート・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3－8－8　川島諷云児
東大阪市 川柳 同好会	23日(土)午後6時から 廊下・音・脱ぐ・パスポート	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3－21　片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	24日(日)午後1時から 唇・ランドセル・惨め・策	羽曳野市立陵南の森公民館　近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏
富柳会	28日(木)午後1時から これから・花冷え・自由吟	富田林市立中央公民館　近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1－10　池　森子
京都 塔の会	28日(木)午後1時から 荷・探す・模様	ラボール京都　阪急西院駅東へ400米 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町　都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★今年の正月は、どこへも出かける予定がなかったので、宮城谷昌光（みやぎたに・まさみつ）の近著『孟嘗君』五巻を積み上げ、もっぱら読書三昧で過した。戦国時代の斉の公子の子として生れたが、いくたの辛酸をなめて成長し、斉国の名宰相としてその名を残した孟嘗君の伝記小説で、重厚な力作に堪能した。

★作者は昭和二十年生れ、『夏姫春秋』で第一〇五回直木賞、『天空の舟』で第一〇回新田次郎文学賞を受賞しており、『重耳』『晏子』（何れも三巻）が代表作とされている。私はある作家に惚れると、書店・図書館で入手できるかぎり読みまくる癖があり、十数冊は読んでいる。

★彼はまた、新潮社の雑誌『波』に毎号、「史記の風景」と題してエッセーを連載しているが、ここで紹介されるエピソードがおもしろい。「晏子（あんし）、養生を管仲に問う」とあって、晏子が春秋時代の斉の宰相である管仲に長生きの法を聞くのである。管仲の答は、一言でいえば、「之（これ）を肆（ほしいまま）にせんのみ」とある。

★自分の思ったとおりに生きればよい。そういう生き方ができれば、十年二十年という短い人生であっても長生きしたと言える。それにひきかえ、思ったとおりに生きられないのであれば、たとえ百年千年の長い人生であっても、長生きしたことにはならない—彼の作品の主人公は、正にそうした人物である。私たちも心したいものである。（正）

ひとこと

川柳はどこへ

川柳とは五七五の十七字で人間を詠む短詩型文芸である—と誠に分かりやすい。さらにできるだけ平易な言葉で表現する—とこれまた実に有難い話ではないか。そもそも川柳は庶民に興った文芸？であることからしてみれば、当然の見解であろうと思うのだが、現実はさてどうであろうか。

字数などには全く無頓着なものから、抽象・前衛などと呼ばれる難解なものまで実にさまざまな手法を駆使した川柳が蔓延しているではないか。旧態依然の体質に満足できない気持ちは分からぬではないが、あまりにも飛躍逸脱した技法にはついていけない。庶民の川柳をどこへ持って行こうとしているのか。川柳もやがてピカソのような狂態芸術にまで昇華されて行くのであろうか。（早川盛夫）

○「どんな風にして、句を作りますか」と尋ねられたことがある。締切や句会が近づくと、孫が「川柳のお部屋」と呼ぶ、雑然とした家事室に籠り机に向う。宙を睨んで長考しても、一句も浮ばない時は、ちょっとした気分転換をはかってみる。お茶を入れる、やり残した用事を片付ける、郵便受を見に行く、など…。

○こんなところが、まあ私の作句姿なのだが、それで句の出来る保証は全くない。かえって道を歩いている時とか、台所に立っている時などに、ヒョイとひらめいたりする場合が多い。

○そうして産み出した句は次の段階に入る。「句は選者と共に作られる」と言われるように、選者の出番になる。「抜けた」句が必ずよいかどうかの問題はさておき、抜ければうれしいのが偽らざるところ。選者との相性や、運的な部分は天に委ねて句を提出する。

○ある時、二人のベテラン氏に、抜ける秘訣を教えてもらった。句箋（柳箋）に「祈る」と、もう一人曰く「念力をかける」。

○二人とも冗談でなく、マジだったのでなにやらおかしかった記憶がある。私も時々真似ているが、効果のほどはヒ・ミ・ツ。（ふ）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**5月号**）　地名　　雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人　・　**誌友**　マルで囲んでください。

きりとりせん

「川柳塔」への投句について

① 川柳塔蘭への投句は同人、水煙抄欄への投句は誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限ります。

② 両欄とも、この投句用紙を使って8句をお書きください。

③ 渺湖抄欄・茴香の花欄および課題吟（一路集）への投句は、同人または誌友に限ります。ただし、茴香の花欄は女性だけです。

④ 各欄への投句は、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。

本社3月句会

とき　3月2日（土）午後5時半
ところ　メンズファッションセンター3F
中央区内本町1－1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点南西角
◎会場の都合により予定が変更されました。

兼題「コップ」　木本朱夏選
「害」　松原寿子選
「島」　西口いわゑ選
「光」　西出楓楽選
「足」　橘高薫風選

席題　1題　当日発表　各題2句以内
会費　500円

本社4月句会　8日（月）予定

兼題　「絵葉書」「子　供」「散　る」
「居　間」「土　産」

作品募集

5月号発表（3月15日締切）

川柳塔（8句）　橘高薫風選
水煙抄（8句）　西田柳宏子選
渺湖抄（3句）　小出智子選
茴香の花（3句）　八木千代選

課題吟（3句）
「辞　書」　成重放任選
「抜　く」　中原諷人選
「溶ける」　波多野五楽庵選

初歩教室「積　む」（3句）　吉岡美房担当

6月号
課題吟「庭　」「履　く」「マンガ」
初歩教室「散　る」

夜市川柳募集

第10回「器　」　波部白洋選
ハガキに3句　3月末締切
投句先　〒593　堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「酔　う」　河内天笑選
ハガキに3句　3月10日締切
投句先
〒540-01　NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表　3月23日（土）午前11時5分
からラジオ第1放送（予定）

西日本文字放送作品募集

課題「旅　」　橘高薫風選
ハガキに3句　3月15日締切
投句先
〒540　大阪市中央区谷町2丁目2－20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

定価　六百円（送料76円）
半年分　四千円（送料共）
一年分　七千九百円（同）
平成八年三月一日発行
編集兼発行人　橘高薫
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二－一〇－一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六二六－六九一四番
振替　〇〇九八〇－五－三三三六八番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成八年三月一日発行（毎月一日発行）

月刊 オール川柳

毎月２５日発売!!
Ａ５判　定価８３０円（税込）

大好評!!

句会、投句の必勝法！
入選句の条件
こんな句が抜ける！

投句募集！
読者柳壇／選者・大木俊秀・八木千代・山本翠公
ジュニア柳壇／選者・卜部晴美・江畑哲男
誌上吟行会／選者・野口初枝

話題の連載！

忘れがたき柳人たち	東野　大八
古川柳講座	渡邉信一郎
現代川柳入門講座	片岡つとむ
川柳賞翫	高峰　一郎
川柳はみだしある記	田中　佳宏
うめぼし柳談	大野　風柳
難波利三の行雲随話	難波　利三
弥平の或る風景	石丸　弥平
時事川柳我楽多ノート	柏原幻四郎
連載随筆　柳言悲語	岩井　三窓
快的私論　筆乱小論	横村　華乱

お申し込みは書店、または、当社直接定期購読でお願いします。

〒５５６大阪市浪速区恵美須西２－９－15㈱斉藤編集事務所内
月刊オール川柳社
TEL 06-634-5548 FAX 06-636-3832　郵便振替 00980-2-22728

本のことならご相談を…

●川柳・俳句・短歌集
●画集・写真集・絵本
●社史・小説・エッセー
●創業・喜寿を祝う記念誌
●故人を偲ぶ追悼誌
●郷土誌

図書出版　教育情報出版
〒557　大阪市西成区千本南1-12-8
☎06-658-8741(代)　FAX. 06-652-2928

雑誌　05703—3